
閃光のアシュマ 第三話 イルドラとイルドリア

高岡 佳史

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

閃光のアシユマ 第三話 イルドラとイルドリア

【Nコード】

N5531F

【作者名】

高岡 佳史

【あらすじ】

アシユマに古い友人からノリトレアの自治領『イルドリアの武芸大会』を誘われる。アーチエルと二人で行く事になったアシユマは、途中トラブルに見舞われてテロリスト犯と間違われる事に。一方残されたヨディー一行も貿易港イルドラで悪漢に追われる少女と行動を共にすることになる。果たしてアシユマ一行の運命は？SF剣戟冒険アドベンチャー第三弾！デュエリストアシユマ『第三話イルドラとイルドリア』ただ今参上！

主な登場人物

主な登場人物

アシユマ・アトー

この物語の主人公。

本名をアシユマ・アトー・シヨアク・アシユオンと言う。

オリジナルナンバーと呼ばれるイムフレーレの残した生命体。

イムフレーレとは過去地球に訪れた来訪者。

年の頃は二十三丁四。

ザンバラにきられた、少し濃い目の栗色の髪の毛。

しなやかで猫科の動物を連想させる鍛えられた肉体。

彫の深い端正な顔立ちに、髪の毛と同じ色で、深い影と虚無感を湛えた瞳。

どこか暗い影を刷いている、美形の青年。

謎の多い刀、『万人殺しの妖刀・鬼虎』を遣う。

アーチエル・ナヴィア・アップルトン

栗色の長く伸びた髪の毛に、栗色の潤んだ大きな瞳と、濡れた様な桜色の唇を持ち、黙っていれば人形かと思まごうばかりの美形の少女。

レキシタニア王国の王女である。

ただ、人形の様にと言われれば冷たい印象を与えがちだが、見てみれば温かみがあり優しい感じのする少女で、事実、その通りの物を持つ少女である。

破壊の権化『バヴエル』のキー。

それが故に様々な勢力からその身を狙われる。

やはり、イムフレーレの残した生命体。

アシユマとは恋仲。

オルバニアン・マグマイヤー

本名をルーラン・ナル・テルドリニアナと言う。

ノリトレアの正式な王位継承者なのだが故あって今は銀龍号で寝起きをしている。

刀と銃、両方にいいセンスを発揮しまた、魔導機兵に乗らせれば右に出る者がいない程の腕を見せる。

また、好むと好まざるとに関わらず、喜怒哀楽のはっきりした性格である。

ヨデイ・ヨフル

サイコ・フライヤー『銀龍号』の艇長。

年の頃は二十五、六。

紺碧のストレートのロングヘア、細面でどこか人懐こい顔立ちをしている。

この若者普段は馬鹿な事ばかり言うが、時々剃刀を思わす鋭い事を言っでは皆を驚かす。

その正体は、盗賊『ダスト・モンキー』

アルミナ・ラ・シア

言いたい事は、はっきり言う。

口の悪いのが玉に瑕。

戦利眼なる特殊な能力を持つ、身の丈程の大剣使いの少女である。顔かたちは目鼻立ちがはっきりとしていて、きりつとした美少女である。

眼帯を取って両目が開けば赤い眼と黄金に光る眼が見れる筈である。

女賞金稼ぎで、別命『隻眼のアルミナ』

エファール・ソーフア

年齢は二十三。

アシユマの事を好いているがアーチエルがいて思う様に手が出せない。

剣の実力は折り紙付き。

レディール・エレノイと言う別命を名乗っていた事もある。

『閃光のワルキューレ』とは彼女の事である。

アベニ・ロー。

以前はどこぞの国で草スパイをしていた。

歳は老いているが、腕は確か。

今は、故あって銀龍にいて、ヨディ付きの間者になっている。

皆に言わせれば影が薄いのだが、それが忍びの者にとっては眼目であるといって喜んでいる。

色々と重宝している様だ

ドクワント・ネルゼイ警部、

国際警察機構の警部。

下はジーンズにスニーカー、上はTシャツにミリタリージャケットと警部と言うわりには意外とラフな格好をしている。

怪盗『ダスト・モンキー』捕縛に情熱を燃やす。

ハリー・ウォルテ

ネルゼイ警部の同僚。

麻薬Dトランスの捜索をしている。

ビッシュ・ノマン

アシュマの古い剣友。

今回アシュマをイルドリアに誘ったのは彼。

フィナ・エマル

ビッシュ・ノマンの弟子。

美少女。

ノナ・イルマ

売り出し中の歌姫。

悪漢に付け狙われる。

こちらも美少女。

アーヌ

鬼虎でも斬り裂けぬ硬い鎧を身に纏い、アシュマを付けねらうド
ートネーゼ・ネルファバーゼ配下の剣の達人。

その腕はアシュマと拮抗する。

ドートネーゼ四人衆の内の一人。

アシュマ最大のライバル。

ガルマイン・デッド

自ら手に入れた遺跡『バヴェル』を以って、世界制覇の野望を持
つ男。

アーチエルを付けねらう。

ノリトレア王国の武芸師範。

今はノリトレア王国の関白に納まっている。

ルーラン・ナル・テルドリニアナ

ノリトレア王国国王。

実際はガルマインに仕立て上げられた偽りの王。
今は関白ガルマインに実権を握られている。

アゾビング・メズ

ノリトレアの自治領イルドリアの現領主。
自治領選挙でナラスティに破れる。
色々と陰謀を画策する。

ナラスティ・ナダ

貿易都市イルドラの市長。
自治領イルドリアの領主になろうと目論んでいる。

ダム

悪漢の幹部。
倒しても倒しても中々死なない、不死身の男。
ナラスティの配下。

ハルナ

きちんと切り揃えられた前髪とストレートのセミロングの髪を持ち主でマントの前を閉じて羽織った、凄みのある美女。
細身の剣を持つ暗殺者。
ナラスティの秘書官。

序節

ここは、アヘイビアのランプシティ。

夜になつても灯は落ちず、空の瞬きが、そのまま煌びやかに、地上に降りてきた街。

そこは、摩天楼。

摩天楼には人の営みがあり又それが摩天楼を支えていた。

そんな街の片隅で、電話が鳴っている一角があつた。

その一角とはマンションだった。

決して、高級とは言えず、壁は薄汚れひびが入り所々崩落していた。

壁には油だろうか…… なにか液体の染みが出来ていた。

雨どいも壊れていて、雨が降ろう物ならそこら辺は水浸しになるだろう。

要は草臥^{くたひ}れたマンションなのだ。

そのマンションの一室から、電話は鳴っている。

男がそのマンションの住人だった。

男はシャワーを浴び終え、浴室から出て来た所だった。

電話は今も鳴っている。

男はバスローブを急いで着て、
ピッ！

と、言う機械音と共に電話を取った。

「はい、ネルゼイ……何だ、ハリイか。お前今どこに……。え？
何でまたそんなとこ……。あ？『イルドラ』へ行くう？」

そして、一方こちらは空港の外になる、裏寂れた一角。
後ろにはサイコ・フライヤーが何機も飛んでいた。

ハリイと呼ばれた男はこう応えていた。

「ああ、仕事でちよつとな」

電話越しにネルゼイの声が聞こえて来る。

ネルゼイは国際警察機構の警部である。

国際警察機構は各国警察が相互の主権を尊重しつつ、国際的な刑事犯罪の防止に役立てる、目的で結成した組織だ。

情報や資料の交換、捜査協力等が主な任務だが、時には現地警察と一体になって、容疑者を逮捕できる権限も持つ。

「だって、お前、明日から二週間休み取ってあるだろ？」

ネルゼイ警部はそう言う。

「『だから休みを取った』んでしょ！」

ハリイはそう言い返す。

「なんだ、お前単独行動かあ？」

ネルゼイは冷蔵庫の前に来て扉を開け、缶ビールを取り、プルトップを引いた。

缶ビールは、

ぷしゅつ。

と、旨そうな音を立てて泡立てる。

「お前、今、ビール飲もうとしてるだろ?!」

ハリイが言った。

「いーだろ、別に」

ネルゼイが反論する。

「でさ、今、うちの課で追ってる事件あるだろ？」

「麻薬の密売ルートだろ？」

「ああ、それでさあ、チヨツとした情報が舞い込んでさあ」

「ああ」

ネルゼイはごくりと喉を鳴らして、ビールを飲み込む。

「どうも裏に大物がいるみたいなんだ」

「ぶっ！ イルドラのかっ!？」

「だーっ！ いきなりでっけー声出すな！」

「おお、済まん」

が、しかし平然とした物で、電話越しにネルゼイは軽く謝るにとどまる。

「……でも、場所が場所だろ？ 証拠もなく、課をあげて捜査なんてしてみる。下手すりゃ国際問題だあ」

ハリイが説明口調で言葉を操っていた。

「当たり前だ！」

ネルゼイが怒る。

そこへ、ハリイの後ろから女性がやって来た。

きちんと切り揃えられた前髪のストレートのセミロングの髪を摩^{なび}かせている。マントを羽織、前を閉じ、じっとハリイを見つめていた。

マントの下はどういう格好かは、伺い知る事は出来ない。大人の香りを漂わす美女だったが、どこか凄みがあった。

「おいっ！ その大物って誰だ！？」

ネルゼイが訊く。

「だーめだ。教えられん！」

ハリイが拒絶した。

「何故だっ」

「さっき言った事もあるし、第一確認を取ってない」

「馬鹿！ 下手するとお前危ないんだぞ？」

「大丈夫だよ。切るぞ」

「ま、待てっ」

ピ！

と、言う音と共に電話は切れた。

「くそつたれが！」

ネルゼイは悪態と共に電話機をベッドに投げつけた。

一方空港では……。

女がハリイに声をかけた。

「ハリイ・ウォルテさん？」

ハリイは煙草に火を点けながら、

「あ？ 俺に用？」

そう返答していた。

女は、

「もう、この件にちよっかい出すのを止めて。でないと命の保障は出来ないわ」

そう警告した。

「！ き、貴様はっ！？」

ハリイは口から煙草を落とした。

ハリイは腰の刀に手をかけたが、女の方は右手は柄に左手は鞘にあり、既にほぼ抜刀していた。

女はハリイの首を斬り落とした。

そして煙草が落ちた。

暫くしてマンションに再び電話のコール音が鳴り響いた。

ネルゼイが寝ぼけながら電話を取った。

「…………… はい…………… ネルゼイ……………」

ネルゼイ警部は未だ夢の中だ。

「…………… 何だって！？ ハリイが！？」

ネルゼイが、がばりと急に身を起こした。

「はい！ はい！ 分かりました。とうも」

ネルゼイは電話を置いた。

ブラインドカーテンを開けながらネルゼイは、

「馬鹿が。やられちまいやがって」

そう呟いた。

ブラインドカーテン越しに見える摩天楼は未だ眠りを知らないかの様に煌々と明かりを照らし続けた。

一方ここは名も無き荒野。

アシュマとオルバニアンが対峙している。

どうやら、決闘の様だ。

アシユマを親の仇と狙っているオルバニアンがアシユマと雌雄を決しようとしたものである。

共に刀を持っている。

オルバニアンは既に刀を持って上段に構えている。

アシユマは佩刀の『鬼虎』を峰に反し下段に構えている。
地擦りの構えといえは言えなくも無い。

「ち！ 馬鹿にしゃがって！」

オルバニアンは、少し間合いを詰めて、一足一刀の間合いを測っていた。

その数刻前……。

「アシユマさま……。この戦いは避けては通れないのですか？」

アーチエルがアシユマに詰め寄った。

「アーチエル。俺を説得しようとしているのならば、それは無意味な事だ」

アシユマが事も無げにそう言う。

「何故ですか？」

「オルバニアンが俺を付け狙っている以上、それは避けては通れん道なのだ。宿命と言っても良い」

「そんな……」

アーチエルの血の気が引いた。

「なんだ、アシユマ！ 女の尻に隠れようつてのか！ そうやって逃げるのか！ 親父の仇め！ 早く出て来い！」

オルバニアンが挑発的な事をアシユマに向かって言う。

「そう言う訳だ。行かなくてはならん」

「アシユマさま……」

「大丈夫だ。アーチエル。危ない事は何も無い。俺もオルバニアンも無事に事が済む」

「本当ですね？ アシユマさま」

「ああ。本当だ」

そう言うやり取りの後、二人は対峙する事になる。

二人の周りには、アーチェルの他に、ヨデイ、エファール、アルミナが、二人の決闘の顛末を見守っていた。

オルバニアンは徐々にアシュマに近付きつつあった。

そしてオルバニアンは機が熟したかを見ると、アシュマに向かって跳んだ。

が、間合いを見誤ったのか、オルバニアンはアシュマに胴を抜かれ、存分に薙がれた。

峰打ちだった。

「馬鹿者！ そんな事で、俺を斬れるか！」

アシュマは奇妙にも、オルバニアンを叱咤した。

「うつ！ くつ！ ばっ、馬鹿だと！？」

「さあ、掛かって来い！」

それからは、アシュマはまるで、オルバニアンを指導するかのように、決闘に臨んだ。

「馬鹿者！ それで俺を倒せるか！」

「何だとお！？」

オルバニアンは、がむしゃらに突っ込んできた。

「馬鹿者！ 猪突猛進ばかりが、剣ではなかるう！」

「畜生！ 馬鹿にするのか？」

オルバニアンはアシュマに散々に翻弄されていた。

が、決して、ただそのままにするのではなく、どこか指導の意味合いを含んでいた。

オルバニアンは、自分の父親の事を思い出していた。

『馬鹿者！ 真正面ばかり突っ込んできおって！ お前は猪か！！』

『なにを！？』

『お前は馬鹿か！』

『何が馬鹿なんだよ！ 何が気に入らないんだ！？』

『それすら分からんか！？ 馬鹿者！！』

『今夜の武芸大会に息子が出場するんだぞ！ 何が気に入らないんだ！ それとも今から優勝するように鍛えなおすつてのか！？ そんなに流派の看板が大事なのかよ！？』

『優勝云々だの、流派の看板がどうだのそんな事を気にするわけはない！！ そんな事も分からんのか！ この大馬鹿者！！』
『うるさいなあ！ 馬鹿馬鹿言うな！』

（くそ！ 何でこんな時に親父の事を思い出すんだよ）

いつしかオルバニアンは、親の仇であるアシュマを何故か親であるハグムに、重ねあわして見る様になっていた。

「お前の弱点は攻撃が単調な事だ。もっと緩急をつけるんだ」
アシュマはオルバニアンの欠点を指摘した。

「何を！？」

オルバニアンは憤った。

「馬鹿者！ そういう直ぐ熱くなる所も、お前の欠点だ！ ハグム殿はそうは言わなかったか！？」

「親父は関係ない！」

「ハグム殿は見識、技量、精神、皆達人の域に入った立派な剣士であつた。お前はそれ等を継ぐ義務がある」

「勝手に決めるな！」

オルバニアンは闇雲に刀を横に薙いで来た。

「馬鹿者！」

アシュマはそれを避けつつ、オルバニアンの肩口に刀を見舞っていた。

「ぐっ！」

オルバニアンは、肩口に打撃を受けて、その場に蹲すくまった。

「立て！ オルバニアン！ まだ終わった訳じゃ無いぞ！」

（糞！ まるで親父だ……）

オルバニアンはそんな事を思っていた。

しかしオルバニアンは、何も稽古をつけてもらう為に、戦っている訳ではない。

自分の父親の仇を取る為に戦っているのだ。

だが、いつしかオルバニアンはその目的を忘れ、アシュマに稽古をつけて貰っていた。

そんな時間が凡そ二刻程続いた。

オルバニアンは体力を使い果たし、その場で大の字になって、倒れこんだ。

「今日は、ここまでとする」

アシュマは、まるで師匠の様な物言いで、その場を後にした。

（くそ……。悔しいが今の俺じゃ、アシュマに勝てねえや……）

しかし、何故かオルバニアンは、悔しい気持ちがしなかった。

持ち前の楽天的性格が作用したのか、アシュマに父親を重ね合わせたのか、アシュマの事を憎む気持ちが和らいでいた。

オルバニアンはその時身震いがした。

このまま、アシュマを憎む気持ちが無くなったら、ハグムの仇が討てなくなる。

それを怖れたのだ。

（だめだ！ これじゃだめだ！）

それから幾日かの間中、幾度かアシュマとオルバニアンは立ち会った。

その度にオルバニアンは、アシュマに翻弄され、軽くあしらわれて、大の字に伸びた。

そしてその度、アシュマに、

「馬鹿者！」

と、叱咤された。

そして、今日も、アシュマに存分に伸されていた。

（何故アシュマに勝てないんだ！）

オルバニアンはその想いに、強くとらわれた。

それからある日アシュマは、

「剣は融通無碍、自由闊達なる物だ」

と、言われた。

オルバニアンは思った。

（まるで、親父みてえじゃないか。いや、親父そのものだ）

そしてオルバニアンは思った。

（あ……、もしかして親父、アシュマが言っていた様な事を、俺に教えたかったのかな？そんな事が分からなかったなんて、俺もまだまだだぜ。こんな事じゃあ、アシュマを斬るなんて到底無理だぜ）と。

太陽は傾き、日が暮れようとしていた。

オルバニアンは大の字になっていた。

「はっ、ははははははははっ！」

オルバニアンは笑いだした。

笑いながら涙を流していた。

（親父、生きている間に気付かなかったなんて、俺は親父の言う通り大馬鹿だったぜ。アシュマは俺にとって仇だが、同時に目指すべき男だ。今は無理でも、いつかはアシュマを超える男になってやる）
オルバニアンは立ち上がり皆の元へと帰って行った。

第一節 チェイス

『こちらイルドラコントロール。貴船の名前と所属乗船名簿、来訪目的と滞在日数を教えられたし』

サイコ・フライヤー銀龍はノリトレア領イルドリアの貿易港、イルドラに寄港する為、港の一角に接舷しようとしていた。

管制官から連絡が入る。

「あー、こちらは『銀龍』。所属はアヘイビア、エバス財団、貿易部所属。来訪目的は貿易。滞在日数は不明。乗船名簿と積荷リストはこれからそちらに転送する。あと、こちらにはウイスキーがあるが、いかが？」

ヨデイが応対していた。

「不明なんて言ってしまうと、良いのでしょうか？ そんないい加減な事で、上陸許可がおりるなんて……」

アーチェルが疑問を呈した。

「大丈夫よ。見てらっしゃい」

エファールが応える。

『こちら、イルドラコントロール。貴船の上陸を許可する。デッキは……』

「ほらね？」

「すごい！ エファールさん、なんでお分かりになったのですか？」

「それはね？ ウイスキーが効いたからよ」

今度はアルミナが応えた。

「ウイスキーが効いたとは、どういう事でしょうか？ お酒ですか？」

「ウイスキーはね。この世界中で使われている船乗りの隠語で、『賄賂』を意味するのよ」

エファールがお姉さんぶって講義していた。

「『賄賂』と、言っても中身はピンきりで、薬物・麻薬・お金と言

うのが相場ね。うちではまっとうにミスリルなんて物を出している
みたいなのよ」

アルミナもアーチエルに講義していた。

この、武器の製造にも使われるミスリルは、貴金属としても希少
価値があり、大変高価な物だった。

「二人とも、アーチエルに、変な事教えないでくれ」

アシュマが困った顔で二人に注意した。

『そこにアシュマ・アトーさんてのは、居るかい？』

管制官が応答してきた。

「俺ならここにいるが？」

アシュマが返答する。

『良かった。全貿易・商用港連盟に宛てた書簡があるんだけど、中
身はどうやら、アシュマさん向けらしいね。中身は暗号化されてい
て見れなかったよ。今そっちに送るよ』

管制官に送ってもらった。

『送ったよ』

「どうも。済まない……で、どこでみるんだ？」

「ああ、アシュマさま。こちらで見れますわ」

アーチエルがコンソールパネルへ導く。

「ああ、済まない」

アシュマが従った。

「三日前と同じ方法ね」

アルミナが言う。

そもそもアシュマ一行が何故、イルドリアにやって来たのかと言
うと、三日前にアシュマ宛に、書簡が来た為だ。

その内容と言うのが、『イルドリア武道大会観覧席チケット希望
人数配布』との内容が書かれてあったからだ。

アーチエルを覗く六人は、武道好きだったので、一も二も無くそ
の話に乗ったのだ。

そう、つまりは今回の寄港目的である『貿易』は表向きの名目で、

真の目的は、アシュマの古い友人である、ビツシュ・ノマンなる人物の招待による、世界三大武術大会の一つと名目される、イルドリア武道大会の観戦だった。

早速書簡を開いてみると、

「『先日、イルドリアの武道大会に七名様御招待致しましたが、こちらの都合により、二名様御招待にして頂きたく……詳しい事は会った時にでも』か。……と、言う事は、俺とあと一人……か」と言う内容のもだった。

当初は七人招待と言ったものだった。

が、今の通り招待は二人。

紛糾しそうだ。

そして……。

「あ、俺、俺!!」

オルバニアンが自己主張をした。

「アーチエル、行くかい？」

アシュマは、アーチエルに訊いてみた。

「え？ 宜しいのですか？」

アーチエルが意外そうな顔をする。

それはアシュマと一緒に居れる事は嬉しい。

しかし自分は武道に疎い。

そんな自分がアシュマと武道大会を見てもアシュマは退屈なのではないか。

そう思うとき、臆してしまう自分を自覚する。

「駄目なら、他の者が行く事になるだけだ」

オルバニアンは、視線でアーチエルに無言で自分がとても武道大会を見たいと主張した。

「あ……、でも、わたしより、行きたそうな人がいるから……」

オルバニアンのようにされれば、アーチエルは遠慮する。

「何人いるんだ？」

アシュマが訊くとアーチエル以外、結局全員が行きたいと言った。

「じゃあ、ジャンケンにしませんか。それなら公平ですよ」
ヨデイが言った。

「それに、アーチエル様も、ほら。これで平等」

ヨデイがアーチエルも誘った。

じゃんけんをする。

が……。

……結果はアーチエルが勝ち残り、アシュマと行く事となった。
無欲の勝利だった。

「え？ 折角ここまで楽しみにしてきたのに、これじゃあ駄目じゃん」

オルバニアンが嘆いた。

「それじゃあ、行くんなら、それなりの格好をしないとイケませんねえ。何せ人が多いから物騒ですし」

ヨデイが言い出す。

「それなりの格好？」

アーチエルは聞き返していた。

「ええ、そうです。チョツと待つて下さいね」

ヨデイは例のアーチエルの洋服筆筒と化している倉庫に行き、暫く戻ってこなかった。

ようやく戻ってきた時には両手に何かを抱え込んでいた。

「これは、アーチエル様に」

「私に？」

「アシュマ君、これをアーチエル様に装着させてみて下さい」

「俺が？ アーチエルに？ これか？ ……何だ？」

「ボディアーマーですよ」

「ボツ、ボディアーマー？ 私にそんな、ボディアーマーなんて……」

……！

アーチエルが驚いた。

「服の上からでも装着できる様になっているので、試しに着せて見せて下さい。合わない様だったら、別な物に取り替えます」

今のアーチエルの格好は、短めの茶色のスタンドカラーのジャケットに丸首の白いシャツ。

ベージュのサルエルパンツ。

革のブーツ。

スポーティーな時のアーチエルの格好だった。

ボディーアーマーを着せるのに、うってつけの格好だった。運が悪い事に。

「いえ、それは……」

アーチエルがたじろぐ。

「では、アシュマ君、アーチエル様を手伝ってあげて下さい」

「分かった。さあ、アーチエルこっちだ」

「……はい」

「じゃあ、先ず、下地から……」

「はい……」

アーチエルは鎧の上からと言っても、好いた人に身体を触れられる事が、恥かしかった。

しかし、悪い気はしなかった。

このまま、アシュマに身を任せたら、自分はどうなってしまっただろう？

顔を赤らめながら、そんな事をボーッと考えていた。

顔は更に上気し、眼は潤み、動悸は早くなっていた。

「少し熱いか？」

「い、いいえ。大丈夫です」

いま、アーチエルは、空を飛んでいる様な気分になっていた。

体と心がふわふわとして、宙を飛んでいる様な感じなのである。

そのシーンを見て、よからぬ事を考えている者が、約二名。

「なんか、いい雰囲気出しているわね……」

と、エファール。

「そーだな、いい雰囲気だな」

と、アルミナ。

「許せて？」

「いーえ、許せないな」

「私達二人で、着せちゃおうか？」

「そーだな、それがいい！」

エファールとアルミナは、アーチエルとアシュマの側までやって来た。

「アシュマ、アーチエル様が照れてらっしゃるわよ？」

「ん？」

アシュマが頓狂な顔をし、

「そんな、エファールさん、私、大丈夫ですから……」

アーチエルが遠慮をする。

「アシュマ！ 後はアタシ達に任せな。女と男だと、都合の悪い所もあるだろう？」

「アルミナさん、わたくし、そんな……！！」

「さ、女は女同士。うまくやりますから」

「エファールさん……！！」

「そうか？ じゃあ頼もうか」

「あ、アシュマさま……！！？」

「はい、はい、お洋服着ましようねえ、アーチエル様」

「エファールさ………では、お願いします。はあ」

アーチエルはこの人達に関わつてはと、諦めた。

暫くして、アーチエルは着替え終わったらしく、皆の目の前に現れた。

皆、自前の武器の手入れをしていたが、途中で手を止めてアーチエルを見た。

戦装束であるというのに、その姿は凜として可憐な乙女という感を醸し出していた。

髪の毛はアップにしてヘッドギアの中にしまい込み、身体はビスチエ形のアーマーで引き絞られていて、凜とした感じをさらに引き立てていた。

ヒップラインはきゅっと絞り上げられ、アーチエルの小さなお尻のラインを際立たせていた。

下地の防刃布が、手甲と脚甲によって締め付けられて、痛々しく見せて、黙っていれば人形と見間違う程の美形な顔つきとあいまって、儚げな乙女という印象を与えた。

「み、皆さん。そんなにじろじろと見ないで下さい」

アーチエルが恥らう。

そこにいた男連中は、皆で示し合わせた様にあんぐりと口をあけ、何も言えないでいた。

「ねえ、ちよつと逆効果だったんじゃないの？」

アルミナがエファールに言った。

「そうね。変に気合入れちゃったからね……。アシュマでさえ、アーチエル様に目が釘付けだものね」

エファールが頭に手をやった。

「大体、これは誰の趣味だよ？」

「あそこで一番鼻の下伸ばしてる奴よ」

「ああ、ヨデイな……。あいつ変な所で自分の趣味出してくるからな……」

「じゃあ、何、ヨデイの趣味で服装固めたら、皆ああなるっての？」

「……………」

「……………」

「案外……………」

「なるかも？」

早速二人はヨデイの元へ行き……

「ねええ？ ヨデイ。今度、私に似合うお洋服見繕っていただけませんか？」

エファールが、ヨデイに懇願した。

「なあ、ヨデイ、頼むから俺に似合う服を、探してくんねえか？」
アルミナも同じ様な事を。

「お洋服でしたら、第二倉庫に目一杯入ってますよ。好きなのお

選びなさい」

ヨデイが言った。

二人は慌てて第二倉庫に向かった。

「『……先日添付しました暗号化されたファイルと、今回添付しました暗号化されたファイルを専用の解読ツールで解読をして頂き、それらを読み込んで解凍した後、アシュマ様のともうひとかたのIDカードに読み込んで頂ければ、アシュマ様達の専用の入場券となります』……っと、ビツシュ・ノマンか。IDカードってこれだけ？」

「そう。アシュマさま。貸して頂けません？」

アーチエルが言った。

「やってくれるのか？ 済まん」

アーチエルがアシュマのカードを持っていく。

「あー、アーチエルの姫さん。あんましアシュマを甘やかさない方が、良いぞ」

オルバニアンが言った。

「なにになに？ 『これはイルドラとイルドリア間のフリーパスとなつております』……か」

アシュマが一人呟いた。

「ヨデイ様、イルドリアはノリトレアと陸続きでしたよね？ なぜノリトレア領では御座いませんか？」

アーチエルがヨデイに訊いた。

「いえ？ 一応ノリトレア領ですよ？ 確か。ただ、自治権が与えられているだけで……。土地を安堵しているのでイルドリアから入る税金たるや凄い物だそうですね。まあ、元々イルドリアは、世界最大の貿易都市イルドラ市を持ち、相当な利益を稼ぎ出しているそうです。そしてイルドラは、貿易港アギと同じく多階層形式の建築物でして半径はアギの港の一・五倍、階層も一・五倍。イルドラに

は、都市があつて、そこに多くの人が住んでいます。人口およそ九十万人。一つの都市に匹敵する規模です。また、最近では、領政府首相選挙がありましてね、現職のアズビング首相が無所属新人のナラステイ、イルドラ市長に負けたそうですよ？ それでナラステイ市長は近く市長を引退するそうですが、そうは行きません。今まで、半ば独立を保っていたイルドラを接收して元のイルドラ領政府の一市に戻るそうです」

ヨデイが一気に捲くし立てていた。

「すごいですわね。ヨデイ様、物知り」

アーチエルが感心した。

「ノリトレアか……。ガルマインが絡んでこなきゃ良いけどな」

オルバニアンは案じる。

「全くだ」

ヨデイが言葉を合わせる。

「アシュマさま、そのビツシュ・ノマンと言う方はどのようなお方ですか？」

アーチエルが、また、訊いた。

「ああ、ビツシュ・ノマンか……。俺の古い友人だ。剣もよく遣う」

「それだけで御座いますか？」

「それ以上に何かがある？」

「はあ……」

「？」

「アシュマ、翻訳しましょうか？」

エファールがにこやかに微笑んだ。

「翻訳？」

「ええ、翻訳。『どうしてこの人は、剣術の事しか話さないのかしら？ ロマンチックな話の一つでも……』もがっ！」

エファールがそう言いかけた所で、アーチエルはエファールの口を手で塞ぎ、

「何でも御座いせんから」

そう言つて、エファールを連れていった。

ヨデイが、

「接舷しますよ」

と、注意を促した。

「ふう」

ヨデイが、一息ついた。

ここは、イルドラの商業者専用の、待合ロビー。

普通の空港ロビーと違い、椅子がなく、非常に煩雑なロビーだった。

今は、イルドリア武道大会がある為、普段より貨物が多く、雑多になっていた。

体格のよい労働者が前後左右に動き回り、アシュマとアーチエルを除くヨデイ達は労働者にぶつかっていた。

その度、

「はい、御免よ」

とか、

「邪魔だよ」

等と言われた。

アーチエルは、アシュマにさり気無く後に立たれ、肩を掴まれて守られていた。

「俺達はここから、イルドリアへ向かう」

アシュマが背中を向ける。

「じゃあ、僕達はイルドラ観光に徹するよ」

ヨデイも返す。

「ではな」

アシュマが手を上げる。

「では皆さん。暫しのお別れです」

アーチエルが少し残念そうに言った。

「お土産お願いねー!!」

アルミナが手を振る。

「畜生、アシュマ、いーなあー」

オルバニアンが溜息をつく。

「でも、アベニは留守番ですからね。彼よりはいいでしょう」

ヨデイが微笑む。

アシュマとアーチェルが行き着いた先は、貿易都市イルドラと自治領イルドリアの二つを結ぶ、高層エレベーターの入場改札口だった。

ここは、イルドリアの玄関口だけあって、空港ロビーとは違い、物が乱雑に置かれる事や、貿易品が置かれる事もなく、塵一つ無い程綺麗に清掃されていた。

エレベーターが何機も配され、その前に自動改札がある。

自動改札がいわばそのまま、入領チケットゲートになっていた。

エレベーターホールは天井が高い。

開けた空間となっている。

開放感がある。

ただし、人の通行量が多い。

普段より多いと容易に想像できた。

イルドリア武道大会がある為だ。

アシュマとアーチェルは談笑へと、言ってもアーチェルが喋って、アシュマが頷くと言う構図だったが、しながら改札の近くまで来た。アーチェルは例のボディアーマーのままの姿だった。

体に心地よくフィットして、着ている感触がよかったからである。重さも左程ではなく、これが本当にボディアーマーなのかを、疑ってしまう程だった。

そう言えば、すれ違う人は皆、アーチェルの事を振り返り見ていた。

そんな事に全然気付かずアーチエルは、
「御免なさい、アシュマさま。私ばかり喋って。うるさかったでしょう?」

と、少し恥じらいを見せていた。

「いや、そんな事は無い」

と、アシュマは答えていた。

そして、二人はほぼ同時に、IDカードを読み取り機の上においた。

そのとたん警報が鳴り響いて、道は閉ざされ、警備員達がやって来た。

警備員の主任と思しき人間が現れて、

「残念だったな。そのカードじゃ入領出来ん。空港治安室まで来てもらおうか?」

そう言つて、指を鳴らした。

「あ、あの……そのカードは『イルドラ』『イルドリア』間のフリーパスではないのでしょうか?」

アーチエルが不安な面持ちで、訊いていた。

その間に警備員が四人やって来て、アシュマ達の両腕を取った。

「何の真似だ? ただでは済まんぞ?」

「アシュマさま……」

アーチエルが不安気にこちらを見た。

「大丈夫だよ。アーチエル」

アシュマがアーチエルの不安を取り除くように言う。

その言葉でアーチエルは幾分安心した様だった。

「どう『済まん』のだ? 国王暗殺を目論む輩が! きさま、ビッシュ・ノマンの仲間だろうが!」

ここで言う国王と言うのは、勿論ノリトレアの国王、ルーラン・ナル・テルドリニアナの事である。

主任警備員が横柄な態度でそう決め付けてきた。

「どう言う事だ?」

「ビツシュ・ノマンが送りつけた書簡の暗号を解いて、我々が探知できるコードを密かに入れておいたのだ。そうすると、早速お前らが引っ掛ったと言う訳だ。どうだ？　ん？　言い訳できまい？」

「成程。そう言う事なら、自分で確かめさせてもらおう」

「何？」

アシユマは、どこをどう捻ったのか、両脇を抱えていた二人が、宙を一回転して床に強かに叩き付けられた。

続いてアーチエルを拘束している警備員の腕を取り、これも捻ると、男は宙を一回転し、床に叩きつけられ、失神してしまった。

そしてもう一人の男は逃げようとするのを、アシユマの足が相手の足を絡めとり、そして足を上に持ち上げると回転し、その男は背中から落ち、やはり失神してしまった。

最後に残った主任警備員は、果敢にも電磁警棒を持ち出してアシユマに殴りかかったが、アシユマはその腕を取り、進行方向に逆らわずに、そのまま警備主任を投げ飛ばし、床に叩きつけた。

「アーチエル。無事だったか？」

アシユマは訊ねた。

「はい……でもこの人達大丈夫でしょうか？」

「他人の心配をしてる場合じゃないぞ。直ぐに追っ手が来る。逃げるぞ」

「は、はい！」

遠くでサイレンの音がする。

パトカーだろうか？

街は俄かに騒がしくなった。

ヨデイ達はイルドラの都市部、取り分け映画館や、劇場等の娯楽施設が有る所に来ていた。

イルドラは多階層構造都市だ。

フロアぶち抜きが多階層娯楽施設等もあった。

また、都市部を螺旋状に上る魔導石列車等は、ここイルドラでは正に生命線であった。

この様に都市部だけあって交通量が多かった。騒音だけでも耳を覆いたくなる程だった。

それがサイレンの音が混じって、騒音に更に拍車を掛けていた。

「何か……、騒がしいな」

辺りを見回しながらヨディが言った。

「そーね」

エファールが同意し、

「何かあったのかしら？ アシユマ大丈夫かしら？」

アシユマ達を心配した。

その時、ヨディ達の後から、高速で走るエンジン音と、タイヤの軋む音が聞こえてきた。

「えっ？」

ヨディは振り向いてみたものの、まさかそれが横転したバイクと、ライダー等と誰が分かるうか？

「ーーーー！！」

一行四人は声にならない悲鳴を上げて、吹っ飛んでくるバイクが当たらない様に、祈るばかりだった。

バイクは、電柱に当たって、動きを止めた。

ドライバーは、ごろごろと転がって、ヨディ達の目の前で止まった。

オルバニアンなんかは、

「てつめえ！ どこ見て走ってんだ！！」

等と、怒り出す始末。

革のツナギのライダーは立ち上がってフルフェイスのヘルメットをつた。

すると中から、軽くウェーブの掛かった亜麻色の髪の毛、透き通る様な白い肌、そして澄んだ瞳を持ち、鼻筋が通り、ぷっくりとした艶やかな唇を持つ美少女が現れた。

その美少女が、

「助けて！ 追われているの！」

そう喋った。

すると、男連中は

「うん、助ける！」

の二つ返事で請け負った。

「全く、うちの男連中は、軽いんだから……」

アルミナは呆れた。

先の方をふと見ると、とあるカップルがいちゃつきながら歩いた。

「だからさ、俺の車ってミニバンだけど速い訳」

「わっつ。すっごい！！」

男の方等は指で車のキーを回しながら、ご機嫌な様子だった。

「成程。僕達に貸してよ」

ヨディはカップルの男が指で回していたキーを、ひょいっと巧みに奪い去った。

「あ、何だデメエ、コラ待て、俺の車！」

持ち主が騒ぎ喚いてる内に、一行五人皆がミニバンに乗り込んでしまった。

そして、ミニバンは急発進していった。

「ドロボー……ッ」

と、言う声を残して。

ハンドルはヨディが握っていた。

ヨディはミラーで後を見ながら、運転をしていた。

「成程。あいつらか？ 速いですね」

明らかに、普通の車とは違う走行をしている黒い車が数台あった。

「来たわ！ もっと早く！」

例の少女が言った。

「はいはい。分かってますよ。任して下さい」

ヨディは、シフトをチェンジして、アクセルを踏み込み、車の速

度を上げた。

後続の車がどんどん離されて行く。

「お金持ちは良い車乗ってますね。羨ましいですよ。ホントに」
「どんな、後続の車を引き離して、もう大丈夫かと思われた時、向かい側の対向車線からこちらの車線に、飛び込んできた車があった。」

「！！」

ヨディは寸での所で車をかわしたが、相手はすれ違いざまにマシンガン撃ってきた。

「きゃっ！」

エファールが悲鳴を上げる。

「エファールさんは似非念者ですか？」

ヨディが訊く。

「なんでよ？」

「魔導石もあるでしょうに。マシンガンの弾くらいじゃ……」

「ばかね！ 怖い物は、怖いの！」

「ああ。さいで……」

マシンガンを撃ってきた者は黒尽くめの男に酷似していた。

「くそっ！ あいつら、あんな物まで……ここまで狙われるあんた何者！？」

オルバニアンが少女に訊いた。

「あなた、この顔、知らないの？ 私、ノナ・イルマよ！」

「ああ、今、アイドルで売り出し中の？」

アルミナが驚いた。

「どーりで、どこかで見た事あると思いましたよ」

ヨディが受け応えた。

「黒尽くめの男がいたな」

オルバニアンが言った。

「いましたね。ドートネーゼが絡んでいるんでしょうか？」

ヨディが受ける。

「もしかして、ガルマインが影の者と、黒尽くめの男達を編成した事も考えられるぜ。なにせ一応ノリトレアだからなここは」

「オルバニアンにしては鋭いですね」

「と、考えられなくも無いって事よ」

「所で、影の者と言うのは？」

「ガルマインの手下って所だな。暗殺集団みたいな物だよ」

「成程」

等とヨディとオルバニアンが会話をしていると、

「そんな呑気な事言ってる場合か！ この状況をよく考えな！」

アルミナが怒った。

「しょうがねえ。命にや変えられん。反撃するぜ」

オルバニアンは決意をした様だ。

「あら？ まだだったの？ いつものお前さんなら、とつくとーに……」

ヨディが逆に訊いた。

「そこはそれ、貴重なもんだから」

そう言ってオルバニアンは既に愛用となっている、対魔導機兵用のライフルの銃身を短く改造した物を取り出した。

「行くぜ！」

ライフルを構え、撃った。

グバン！

派手な音を立てて、車が『爆発』をした。

「ちよつとお、凶悪すぎじゃあなあい？」

エファールが言った。

「いえ。この位が丁度いいだろ」

オルバニアンが返す。

アシユマはアーチエルを抱き抱えて、ロビーの二階から一階へ飛び降りた。

アーチエルは不謹慎ではあるが、今、彼女は『幸福感』を味わっていた。

好いた男性^{ひと}に抱きかかえられ、守られているのだ。
これ程の幸福感が他にあるだろうか？

アシユマは見事着地をし、そのままアーチエルを抱えたままロビーの一階を駆け抜けて行く。

「畜生！　なんて身の軽い奴だ！　そっち行つたぞ」
警備員が叫んだ。

すると、アシユマの行く手から、複数名の警備員がアシユマに向かってきた。

「ち！」

アシユマは軽く舌打ちをすると、アーチエルを降ろし、鬼虎を抜く気配を見せた。

「殺してはなりません」

アーチエルが言った。

「分かっている」

だが、その時、壁の一部が開いて、

「こつち！」

こちらを見て手招きする少女がいた。

「はやく！」

アシユマはすばやく納刀し、再びアーチエルを抱き上げると、手招きする少女の後に従った。

「アシユマ・アトーさんね？」

その謎の少女は、アシユマの名を言っていた。

「お前は誰だ……？」

アシユマは名を尋ねた。

「『お前』は無いなあ。私、フィナ・エマル。それでもノマン先生の一番弟子よ」

フィナと自ら名乗った少女は癖っ毛でいたる所髪の毛がはねてはいたが顔立ちは整っており、黒目がちの大きな瞳の美少女だった。

矢張りボディアーマーを身に着けている。

「弟子？ アイツが？」

「そうよ？ 領師範だもの。おかしくは無いわ」

「アイツはどうしてる？」

「今は囚われの身。詳しい事はまた後程」

「分かった」

その時、今来た通路の奥で、マシンガンを持った警備兵が、

「止まれっ！ 止まらんと……」

言いかけたのを、機先を制して、フィナが逆にマシンガンを撃った。

すると警備兵は倒れた。

多分、魔導石を持つていなかったのだろう。

「フィナ様……！」

アーチエルが何か言いかけるのを制して、

「大丈夫、死んではいないわ。ここの職員は皆、防弾チョッキを着込んでいる筈だもの」

そうフィナは言った。

「そう、よかった……」

「アシュマ……で、いいのよね？ 貴方のお連れさんは、変わっているわね。敵の身を案じたりして」

「ああ、そうだ、紹介がまだだったな。彼女はレキシタニアの王女……」

「アーチエル・ナヴィア・アップルトンです。以後お見知りおきを」

「え？ レキシタニアの王女？ これは、これは……」

「いまは、脱出するのが先決。挨拶は後でなさいましょう？」

アーチエルは合理的な方法を取った。

「はっ！ はい！」

フィナが恐縮した。

「で、どこに行くんだ？」

「デッキにあるサイコフライヤーを奪うわ……。まさか王女様は盗

むのも駄目と言いなさるのでは……」

「勿論、人様から物を盗むのはいけないかと……。ですが……」
「『ですが』？」

「少しの間、借りるのであれば……いけませんかしら？」

「いえ、大変結構かと存じます。では詳しい事は後程」

ヨディ達は、未だ街中で逃亡を強いられていた。

追手は数を増し、逃亡するのが難しくなってきた。

オルバニアンが、追っ手を手当たり次第、木っ端微塵にしていた。
しかし……。

「ヨディ！ これじゃあ、埒が明かないぜ！」

オルバニアンが泣き言を言った。

「情けない事言わないで下さいよ」

ヨディが言った。

追手がマシンガンを一斉射した。

そのうちの何発かがタイヤに命中した。

「うわっ！！」

ヨディはハンドルを取られ、車はコントロールを失い、横滑りになった。

「わ~~~~~~~~っ！！」

ヨディは悲鳴を上げた。

そして街灯に激突して止まった。

どうやら、横転は避けられた様だった。

ただし車にとっては、相当な被害だったらしく、エンジン部分等は黒煙を上げていた。

「ひ~~~~」

命からがらと言った感じでヨディが車から出てきた。
出で来たてのヨディの鼻面に、刀の切っ先があった。

「へ？」

「梃子摺らせやがって。女をだせ！」

と、言った男は、大男で恰幅がよく、やはり黒いスーツの黒尽くめで、サングラスをかけていたが、例の黒尽くめの者達とは違って、頭を剃り上げ、どこかマフィア系の感じがした。

「どーぞ」

そう言ってヨデイがまず差し出したのは、エファールだった。

「えっ？ えっ？ えっ？？」

エファールは困惑する。

「違うだろうが！ 別の女はどうした」

「しょうがないですねえ」

ヨデイは言って次にアルミナを差し出した。

「……どーぞ、とっておきです」

「なっ！ 何言ってるんでい！！ アタシはなあ……！！」

「こんな男じゃねえ！ 女を出せて言ってるんだよ！！」

「男だとう！？ アタシや女だ！」

「ダム様。こちらです」

あちこち見回っていた黒尽くめの男達の内、一人が極めて機械的に言った。

「よし、お前ら追え！ 俺もすぐに追いつく……舐めた真似してくるじゃねえか。てめえ、サツの回し者か！？」

ダムと呼ばれた男はヨデイを脅しに掛かった。

「いやあ、やだなあ。そんな風にみえますう？」

ゴン！

鈍い音がした。

ヨデイがダムに殴られたのである。

「ヨデイ！」

「ヨデイ、大丈夫？」

アルミナとエファールが、それぞれヨデイの事を案じた。

「痛いですね。顔に傷が残ったらどうするつもりなんですか？」

ヨデイが怒りを内に秘めながら、言っていた。

「その減らず口を叩けるのも今の内だ。お前らは後でたつぷり締め上げてやる。特に女ども、お前達は念入りにな。ひっ、ひっ、ひっ」
ダムのごつい顔が卑猥に歪んだ。

「なんだよ、やらしい笑いすんな！」

アルミナが剣を取った。

「こうなったら、容赦はしませんよ」

エファールも剣を手にした。

「仕方ありませんかね……」

ヨデイも棒を取り出し戦闘態勢に入った。

「くくく、そんな物が、俺に効くと思っっているのか？」

ダムは三対一でも平気である様な顔をした。

「何？」

ヨデイが少し不審に思った。

「そうだなあ、チヨツと怖えのは、そのでっけえ剣持った姉ちゃんぐらいかな？ それさえ気が付けてりゃ、別に怖い事はねえ」

ダムはアルミナの事を指して、そう言った。

その時、通りの向こうの角から、タイヤを軋ませる音を響かせながら、車が一台、こちらに突っ込んできた。

ダムは、マシンガンを斉射したが、魔導石を所持しているのか、まるで効果がなかった。

車はそのままダムを跳ね飛ばし、それからブレーキをかけた。

ドアが開く。

「乗れ！！」

そういう言う声が掛かって、車のドアが開いた。

「げー！！ ネルゼイのおっちゃん！」

そこにいたのは、ヨデイの天敵、国際警察機構のドクワント・ネルゼイ警部であった。

ヨデイは、ついこの間も捕まったばかりである。

「乗りたくないんなら、いいんだぞ！？」

「乗るに決まってるでしょ」

(ホントは乗りたくないけどな)

ヨディはそう思いながら車に乗った。

皆、車に乗り込んで、ネルゼイは車を急発車させた。

「一瞥以来だな、おっちゃん」

アルミナが言った。

「俺は、おっちゃんではない！ まだ三十五だ」

「おっちゃんジャン！ 充分」

「その節はどうも」

エファールが言う。

「『レディール』か、裏切り者め」

「その名は捨てたわ。今の私は『エファール』。私は愛に生きる事に決めたの」

「ヨディ。お前また何をやらかしたんだ!？」

ネルゼイがヨディに訊いた。

「いやいや、今回は人助け。旦那の世話になる様な事は、していませんよ。しかし、こんな所にまで追いかけてくるなんて、暇ですね。旦那」

「今回はお前を追いかけてここまで来た訳じゃない。俺のダチが殺られてな。どうやらこの大物に目を付けたらしいんだが……それよりお前ら何しでかしたんだ？ 警察無線でお前達の事バシバシ言っていたぞ」

「実名で？」

「いや、お前らの特徴だな。知ってる奴が聞きゃ、一発で分かる。

それよりお前の連れはどうした？ オルバニアンとか言った……」

「あつ!!」

思い出したのはヨディだった。

「忘れてたわー」

無責任なのはアルミナで……、

「今頃無事かしら？」

一応エファールが心配して見せた。

「薄情な連中だな」
ネルゼイはオルバニアンに同情した。

車が走り去った後で、ダムはぎしぎしと音をたて、立ち上がった。
「くそっ！ おのれ……今度あった時は殺す、必ずな……」
ダムは執念深そうな表情をして、そう言った。

オルバニアンとノナは、あまり綺麗とは言えない路地を逃げ回っていた。

十字路になつては行き先を迷い、丁字路になつては右か左かを迷う。

正に迷路に入り込んでしまった様な物だった

「はあ、はあ、……またまた丁字路か？」

オルバニアンは後ろを見ながら言った。

追っ手が後から迫ってきた。

「しつこい奴らだぜ……ノナ先行って……」

「きやあっ！」

ノナが悲鳴を上げた。

「しまった！ 前からもかつ！？ ……ノナっ！？」

見るとそこは丁字路等ではなく、地面より二メートル程下がった、ゴミ回収の為のベルトコンベアーだった。

「やーん！ ゴミだらけーっ！」

ノナの悲鳴の正体はこれだった。

「！」

オルバニアンは何かを思いつき、

「にっ」

と、笑った。

「あばよっ！！」

続いて、追跡者に叫びながら、地面に数発、アベニ直伝の煙玉を地面に叩きつけもうもうと白煙を上げさせた。

そしてそのままオルバニアンは、ゴミのベルトコンベアーに乗り込み、ノナに追いついた。

「ああ、あなた、わたし嫌よこんな……」

「オルバニアンだ！」

「え？」

「俺の名は、オルバニアン・マグマイヤーだ」

オルバニアンが名乗りを上げる。

「オルバニアン、私、嫌よ、こんな……」

「しっ！でけえ声だすんじゃない。このゴミに紛れて逃げる」

「えっ……いや……」

「しっ！」

「どこだ？」

追っ手の声が聞こえてきた。

「無理よ……」

ノナが弱気な事を言った。

ベルトコンベアーは数メートル先でコンクリート製の穴の中へ潜っていった。

「くそっ……どこへ……ごぼっ、ごぼっ！」

「向こうには……ごぼっ……いません」

「おそらくゴミに紛れて逃げたに違いない！ 出口へ先回りしろ！ いけっ！」

その、コンクリート造りの入り口付近でオルバニアンとノナが潜んでいた。

「ばーか。行くかつーの」

「頭いー」

「様子見て出るからな」

「ウン！」

アシュマと、アーチェル、フィナの三人はサイコ・フライヤーのデッキに来た。

量産型のサイコ・フライヤーがずらりと横並びになっていて、それぞれ固定され、整備されていた。

直ぐに飛べる機体は限られていた。

「えーと、あれよ！ あのデッキにある奴！」

フィナは、とある、サイコ・フライヤーを指差した。
「！」

アシュマは通路上にいる警備兵を認めた。

そしてアーチェルを下ろした。

「アーチェル、フィナについて行くんだ。分かるね？」

「はい、アシュマさま。でも……」

「大丈夫。殺しはしない」

「はい。御無事を」

「分かった」

アシュマは自ら囿となる様に通路の真ん中へと出てきた。

「お前、ここは関係者以外……」

「貴様は！？」

「はっ！」

アシュマは気合を発して回し蹴り食らわして、一人を倒すと、次の警備兵には鳩尾に掌底を食らわした。

「いたぞ、あそこだ！」

追っ手が近付いてきた。

「ちっ！」

アシュマは舌打ちをした。

「アシュマさん！」

フィナが叫んだ

「先に行って、始動させておいてくれ」

「アシュマさんは？」

「ここで、食い止める。アーチエルを頼む」

「分かりました！ 気をつけて！ さあ、アーチエル様、ご一緒に」

「アシュマさま……。フィナさん。済みません。宜しく」

アーチエルがフィナに付いて行く。

「そんな、アーチエル様。勿体無い」

フィナはその場で恐縮の呈を見せた

アシュマは、後続の警備兵のうち、一人目の顔面に掌底を叩き込み、二人目にはそのまま裏拳食らわせ、三人目にはそのままの流れで回し蹴りを側頭部へ叩き込んだ。

出入り口付近で、兵達が何かを言っている。

「くっ！ 俺達を出さないつもりか……。そうは行くかつ！」

ここでアシュマは、初めて鬼虎を抜いて峰に反し、十人程の集団へ斬り込んだ。

相手達の肩口を打ち、次に横鬢を打ち、ひるがえってはまた肩口を打ち、そして胸を抜き、背中を袈裟に打った。

そして再び胸を抜き、はたまた袈裟に打ち、そして切り上げ、脳天を打ちすえ、小手に打ち骨を砕く。

相手に囲まれる暇を与えず、あっという間に十人程の戦闘不能者が出来上がっていた。

数百人斬りを達成した事もあるアシュマの腕だ。

これくらい的人数はなんでもなかった。

ヒュイイ……。

と、独特な音を立てて、サイコ・フライヤーがホバリングをする。後続の追手達を機首の機銃で牽制する。

サイコフライヤーからワイヤーが下ろされる。

アシュマは、釣り下がったワイヤーに足を引っ掛け、巻き上げられ、サイコ・フライヤーに回収された。

「顔に似合わず過激だな、フィナ」

「そう？ 早く席について」

アシュマはアーチエルの隣に座った。

『ハッチを開けなさい！ さもないと部屋ごとぶち抜くわよ！』

フィナは、管制室の前でホバリングし、拡声器で恫喝した。

「ひっ、ひっ」

管制員は悲鳴にならない声を上げて、ハッチを開けた。

ゴゴゴゴ……。

と、重い金属音と共に、ハッチが開いてゆく。

「行くわ！」

フィナが言った後、エンジンが本格的に始動し始め、

ゴウツ。

と、音がして小型のサイコフライヤーは飛び立った。

第二節 イルドリアへ

貿易都市イルドラの頂点に立つ塔の群れは、このイルドラの市政府。

即ち、このイルドラの頭脳といえた。

イルドリアがノリトレアより自治権を有しているのと同じ様に、イルドラはイルドリアより自治権を許されていた。

それがこのイルドラとイルドリアの『伝統』であった。

一際高い塔がイルドラの市政府官邸になっていた。

その一室、見晴らしの良いその部屋には、ナラスティ・ナダ市政府長がいた。

ナラスティは一見、美男子風で意志の強そうな眼をしていたが、その裏では狡猾そうな顔も併せ持つ、油断ならない面も覗かせていた。

スタンドカラーの白い上下に身を包み、野心をその身に宿していた。

そこでナラスティは、ダムから報告を受けていた。

「ノナの逃亡を助けた外国人？」

ナラスティは言った。

「はい……」

ダムは返答した。

「何者だ？」

「分かりません」

「うむ……アゾビングの手の者か？……で、ノナは今どこに？」

「それは、私から」

それは、きちんと切り揃えられた前髪と、ストレートのセミロングの髪の持ち主で、マントの前を閉じて羽織った、ハリイを殺害した例の美女だった。

「ハルナか……うむ」

ハルナと呼ばれた女が答える。

「現在第十三層第五区画の、あるホテルに潜伏中です」

「聞いたか？ ダム。今度は失敗は許されんぞ」

ナラスティは次のない事を匂わせた。

「不振な外国人は？」

ダムが訊いた。

「消せ！ 少しでも私の周りを嗅ぎまわる奴は全て消せ！」

「私はどうすればよいので？」

ダムは重ねて訊いた。

確認の意味合いもある。

「第一にノナの抹殺。第二に私の周りを嗅ぎまわる外国人の抹殺」

「はっ」

「私は武道大会に出席する為、近くイルドリアに降りるが……分かっているな？」

「ははっ」

「では、行けッ！」

「はっ」

ダムは音もなく静かに消えた。

「例の『施設』の復旧作業ははかどっているか？」

ハルナに問う。

「はい、それはもう」

と、ハルナは報告していた。

「大量のエナジアが必要と聞く。そちらの方はどうか？」

「そちらの方はノリトレアの闇業者から大量に仕入れました」

「大丈夫なのか？」

「多少値は張りましたが、品質は申し分ないかと」

「分かった。お前はさがれ」

「はい」

その時、

ピピッ、ピピッ……。

と、短くインターフォンのコール音になった。

「私だ。……なに？ お繋ぎ申せ」

暫らくしてどこかと繋がる。

『ナラスティ殿、私だ。ガルマインだ』

「は。ガルマイン様、お久しゅう御座います」

『そう、硬くならずとも良い。そう言えばウチの黒^{ブラック}尽くめの男達の使い勝手はいかがかな？』

「は。それはもう。気が付けば細かい所までをも自分達で処理するので、その分こちらの労力が少なくて助かります」

『そうか。陛下が武道大会をご覧になる。近くそちらに、伺う事になろう。よしにな』

「は。お待ち申し上げております」

『ああ、後、大事な事が一つ、二つ』

「はい、何で御座いますよう」

内心ガルマインを良く思っていないナラスティであったが、勤めて明るく応えていた。

『もしそちらに、アシュマ・アトーとアーチエル・ナヴィア・アツブルトン王女が行ったならば、『保護』をお願いしたい』

「『保護』……ですか。分かりました。で、あと一つの用件とは？」

『言葉の端々からから時たま覗かせる、傲慢な口調を改めて頂きたい。口が災いして国が滅んでは何にもならん。では』

また短く、

ピ！

と、鳴って通信は切れた。

「くっ！ ……成り上がりのめ！」

ナラスティは吐き棄てた。

イルドラの街の外れの寂れた道にて、走らせているネルゼイの車の中で……。

「さて、訊かせて貰おうか？　どうしてあの女と一緒にいた？」

ネルゼイが質問をした。

「あの女って？」

ヨデイが惚けた。

「イナ・ノルマさんの事？」

エファールが言った。

言ってしまった。

「ああ！　惚けなきや駄目でしょ！」

「どうして？　オルバニアンも一緒なのよ？　見捨てる気？」

「で、あの女はどこに行った？」

ネルゼイが再び質問をした。

「どうしてあの娘にこだわるのさ？　旦那にとってはどーでもいいんじゃない？」

ヨデイが訊いた。

「あの女が麻薬、通称Dトランスの密売人としたら？」

「ええ！？　本当！？　それ！！」

「うそ！？」

「とても信じられないわ！」

その言葉に、三者三様の受け答えをしていた。

「その可能性が高い。そこでだ、あの女とどういう関係なんだ？」

ヨデイ……いや、ダスト・モンキー」

ネルゼイは探りを入れてきた。

「旦那、疑り深いですよ。どう言う関係も、こう言う関係もありませんよ」

ヨデイがきつぱりと否定した。

「そうか？　あの女と連んでたんじゃないのか？　現代の義賊も、

麻薬に手を出しちゃあ、お仕舞いだああ」

「ねえ、幾らヨデイが、スケベでおかしいのは認めるけれど、決して麻薬に手を出す様な人じゃないわ」

エファールが『一応』弁護する。

「エファールさん……貴女……」

ヨデイが閉口した。

「さあな、お前さんには聞いてないよ。……違うんならあの女を連れてきて証明するんだな」

ネルゼイが言った。

「くつそー。弱みに付け込みやがって……」

ヨデイが悔しがった。

「ちよつと！ どうやって搜せつて言うの？」

アルミナは怒り心頭だった。

「さーな。ダスト・モンキー。お得意のハッキングでもして搜したら？ 今回だけは見逃してやるぜ。……いやあ、俺もホント運がいぜ。お前に逢えて」

ネルゼイが、ヨデイの弱点を抉る様に言った。

「くつそー、覚えてろよ！」

ヨデイが悔しがるなんて珍しいと、エファールは思った。

尤も、そんな分かりきった仲でもないし、付き合いが長い訳でもない。

ただ、この人が悔しがるのは、珍しいのではないかと思ったただけであつた。

「ヨデイ！ こんな奴のいう事なんて聞くな！」

アルミナが怒っていた。

「いや、いいんだ。アルミナ。オルバニアンの事も、気になりますし」

「ヨデイ……」

アルミナは、少しだけヨデイの無念さが、分かった様な気がした。
「なあ、ネルゼイのおっちゃんよ、本当に、今回だけは、見逃してくれるんだろうな？」

ヨデイの口調が、少しだけ伝法なものに変わった。

「ああ、約束は守る」

ネルゼイは言った。

「よし。起動させますか」

ヨデイが、仕方なさげに言う。

ヨデイが持ち出したのは、大人の掌二つと半分の大きさの、小型の電算頭脳だった。

それを開くとモニタと、キーボードが現れた。

早速ヨデイは、電脳（電算頭脳）を起動させ、携帯端末に繋ぎ、キーボードをたたきつつ、オルバニ안의居場所を検索し始めた。

「ヨデイ。今度は、何を、しでかすつもりだったんだ？」

ネルゼイは茶化して見せた。

「ヨデイ……」

エファールがヨデイを心配する。

「あんな奴のいう事なんか、気にしないで下さい」

それに応える様に、ヨデイが言った。

「ヨデイ、まだか。日が暮れっちゃうぞ」

ネルゼイがヨデイを急かす。

「出た！……それらしい二人の居所が、分かりましたよ。チョッと、ビックリの所ですけどね」

「よし、見せてみる」

ネルゼイは液晶の画面を見た。

そして呆れた。

「本当にここか？」

「『それらしい二人』はね。イルドラの中央回線に潜り込んで検索しましたからね。下手な警察よりは早い情報の筈ですよ？」

ヨデイは太鼓判を押した。

「よし、早速行こう！」

ネルゼイは車のキーを回し、エンジンを起動させた。

「早速行こうって、全く人使いが荒いんだから」

ヨデイが不満を顔あたまにした。

「何言っているのよ。オルバニアンが気にならないの？」

エファールがヨデイを責めた。

「そーだぞ。早くせんと命が危ない」

ネルゼイが脅す様に言った。

「でも、どうして、命を狙われているんでしょうね？」

ヨディは疑問をぶつけてみた。

「そうよね、彼女が密売人ってどういう事？ 確かな情報？」

アルミナも相乗りした。

ネルゼイが疑問に答える形で、話し始めた。

「実は、俺の親友が、Dトランスの密売ルートを追っていた。奴は、めったな事では動かん奴だが、ルートを掴みかけたとたん、殺られた。奴の持ってたメモに彼女……ノナ・イルマの名前があった。その上奴は、死ぬ前に、俺に電話を入れてきて、こつも言った。裏に、イルドラの大物が、絡んでいるとな」

それを聞いたヨディは

「えっ！！ イルドラの大物！？ 冗談じゃありません！！ そんなの相手にしたら、命が幾つあっても足りませんよ！！」

「もう！ 落ち着いてよ、ヨディ！！」

エファールがヨディに注意した。

「だれか、そいつを黙らせる！」

「大物関わりといったら、ガルマインの奴が関わって来るんじゃないんですかね！？」

ヨディが別の話題を持ってきた。

「ガルマイン？ ノリトレアの関白のか？ さあ、それはどうだか分からなねえが……」

ネルゼイは答えた。

「そうですよ？」

と、ヨディ。

「だったら、ウチらを狙ってきた、あの黒尽くめの男ども、ガルマインの手下じゃない？」

アルミナが余計な事を言った。

「だーっ！っ！！ やっぱいい！？ もついい加減、勘弁して下さいさ

いよお！ 神様あ！！」

ヨデイは悲鳴を上げた。

途端、車は蛇行運転を始める。

「誰かこいつを黙らせる！！ 危なくてかなわん！」

ネルゼイが言う。

「ヨデイ、落ち着け、落ち着けッたら！！」

アルミナもヨデイを落ち着かせ様とする。

「どーか無事に帰れます様に、無事に帰れます様に、無事に帰れます様に……」

エファールが祈り始めた。

「エファール！ 何、祈ってんだよ縁起でもない！！」

アルミナも不安になりながらエファールに言う。

「せめて死ぬ前に、一目アシユマの顔が見れます様に……」

「だ か らあ！」

……尚も車は、蛇行しながら進んでいった。

そこはイルドラ第十三層の第五区画と呼ばれる所で、数ある階層の中で最も華やかとされる第十三層の中でも、とり訳宝石店や大きなブランドの店が並ぶ、煌びやかな所だった。

その中でもそのホテルは、豪華な飾りつけといい、規模といい、第五区画の中でも異彩を放っていた。

単に興味が悪いと言う話もあるが。

そのホテルでもとり訳豪華な部屋に、オルバニアンとノナは宿泊していた。

つまりは、イルドラの最も華やかな部屋に、二人は宿泊している事になる。

スイートには、豪華な飾りつけの柱や天井の梁があり、床には色とりどりで複雑な文様の入った絨毯が敷かれてあった。

丁度類も豪華で、椅子には総革張り、手すりや背もたれには、複

雑な模様が入っていた。

テーブルも豪華一点張りで、楕円形の横の面に複雑な文様が。脚にも同様な文様が掘り込まれていた。

そして、今、ノナは、鼻歌を歌いつつ、浴室のバスタブに、身を沈めていた。

その、鼻歌がスイートにまで聞こえてきて、それがオルバニアンの癪に障った。

「くっそー！ 呑気に鼻歌なんか……」

オルバニアンが苛ついていた。

いつ敵が襲ってくるか分からないのに、こんな調子でいいのか？
こんな豪華なホテルに泊まって目立つのではないのか？

自分の命が狙われていると言うのに危機感が足りないのではないのか？

そんな思いが頭の中をぐるぐると巡っていた。

そんな事を思っていると、そのままノナがバスローブを着て、鼻歌交じりに浴室から出てきた。

オルバニアンはソファで不貞腐ふてくやれていた。

ノナはバスローブ姿のまま、スイートに入り、オルバニアンの目の前にやって来た。

「いいわよ、オルバニアン、シャワー」

オルバニアンはその姿と声に、胸の鼓動が早くなるのを感じた。

「い、いいよ」

オルバニアンは照れて顔を背けた。

「どうして？ 臭いわよ」

身体をかめ顔をオルバニアンに寄せた。

オルバニアンからは、ノナの顔と胸の谷間が見えた。

風呂上りのいい香りが、オルバニアンの鼻腔をくすぐる。

オルバニアンは、鼓動が更に早くなったのを感じた。

「い、いいから、そんな格好でうろつくなよ！！」

「は、はーん……。照れているのね？ かわいい！」

「バツ、バカヤロウ！ 誰が……」

「どお？ すっピンでも可愛いでしょ？ 惚れちゃった？」

「何、馬鹿な事を……」

「……………」

オルバニアンは、今までふざけてはしゃいでいたノナが、何か一点に集中しているのを見て、どうしたのだろうと思った。

「どうした？ ノナ」

「……………」

ノナが集中しているのは、テレビで流しているニュースだった。

『……国王杯武道大会に列席する為、ナラスティ、イルドラ市長が、出発される予定です。なお、国王杯は五日後イルドリア特設スタジアムにて…………』

「……………」

「ノナ……？」

そして次の瞬間、

バン！

と、扉が開いて『影の者』達が突入してきた。

「！！！」

オルバニアンとノナは、驚き身を屈めた。

オルバニアンは完全に意表を衝かれた格好となった。

ヨデイ達はネルゼイの車で、十三層、第五区画のホテルの前にやって来た。

ホテルより少しはなれた所に車を止め、全員が降りてきた。

「すげー所に泊まってるわね」

アルミナが驚いていた。

「どういつ神経しているのかしら？ 裏でも掻いたつもりなのかしら？」

エファールが嘆息した。

「みなさん、行きましょう……」

ヨディが言いかけた時、
ドン！

と、ホテルの上層階で、大きな爆発が起こった。

「！！」

そこにいた、全員に衝撃が走り、皆一斉にホテルへと走った。
ホテルの入り口から入り、ロビーを駆け抜け、エレベーターの前に着いた。

「ネルゼイ警部。こっちだ！」

ヨディは貨物専用のエレベーターの前から皆を呼んでいた。

「お客様、困ります」

ホテルの従業員は困惑の呈であった。

そのホテル従業員に、ヨディは

「爆発が起きたのは何階だ！？」

と、逆に訊いていた。

「あ、その、あの」

「何階だ！？」

珍しくヨディが激昂している。

「十四階です……」

チン！ と、音がして、エレベーターが開いた。

そこへ、ネルゼイ、アルミナ、エファール、ヨディの順にエレベーターに入った。

そして十四階のボタンを押して扉を閉めるボタンを押した。

重苦しい雰囲気 flowed。

十二……………十四。

チン！

と、言うベルの音がして、エレベーターのドアが開く。
警戒の為、エレベーターに潜んで、それから展開する。
見ると周りは炎の海で、熱気が肌をちりちりと焼く。

「これはひどい……！」

ヨデイが呟いた。

「だめだ、ヨデイ！ 下がるう」

ネルゼイが退く事を提案する。

「仕方ないですね……！ 下がりましょう」

……ヨデイ達は、何も出来ずに、ホテルから出て来た。
特にヨデイは、半ば茫然自失となっていた。

ホテルの外に出てきた。

車の前に行く。

「消火作業の妨げとなるので、車を移動しなさい」

消防の人間がそう言ってきた。

しかし、そう言われても、

「はあ」

としか言えなかった。

何げに、ふと眼を向けた先に……、

「……のヤロ……。……痛えなっ！！」

影の者達に拉致されようとしている、オルバニアンとノナの姿を認めた。

「オルバニアン！！」

ヨデイが叫んだ！

「何ですって？」

ヨデイの言葉に、エファールも驚いた。

「車を出すぞ」

ネルゼイもそう言って車で追おうとしたが、野次馬に阻まれて前に進む事も、後に下がる事も出来ない。

そのうち、オルバニアンを見失ってしまった。

「くそっ！」

ヨデイが悪態をついた。

その時、ヨデイの携帯が振動する。

「はい、こちらヨデイ……アーチエル様！」

「なにになに？ アーチエル？ じゃあアシュマもそこにいるんだな

？」

アルミナがそこに割り込もうとした。

「ちょ、チョット、アルミナさん！ 犬じゃないんだから……え？ サイコ・フライヤーに？ 何で又、そんな所に……え？ こちらの事が見える？ ……じゃあ、合流しましょう」

乗っている人間に関わらず、車の走行音は、静かな物だった。

誰も、リムジンで、人間を拉致するなんて、考えないのだろう。

状況には似合わないが、乗り心地は最高だった。

ただ緊張感が、それを感じさせないのである。

耐え切れなくなつて、状況がノナに言葉を発しさせた。

「私達をどこへ連れて行く気？ 殺すなら早く殺してよ！」

すると、影の男が、

「勘違いをしてもらつては、困る。『我々』は、貴女を『保護』しに来たのだ」

自らを『我々』と呼んだ『彼等』は機械的に言った。

「お前等、何故、俺を助ける？ ガルマインに命令を受けてないのか？ どこへ行く？」

オルバニアンが質問していた。

「今回、お前達に関しては、関知していない」

これも、機械的な答えを、返された。

車は走り、やがて中央へ入る、巨大なエレベーターが見えてきた。そして、イルドリア高官用、イルドリア領直行エレベーターの前までやって来た。

（イルドリア政府高官用の入り口だと？ ……しかも検問なし）

妙だと、オルバニアンは思った。

自分達を『保護』すると言い切った、この者達は何者なのか。

ガルマインの手の者ではないのか？

車はエレベーターの扉が開くと内に入り、扉を閉じて下へと降り

ていった。

一行は、ヨデイが予約を取っていたホテルにて再会した。

「皆さん、ただ今戻りました。色々ありましたが、無事に帰って来れました」

アーチエルが無事を報告した。

「アーチエル様お帰りなさい。大丈夫でしたか？」

ヨデイが訊いた。

「色々難儀したみたいですね」

エフアールが、アーチエルを気遣った。

「で、アシュマは？」

アルミナが訊いていた。

「今、来ると思います」

やや一抹の不安を感じながら、アーチエルはそう言った。

「ふう」

息を整えて入ってきたのは、アシュマだった。

途端に、

「ああ、アシュマ大丈夫だった？」

「怪我は？ どこか怪我とかしてないかい？」

と、エフアールとアルミナはアーチエル等そっちのので、アシュマにかぶりついた。

アーチエルは、なんとなくこんな事になる気がしていた。

「ああ、アシュマ寂しかったわ。またこうして貴方に会えるなんて」

「アシュマ、今度アタシに稽古つけてくれ。二人つきりで」

アシュマはアーチエルと眼を合わせると、やれやれと言った表情をして見せた。

アーチエルも、まあ仕方ないわ、と言う表情をした。

「あー、アシュマって、やっぱりモテる人だったのね？」

フィナは、やはりといった顔で、アシュマを見た。

「しかし、女共がこうも集まると、うるさいったりやありやしない」
ネルゼイはうつかり口を滑らせた。

「あら、女性差別ですわ」

アーチエルが言った。

「そうよ、女性蔑視だわ」

エファールもアーチエルに続いて言った。

「そうだ！ 女を舐めるなヨ！」

アルミナも言った。

「そうね、今はチョツといただけないわ」

フィナも真面目に言い切った。

ネルゼイは

「わ、分かった。俺が悪かった!!」

そう言つて折れた。

「そういえば、オルバニアン？ …… さんも、ノナ・イルマさん？

…… も無事よ」

フィナが言った。

「そういえばこちらのお嬢さんは？」

ヨデイが尋ねた。

「ああ、こちらはフィナ・エマル様。ビツシュ・ノマン様の一番弟子であらせられるそうです」

アーチエルが紹介した。

「いやあ、王女様に『様』付けされるのは、チョツと畏れ多いと言
うか、何というか……」

フィナが恐縮した。

「駄目ですか？ 何故、女性の方々は、皆お嫌がるのでしょうか？」
アーチエルは不思議がる。

「何故オルバニアンを知っている？」

アシュマがフィナに訊いていた。

「いえ、知っている訳じゃないわ。ただ、皆さんが話題にするもの
で、検索を掛けました」

「そうか」

「それはそれとしておいて、無線やら何やらを色々引つ掻き回して集めた情報なんですけど、オルバニアンさん達は、武装された男達に拉致されて、イルドリア領に連れて行かれた様よ。何でも首相官邸に連れて行かれるみたい」

フィナが言った。

「影の者達ですよ。さっき目撃しました。ガルマインが一枚噛んでるかも知れ無いですね」

ヨデイが断定する。

「さて、ヨデイ……何故お前が、『影の者』達が、ガルマインの配下だと知っている!?」

アシュマがヨデイを問い質す。

「先程オルバニアンに、教えてもらいましたよ」

ヨデイが言う。

アシュマは、あえてそれには突っ込もうとはせず、

「まだ詳しく状況を知らん。ビツシュの奴は、今どこに?」

と、フィナに訊いた。

「アゾビングの首相官邸の地下に、閉じ込められているわ」

「何?」

「先生は今、国王暗殺の疑いを、掛けられているの」

「馬鹿な……!」

「そうよ! 濡れ衣を着せられているのよ! だって、始めはノマン先生が、そのルーラン国王暗殺を告発しようとしていたんだもの。それをイルドリア領政府が強制逮捕して、閉じ込めたのよ! 表向き先生を首謀者として今は取調べ中と言う事だけど、領民は国王暗殺の事自体忘れつつあるわ!」

フィナが憤慨した。

「どちらにしても、ビツシュに会わなければな」

アシュマは、そう応えた。

……そして双方の情報を出し合った。

「成程な……どう思う？ ヨディ」

そして情報が出きった所で、アシュマが言う。

「ノナを追っていた方が『イルドラ』側で、ノナをさらった方が『イルドリア』側。どうも、双方何か深いかわりがあるみたいですね。これはフィナさんの情報が、大いに役立っている訳ですが……」

ヨディが分析をする。

「いえいえ……そんな……」

フィナが照れた。

ネルゼイが、

「やはりノナ・イルマがカギを握っている訳だ」

そう断定した……。

「本当に彼女、麻薬の密売人なのかしら？ そんな風には見えないし……確かに何か関係はあるのだろうけど、別の秘密を握っているとか……」

エファールは皆の意見に、異を唱えた。

「それにオルバニアンの事も気になるしな。奴は今、どうしているだろう？」

アルミナがオルバニアンの身を案じた。

「それは、ノナ・イルマと行動を、共にしているでしょう」

ヨディが断定をした。

「ルーラン国王暗殺の事も、気になりますわね」

王族らしく、そちらの方向からアーチエルが話を切り出した。

「しかし、何故国王暗殺なんだ？」

アシュマが言う。

「おそらく、暗殺をナラステイ市長に覆いかぶせて、自分はこのうと領主と市長を兼任する腹なのよ。アゾビングは」

憤りながらフィナが腕を組む。

「……そのナラステイと言うのとアゾビングと言うのは……？」

アシュマが訊いた。

「ナラステイと言うのは、ここ、イルドラの市長で、アゾビングと

言うのはイルドリア領政府の首相をしているわ。領主とも言っけど。まあ、この間、首相選挙で、ナラステイ市長がアゾビングに勝って、ぎゃふんと言わせて、もう直ぐ失脚ですけれどね」

何故かフィナは、ナラステイ**びいき**贖^{びいき}だった。

「それが国王暗殺等単純な事で、アゾビングが現職復帰出来るとは思えないが？　ましてやイルドラの統括権を得よう等とは……」

アシュマが言った。

ここで、ネルゼイは重要な見落としをしていた。

フィナが余りにもさらっと、ナラステイの紹介をしてしまったが故に、『イルドラの大物』の事に気が付かなかったのだ。

「どうする？」

アシュマは、ヨデイを見据えた。

「行きますか！　イルドリアに！！」

ヨデイが決めて見せた。

「とにかく今はそれしかないな」

ネルゼイも賛意を示した。

「じゃあ、俺はビツシュの救出に回る」

アシュマが言った。

「アシュマさまの御友人の、ですね？」

アーチェルが尋ねた。

「ああ、そうだ」

「ビツシュ氏も大事な証人の内の一人ですからね。おろそかに出来ません。宜しく願いますよ、アシュマ君」

ヨデイがアシュマに頼んだ。

これにて、いったん会議は終了と言う事になった。

一行はその夜、今日の疲れを取る為に、ホテルに一泊した。

翌日朝早く、一行はレンタカーを二台借りて来て、一台目にヨデイ、ネルゼイ、アルミナ、エファール、二台目にフィナ、アーチェ

ル、アシユマの振り分けで走り始めた。

車は双方とも幌無しの、バギータイプの車だった。
セントラルエレベーターに着いた。

ヨデイ達の車は、十六番エレベーターから降りる事になった。
フィナ達は降りれるエレベーターを捜して、時計周りに道を回っていた。

途中、改装工事区画があつて、大きく迂回させられた。

この改装工事はかなり大規模な物で、イルドラの頂上近くから底辺までもをブルーシートで覆っていた。

途中、この改装工事の為、数本のエレベーターが使用禁止となつており、大きく迂回させられた原因の一つだった。

イルドラの周回を、四分の一程回った頃だろうか、やっと、下に降りれるエレベーターを見つけた。

三十六と、刻印の入ったエレベーター郡だった。

そして、フィナ達は、三十六番エレベーターから、下の階層に向かって降りていった。

降りるエレベーターはガラス張りで、外の景色が見えた。

エレベーターから遙か下を見ると、そこには密林が見えた。

「少し暑いですわね」

アーチエルが汗を拭う。

ガラス張りのせいで、そこは熱帯の様になっていた。

植物相も熱帯そのものだ。

「ヨデイさん達とは、少しはなれた所に降りるわね。時間が掛かるけどいい？」

そうフィナが訊いた。

「仕方あるまい？」

アシユマが応えた。

エレベーターは地上に降りて、車は走り出した。

もう直ぐ、イルドラとイルドラの境を示すゲートを潜ろうとしていた。

ゲートでは、フィナがカードを差し出して、受け取る。
そして車は、走り出す。

簡単なものだった。

「アーチエル、ヨディに合流地点を確認しておいてくれ」

「分かりました」

アーチエルが携帯端末で、ヨディと話し始めた。

「はい、はい、……はい。そうです。では、又後程。……アシュマ
さま、ヨディ様が、ジャングルを抜けた所で、落ち合いましようっ
て」

「わかった」

「ところでサ、アシュマ……恋人、いる？」

唐突にフィナが、アシュマに訊いた。

隣では、アーチエルが左側の景色を見ながら、何でも無い風を装
って、聞き耳を立てた。

「はあ？」

アシュマは、素頓狂な声を上げていた。

「結構モてるンでしょ？ 良かったらサ……私……」

助手席に付けておいた簡易レーダーが、反応を示した。

「あっ」

アーチエルが、小さな声を発した。

「どうした？」

アシュマが反応を示す。

「追っ手らしいです。もうすぐ見える筈。七……八……十機！」

アーチエルが言った。

「もう頭にくるわ。いい所だったのに！」

フィナが怒りを顔おもてにした。

「振り切れるか？」

アシュマが短く訊いた。

「分らない」

フィナはとりあえず答えた。

アシユマは後を見回した。

数十メートル後を、小型の箱型サイコ・フライヤーに乗って、追手が来るのが見えた。

『その車、止まりなさい！ 止まらぬ場合は発砲する！』

「フィナ！ 振り切れるか？」

「分からない。やつては見るけど」

アシユマが座席を立ち、支柱を体の支えにした。

「チョツと危ないわ。立たないで！」

アシユマはそんな言葉はどこ吹く風で、フィナに構わず鬼虎を抜いた。

それを見た、サイコフライヤーの隊長らしき人物が、

「発砲許可が出ているんだ。構わん、発砲しろ！ 市街では発砲できなかったのを、泳がしていたのだ。弾をケチるな！ 思う存分弾をぶち込んでやれ！ イルドリア出張班の意地を見せてやれ！！」

そう言って、サイコフライヤー下部に付いているガトリングガンを、音を立てて発砲してきた。

指揮をしていたのは、アシユマとアーチエルが、最初にイルドリア側のゲートを通過しようとした時に、それを阻止した警備隊長だった。

どうやら、イルドリア側の人間だったらしい。

「きゃああっ」

「きゃあっ」

女性陣二人は、発砲された事に驚いて、下を向いた。

特に困ったのはフィナで、ハンドルを握る者が下を向いては、車はあらぬ方向に逸れて行く。

「フィナ！ 前を見て運転しろ！」

「そ、そんな事言ったって……きゃあっ！」

「銃弾は俺が防いでいる！」

「え？」

フィナがミラー越しに見てみると、確かに巨大な念導境界面が発

生し、銃弾を防いでいた。

これなら大丈夫、と思った矢先、車の行く手には崖しかなかった。

「きゃああっ！」

「きゃあっ！」

女性陣二人は悲鳴を上げた。

「ちいいっ！」

アシユマは舌打ちをした。

車は崖の途中で爆発し、炎上した。

「死体を搜索しますか？」

サイコ・フライヤー隊の部下は、隊長に聞いた。

「そうだな、死体を確認しない訳には行くまい」

サイコ・フライヤー隊は、そのまま搜索の任についた。

谷底では車が燻り続けていた。

第三節 潜入、首相官邸

セントラルエレベーターの第一号エレベーターから、公用車が出てきてそのままゲートへと向かった。

ゲートでは一切のチェックを受ける事は無かった。

ゲートの人間がその車はナラスティ市長の公用車だと知っていたからだ。

セントラルエレベーターの第一号エレベーターゲートは、市長専用のゲートだった。

このまま、真っ直ぐ行けばアゾビングの城、イルドリア領政府官邸に着く。

そして車はイルドリア領政府官邸へと吸い込まれていった。

その様子を建物の窓から見ている人物がいた。

「着いた様じゃの。行くか」

「はっ」

この、猿面で頭が薄く、背が低くて猫背の男こそイルドリア領政府首相、アゾビング・メズ、その人だった。

本人は似合っていると思っているのか、仕立てた濃いグレーのスーツを着ていたが、全然似合わなかった。

ストリートチップの革靴も、どこかちぐはぐだった。

杖を突いて足元が覚束無い。

ナラスティの乗った公用車が、領政府官邸入り口のロータリーを、回ってきた。

車が入り口の前で止まった。

車からナラスティ市長が現れた。

そしてそれを出迎えるアゾビング首相。

二人が握手をすると、周りに詰め掛けていたマスコミが、一斉にフラッシュを焚いた。

「これは、これは。イルドリアへようこそ、ナラスティ市長。よく

も、こんな田舎までわざわざ来られた。先ずは、中へ……」

アゾビングがへりくだって招き入れた。

それがナラスティにとって、嫌味に聞こえた。

「いえいえ、こちらこそ、お招き頂き感謝の至りです。アゾビング首相」

ナラスティも、心に無い事を言う。

「しかしなんにも無い所じやろう？ ナラスティ市長が羨ましい限りで……」

アゾビングも、皮肉の応酬をする。

「いえ、あれだけ騒がしいと、逆に静かな所にも行きたくなるものです」

ナラスティも、皮肉で返す。

「では、夜の会食時まで、ゆるりとすごされよ」

「そうさせて頂きます。では」

そうして、ナラスティは、官邸内を案内されて歩いて行った。後には、以前ヨディ達を襲ったマフィア風の男、ダムが控えていた。

「ナラスティ様、例の件でフィナが危ないので……」

「お前のアゾビング潰しか？ 好きにしろ」

その頃、首相官邸では、その一室にて、アゾビングが怒りを頭にあたまにし、

「くそっ！ 若造が！ いい気になりおって！」

椅子の脚を蹴っていた。

配下の者が、失礼しますとやって来て、

「アゾビング様」

アゾビングの名を呼んだ。

「何だ！？」

苛ついているアゾビングは、声を荒げて言った。

「ノリトレアの関白、ガルマイン様より御連絡が……」

「ガルマイン！ 何故それを先に言わん！！」

そう言つて、ひったくる様にして電話を取ると、兵士の脚を蹴り飛ばし、自分は猫なで声で、

「は、アゾビングで御座います。ガルマイン様」

アゾビングは嫌らしい程態度を変えて、応えていた。

「いかが致しましたか、ガルマイン様」

「いやな、儂がそちらに貸している影の者達シャドウズの使用感は、いかがと思つてな」

電話の向こうで、ガルマインが質問していた。

「いや、それはもう、結構な感じで、はい」

「それでは、分からぬ。迅速なのか、果敢なのか、隠密行動に適しているのか、いないのか？ どうなのじゃ」

ガルマインは、苛ついた様に、問いたでした。

「少々お待ち下さい、担当の者と代わります故……」

アゾビングは、慌てて回線を、そちらに回そうとした。

「それはならん」

ガルマインが止めた。

「は？ でも、しかし……」

アゾビングが困惑する。

「ワシは指揮官としてのお主に聞いておるし、そのつもりで貸し付けたのじゃ。それが、担当の者と代わるじゃと？ これでは、何の為に、お主に貸し付けたか、分からぬでは無いか？ この虚け者！
！」

ガルマインは怒った。

この無能者、とも思った。

「全くもつて、その通りでございます、はい」

アゾビングは小さくなりながら、応えていた。

「なにが、全くもつて、その通り」じゃ！ 少しはその慇懃な態度を改めよ！ 虫唾が走るわ。この有様では、人の上に立つ器では

ないわの。おお、もう少しで首相の座を追われるのだったな。これは失礼。しかし、よくも今まで首相等をやってこれた物よ。そちの領民は余程の間抜けと見える』

ガルマインは、アゾビングに罵詈雑言ばりざつごんを、浴びせた。

「……………」

アゾビングは、それにじっと耐えている様だった。

『ここまで言われて、良くも耐えていられる物よ。まあよい。わたしは近々そちらに行く。その時はよしなに頼むぞ？』

ガルマインはとどめを刺した。

「……………」

そうとしか今のアゾビングに、応える術は無かった。

『あと、そちらにアシュマ・アトーと、アーチエル・ナヴィア・アツプルトン王女が、領内にいる様だったら『保護』を頼む。いいかくれぐれも傷一つでも付けるでないぞ？』

ガルマインは言って……、

「……………」は、畏まりました」

アゾビングは応えたが、一体どこまで信用していいのか分からなかった。

『ではな』

ガルマインが電話を切る。

「はっ」

そう言つて、電話は切れてしまった。

その直後、アゾビングはその電話を思い切り床に叩きつけ、何度も踏んで壊してしまった。

そしてアゾビングは、その『影の者』担当の者を、衛兵を呼んで捕えるよう命令をした。

衛兵が、

「一体何の罪で御座いましょう」

そう聞くと、

「領政府反逆罪である」

そう応えた。

まるで自分自身が、領政府そのものであるかの様ような物言いだ
った。

そこに住む者の意見等、そっちのけである。

そういう意味では、ガルマインの言うとおり、人の上に立つ器で
はないのかもしれない。

再び、別の配下の者がやって来て、

「ノナ・イルマを連れて参りました」

と、伝えた。

「おお！ そうか！」

アゾビングは、先程とは、打って変わって態度を変え、機嫌を良
くし、

「これで、奴等に、一泡吹かせられる！」

等とうそぶいて、そして部屋中に低く押し殺した笑い声が響いた。

フィナは携帯端末を手にし、何かのスイッチを入れた。

「これで救援がくるわ」

ジャングルの中、フィナは言った。

そう、三人はアシュマと鬼虎の念導境界面によりを保護され地面
に降り立った。

降り立った所は木々が立ち鬱蒼と茂ったジャングルだった。

辺りにじつとりと湿った空気が達こもり、じつとしていても汗が
滲んで来た。

「フィナ。君の後盾は誰だ？」

アシュマは訊いた。

「ナラステイ市長よ！ とても協力的。頼りになるわ」

フィナはきつぱり応えていた。

「胡散臭いな」

アシュマは眉根を寄せた。

「わっ、嬉しいな。焼き餅？」

フィナの言葉に、逆に焼き餅を焼いたのはアーチエルで、アシュマが座っている隣にわざわざ座りなおして、少しふくれっ面になりながら、アシュマの腕を取って見せた。

「？」

アシュマは腕をとられて、何なのかと思った。

何で、今、わざわざ腕を取るのか、といった感じである。

すると、フィナがすぐさまそれに反応し、

「！ お二人はそういう関係に御座いましたか！ これはとんだ御無礼を……！ ただ、ナラスティ市長は、わが師を救出するのに手を貸してくれるだけで……はあ、短い恋だったなあ。やっぱりモーション掛けない方が、正解だったかなあ？」

と、フィナは少し落ち込んだ。

「？ どういう関係だ？」

アシュマは迂闊にもそう口を滑らせた。

この言葉にアーチエルはしばらく頭にきて、アシュマの手の甲を少しつねった。

「い、いたっ！ 何をするんだ？ アーチエル」

「『何をするんだ』じゃ、御座いません！ 大体わたくし、あの時が、ファースト・キスだったので御座いますのよ！ それなのに『どういう関係だ』とは、なんて事を仰るんですか？ 大体、アシュマさまは、わたくしの事をどう考えて……アシュマさま？」

アシュマの反応が返ってこない事に、アーチエルは不安感を抱き、アシュマの方を振り返ってみてみる。

（あら？ まだ、入り込む余地、あるかな？）

フィナはフィナで、不謹慎にもそう思った。

「……………」

アシュマがどこか上の空になっていた。

「どうかなさったのですか……アシュマさま？」

アーチエルは、不安になり訊いてみた。

「何か聞こえる」

「私は何も……もしかして味方の搜索艇かも」

フィナはそう言つて、よろよろと立ち上がった。

「いや、違う。これは生き物の足音だ」

そうして聞くと確かに、

ずしん、ずしん……。

と、足音が響いてきた。

「かなりの大物だな」

アシュマが冷静に言つのに対し、女性陣はその足音の正体に、恐怖していた。

『それ』が近付いてくるにしたがつて、大木同士の隙間から見えるその姿に、段々とその正体に気が付き始めていた。

「木陰へ隠れている！」

アシュマは言つた。

『それ』は大木の向こう側から出てきた。
「^{ドラゴン}竜……！」

それは、中生代、白亜紀に生きていた暴君竜そのままの姿で、今も生きていた。

イルドラには古代の生物を見世物にする、テーマパークがあると
言つ。

ここの湿度と気温が高いのも、そのせいかも知れなかった。

この暴君竜は、そこから抜け出した物だろうか？

ともかく、眼の前にいる物は正に、暴君竜だった。

「きゃああああああっ……！」

女性陣は腰が抜けた様になり、その場から動けないでいた。

女性陣が動けない今、ここを主戦場にする訳にはいかなかった。

アシュマは、走りざま鬼虎を抜き、ドラゴンに向かっていった。

ドラゴンが大きく口を開け、アシュマに対してかぶり付こうとするのを、アシュマは速度を増して走りぬけ、ドラゴンの下へもぐりこみ、その際に、ドラゴンの顎先から喉の根元付近までを斬り割

っていた。

ドラゴンはその場でもがき苦しみ暴れた。

そしてアシュマは、ドラゴンが暴れられない様に、片方の足首から先を斬り飛ばし、素早くドラゴンを乗り越え、反対側に転じて、反対側の足首を斬り飛ばしてしまった。

ドラゴンは横倒しになり、その場でじたばたともがいていた。

アシュマはドラゴンのとどめを刺す為に、ドラゴンの後頭部側へ回り込み、鬼虎で斬り付けた。

一回だけでは首は斬り落とせず、二度三度と斬り付けて、ようやく仕留めた。

その間に、ドラゴンは相当もがき苦しんだが……。

「アシュマさま」

アーチエルは、アシュマの側へ寄り、持っていたハンカチで、アシュマについた返り血を拭っていた。

フィナは、アシュマの卓越した技量と度胸に感嘆していたが、あの返り血を全身に浴びて、赤黒く染まったアシュマを、鬼か修羅かのように見ていた。

「アーチエル様」

フィナはアーチエルを呼んだ。

「何でしょう？ フィナさん」

アーチエルは、フィナのいる所まで、小走りに走っていった。

「アシュマさんって怖くないですか？」

「何故です？」

「だってあの姿、どう見ても修羅ですよ」

アシュマも近付いてきて、

「フィナ大丈夫か？」

アシュマは聞いた。

「はっ、はいい!!」

フィナは、身を硬くして応えていた。

「もっと厄介な奴らがくるぞ」

アシュマは予告した。

「もつと厄介な奴ら？」

フィナは訊き返していた。

「人間だ」

暫くすると、金属的な飛行音が近付いてきた。

例の箱型サイコ・フライヤーだった。

「追手だ」

アシュマはアーチエルを抱え、鬼虎の鯉口を切って封印を解いた。こうしておく、鬼虎による念導境界面が、発生するのである。

不思議な事は、アシュマの意思無しに、鬼虎が鞘走ったり、鬼虎が鯉口を閉じたりする事が無い事であった。

「フィナ！ 走れ！」

アシュマは促した。

「え？ 一体なんなの？」

フィナは事情が飲み込めず、走る気配を見せなかった。

先程は運転するのに夢中で、箱型サイコ・フライヤー等、頭に入っていないかったのだ。

「いいから走れ！」

アシュマが叱咤した。

それでやっと、フィナも走り出した。

アシュマはアーチエルを抱えていた。

「アシュマさま、私も降りて走ります。ですから……」

「アーチエルはこのままでいてくれ！」

アシュマがそれを願う。

爆音と共に爆発が起こった。

どうやら、ミサイル攻撃を行った様だ。

「何なのよう！ もう！」

フィナが訳も解らず、怒りを顕にした。

二発目のミサイルが、発射された様だ。

ミサイルは、鬼虎の念導境界面に命中し、半球状に炎が展開した。

炎は光に変換され、雷光となって、鬼虎の鯉口に吸い込まれていた。

「きゃあ！」

フィナは、歩みを止めてしまった。

「駄目よ……もう走れない……」

肉体的より、精神的に参ってしまったている様だ。

「アシュマさま私を下ろして下さい。そして私の代わりにフィナさんを……」

アシュマはアーチエルを下ろした。

その代わりに鬼虎を抜いた。

鬼虎は白銀色に光っていた。

この様に光った時の鬼虎は、何がおきても不思議ではなかった。

アシュマのイメージ通りに、その力を示すのだ。

「アシュマさま、殺してはなりません」

アーチエルはいつもの様に無駄な殺生を禁じた。

「分かった」

アシュマは、鬼虎を地面に突き刺した。

それを武装解除と見たのか、次々にサイコ・フライヤーは降り始めた。

「よし、ゆっくりうつ伏せになり、両手を頭の上に……？」

アシュマは、命令に従う気配を見せなかった。

兵士は疑問に思った。

武装解除をしているのなら、命令を聞いてもいいではないか？

もう一度命令を伝える事にした。

「ゆっくりうつ伏せになり、両手を頭の上に……」

その時、最後の兵士が、地面に降り立った。

アシュマは、鬼の髑髏が施された柄頭に手を置き、辺りを見回した。

全員が、地面の上に降り立った様だ。

アシュマは、

「はっ!!」

と、気合を注入すると、地面に雷光が走り、サイコ・フライヤーの搭乗員、全員が感電をし、ばたばたと兵士は皆倒れていった。

「感電したのよねえ？ 何で私達は、大丈夫だったのかしら？」

フィナは訊いた。

「それは、鬼虎の念導境界面内に、入っていたからだ」

アシュマは解説を加えた。

「成程……」

フィナは納得した様だ。

「！」

アシュマは空を見上げた。

「どうしたの？ アシュマさま」

アーチエルが、不審な面持ちを見せた。

「聞こえる……」

アシュマがまた言った。

「え？ また？」

フィナが、辟易しながら言った。

「奴の弟子にしちゃ、随分と体力が無いもんだな」

アシュマが言った。

「そんな事は無いと思うんだけどなあ。もつと修行しなくちゃ、駄目なのかなあ。アシュマさん見てると、自信なくしちゃうんだよねえ」

フィナは、はあ、と、ため息をついた。

「フィナさん？ アシュマさまと、比較してはなりませぬ。アシュマさまが特別なのです。ですから気に病む事はありません」

アーチエルはそう言ってフィナを慰めた。

「慰めになつてないよ。とほほ」

フィナは嘆いた。

「来るぞ？ もう逃げられんぞ？ いいのか？」

アシュマが皆に訊いた。

木の向こうから、サイコ・フライヤー独特の金属的な飛行音が、聞こえてきた。

「もう、どうにでもして」

フィナが、諦めとも取れる言動をした。

「打ち落とすか？ アーチエル」

アシユマが、鬼虎を握りなおした。

「なりませぬ。もう少し様子を……」

アーチエルが止めた。

サイコ・フライヤーが、木の陰から現れた。

『こちらは、ハルナ・ナリスです。そこにフィナ…… フィナ・エマルはいますか？』

「え？ います！！ 私がフィナ・エマルです！！」

今の今まで、諦め顔で俯いて座っていた彼女が、今はうってかわって、元気に両手をサイコ・フライヤーに向けて、大きく振っていた。

サイコフライヤーは、降下を始めた。

ヨディは望遠鏡を覗きながら、

「あれがアゾビングの城、イルドリア領政府官邸ですね？」

そう尋ねた。

今は使われていない廃ビルの屋上に、ヨディ達は陣をとっていた。その屋上から望遠鏡で、イルドリア領政府官邸を覗いていた訳だ。

「セキュリティ関係は、完備されていると見ていいでしょうね」

侵入の難しさを暗に匂わせていた。

「本当にあそこに行くの？ 装備がすごそうよ？」

エファールが心配をした。

「そうですね。ちょっと、手間取るかもしれませんが」

ヨディが頭を捻った。

「男たる、オルバニアンを助ける為だろ！ しっかりしろよ！」

アルミナが気合を入れた。

「お前、泥棒だろ！？ ちゃんとしてくれよ」

果てはネルゼイが、とんでもない事を口走った。

「ま、まあ、皆さん。お腹空きませんか？ 何か食べに行きましょう」

とうとうヨディが、皆からの『口撃』に音を上げて、食事に逃げ込もうとしていた。

「そういえば、アシユマからの連絡が、無いわね」

大事な事でも思い出したかの様に、エファールがヨディに言った。

「まあ、彼の事ですから、大丈夫だと思いますよ」

ヨディは、少しも心配はしていなさそうだった。

「そうよね。そうでなくては……」

エファールは、自分に言い聞かせる様に言った。

ヨディ達は、廃ビルから出て行った。

その首相官邸の地下深く、エレベーターで降りて来たのはアゾビングだった。

暗く湿ったコンクリートに囲まれたそこは、元来地下シエルターとして作られた物だった。

それだけに頑丈に作られていた。

光源が、裸電球だけである事が、余計陰鬱な印象を与えていた。

エレベーターの出入口を、警備している兵士が敬礼をする。

そしてアゾビングの歩みは、真っ直ぐ奥のドアへと向かって行く。やはり、そのドアには警備兵がいて、アゾビングに敬礼をしていた。

そしてすぐさまドアが開かれた。

「大儀である」

アゾビングはそう言って、中へ入って行く。中にもコンクリートの壁と、ドアがあった。

そのドアは、流石に自分で開けねばならない。
重たそうな音を立てて、そのドアを開く。

中には、ノナ・イルマと、オルバニアンがいた。
中は綺麗に整理され、一見リビング風にも見て取れた。
出入り口は頑丈に閉ざされている物の、待遇はかなりよい様である。

事実、何部屋かに分かれており、ちょっとした、ワインセラーの
様な物まで置いてある。

元来は、かなり身分の高い者を、幽閉しておく為にある様な施設
だった。

「待たせたの」

アゾビングが言った。

「い、いえ？ あなたは……？」

ノナが訊いていた。

「アゾビング・メズじゃ」

アゾビングは名乗りを上げた。

そして、オルバニアンの方を見た。

「お前、暫く部屋の外に出よ」

横柄に、オルバニアンに命じた。

「何故、出なけりやならないんでえ。やなこった」

オルバニアンは、傲慢な態度を取るこう言うタイプが、一番嫌い
である。

こうなったら、梃子でも動かない事を、心に決めた。

「お主がいると話しにならん。出てゆくがよい」

アゾビングが、苛ついて言った。

「ノナを一人にすると、ノナが危ない。出てゆく訳にはいかねえ」
そう言つてオルバニアンは動かない。

「オルバニアン……」

ノナは少し感動した呈を見せた。
しかしそれもつかの間で、アゾビングが、

「警備兵！」

と、呼ぶと、警備兵達はオルバニアンを脇から抱えて、

「てやんでえ！　ちくしょう！　馬鹿野郎！　離しやがれ」

そう叫ぶオルバニアンを強引に連れ去った。

「さて、うるさい者は居なくなつたと言う事で、やっと話が出るの」

アゾビングはニヤつき、

「よっこらしよ」

と、ノナの前にある椅子に、声をかけながら座った。

ノナは目の前に蛇か、はたまた、ひき蛙でも見た様な、嫌悪感を抱いた。

「いやいや、そう硬くならんでいい」

アゾビングは勤めて優しく言つたが……、

「私達に何をしようって言うの！？」

ノナは警戒を一層強くした。

「ほう、『私達』と来たか」

アゾビングは揚げ足を取る。

どうやら楽しんでる様だ。

「ど、どうだつていいでしょ！」

「ワシ達は、お主達を、どうこうしようと言うのではない。逆に助けてやるうと思つてゐるのじゃ」

アゾビングは、そう言つて取り入ろうとした。

「！？　どういう事？　じゃあ、私を狙つていたのは、誰だつて言うの？　アナタじゃないの！？」

彼女は、更に警戒を強くした。

同時に今、彼女は一つの疑惑を持ち、それが確信にたどり着こうとしていた。

それは、彼女にとって疑つてはならぬ事。

それは、彼女にとって破滅を意味する事。

そしてそれは、アゾビングの口から、もたらされようとしていた。

「ナラスティじゃ」

彼女は聞いてしまった。

禁断の名前を。

彼女は、心臓が凍りつく様な想いがした。

「嘘……よ。……嘘、嘘！ 嘘だわっ！！ そんなの！！」

ノナは懸命に、否定しようとした。

「嘘ではない」

「嘘よ！」

「否定しようとも無駄じゃ」

「証拠が無いわ！」

「これを見てみい」

アゾビングは、一枚の写真を取り出した。

そこにはナラスティと、例のマフィア系の臭いのする男、ダムが写っていた。

「……！！」

ノナは息を呑んだ。

「知っているのではないのかな？ この男を」

アゾビングはマフィア系の臭いのする男を指差し畳み込んだ。

「そ……んな……」

ノナは、とても信じられないと言う表情で、呆然としていた。

「そこでだ。奴を見返してやろうとは、思わんか？」

アゾビングは、ある提案をしようとしていた。

ノナは、この男は、何を言い出すのだろうと思った。

「奴とお主との関係を、世間に公表すれば……」

アゾビングは、穏やかならぬ事を、言っていた。

「！ 出てってよ！！」

これはノナの癪に、障ったらしい。

ノナは、そこら辺にある物を引っつかんでは、アゾビング目掛け放り投げ始めた。

「出てってッたら！」

ノナは、もうどうなっているのか、訳がわからなくなっていた。
「わかった、わかった。気が変わったら呼んでくれ……」
「気が変わる訳無いでしょう!!」

ノナはグラスを持ち、アゾビング目掛けて投げつけた。

その時にはもう素早く、アゾビングは部屋の外へと逃げていた。
「全く酷い目にあったワイ。それにしてもあの小娘め」

這う這うの体で外に出てきて、一言目がそれだった。

全く首相の威厳も、あったものではなかった。

そこに配下の者が来て、耳打ちをした。

「なんだと？ わかった。直ぐに行く」

アゾビングが行きかける所へ、

「おい、おっさん」

オルバニアンが、アゾビング首相を呼び止めた。

「なんじゃ？」

アゾビングは、今は急いでいるのだと、言わんばかりに応えていた。

「中に入ってもいいか？」

オルバニアンは問うた。

「物好きも居る者じゃのう。わざわざ虜の身になるとは。好きにせい」

アゾビングは、奇異な物でも見るかのようにして、立ち去った。

「けっ！」

オルバニアンはドアを開け、中に入ろうとした。

入ろうとしたは良いが、ノナの鋭いローキックですねを蹴られ、

「~~~~!!」

オルバニアンが、悲鳴にならない悲鳴を上げると、すかさずノナの膝蹴りが金的に命中。

「~~~~!!!!」

オルバニアンは、悶絶状態になった。

そこで初めてノナは、入ってきたのがオルバニアンだと、気が付

いた。

「あ……ごめ〜ん……やだ、大丈夫？ ごめんね。あの、ヒヒジジイと間違っちゃったのよ」

ノナはオルバニアンを氣遣った。

「くうううう……んな、大丈夫な訳やねーだろ！！　ここはなア、男の子にとっちゃ、とても大事な所で……」

オルバニアンは怒った。

「ごっ、ごめんね……」

本当に濟まなさそうに、ノナが謝った。

（う〜〜ん、やっぱアイドルは可愛いなア。許しちゃおーかな？）
現金にも許す氣になった。

「うん。許す、許す。何？　どーしたの？　あのジジイに犯られそーになったの？」

ノナは、むかつとして、

「なんて事言うのよ！！」

思いつきり股間を蹴り上げた。

「！！！！」

オルバニアンは余りの事に、泡を吹いて失神してしまった。

「あらやだ、大丈夫っっ！？　ごめ〜〜ん！！」

ガコン！

と、言う重い音と共にエレベーターは止まった。

そこへ、アゾビングが降りてきて、警備の兵が敬礼をした。

先程の階層よりも深く、ドアは錆付いて、この階層全体がむっとして、湿度が高かった。

明かりは裸電球のみで、蛾がその周りを飛び回っていた。

「どうだ、ノマンは元氣にやっているか？」

アゾビングが問うと、

「はっ、こちらに」

兵士は機敏に応えた。

何しろ、このアゾビングは気分次第で、側近の者だろうとなんだろつと、癪に障れば牢獄に放り込んだ。

だから、一時も気を抜けないのである。

ここの階層はシエルターを改造した牢獄で、アゾビングが政治犯用に用意した物だった。

政治犯用……と言っても先程の理由で、誰が入れられるか解ったものではない。

通路の両側に牢屋が連なっており、その真ん中をアゾビングが通って行った。

その牢屋だが、人はまばらだが一つの牢屋に数名ずつ入っていた。しかし、生气と言うものが感じられず、ぐったりしている者が殆どだった。

食料を与えてないという話や、囚人の回転率が速いという噂まで飛び交い、あながちそれも嘘ではないと、囁かれている。

そしてその一番奥、ビッシュ・ノマンが繋がれている牢獄へ、アゾビングはやって来た。

そう、ビッシュ・ノマンは、鎖で十字架につながれ、身動き一つできずにいた。

ビッシュは、意志の強そうな顔と、黒いたてがみの様な髪の毛を持ち、人からは『獅子の剣者』と、呼ばれていた。

今は隆々とした上半身をさらけ出し、あちこちに拷問の痕を残していた。

痣に火傷、斬り傷、擦り傷。

惨たらしくもあつた。

キィ……。

軋む音と共に、牢の中へアゾビングが入ってきた。

「久しぶりよのお。ビッシュ・ノマン」

アゾビングは、鎖で雁字搦めになっているビッシュを、勝ち誇った様に見ていた。

「…………アゾビング…………」

ビツシュと呼ばれた囚人は、いままで、眠っていたのか、意識の混濁が認められた。

「…………アゾビングよ、国王暗殺等止める。無理だ。不可能と言ってもよい…………」

ビツシュは謀略の中止を求めた。

「御忠告有難う」

アゾビングはそう言って、高压電流銃をビツシュのわき腹に当てた。

電流が体中に走り、ビツシュは、

「うがああああっ！」

と、苦悶の声を上げた。

「ワシからの礼じゃ。ありがたく受け取るがよい」

アゾビングはなおも高压電流銃をビツシュのわき腹に押し当てた。

「うがああああっ！！」

アゾビングは暫く、高压電流銃を押し当てた後、質問を始めた。

「ところで。アシュマ・アトーとは何者じゃ？」

アゾビングの口から、意外な名前が漏れた。

「…………なっ、何故その名前を…………！！」

ビツシュは確かに、自分の危機を、アシュマの手を借りて、乗り切ろうと考えていた。

その為に書簡を使う事もした。

しかし、アゾビングから、その名前を聞かされたという事は、計画が頓挫した事になる。

「とぼけるな。お前の後ろ盾は誰じゃ？」

アゾビングは何かを知りたがっている。

それは確かだった。

しかし、そもそも、

『そんな者はいない…………』

のである。

アゾビングが幾ら聞き出そうとしても、無駄な事だった。

アゾビングは、又も高圧電流銃を押し当てた。

「あああああっ！」

アゾビングは高圧電流銃を押し当てたまま、質問を続けた。

「お前の後ろ盾はナラスティか？ ……再度問う。アシユマ・アト

ーとは何者か！？ 奴はお前の送ったチケットで、入領しようとした！」

アゾビングは、やっと高圧電流銃を離した。

「……なんでもない……ただの友人だ……」

一つ解った事がある。

アゾビングにとって、アシユマ・アトーは『何者か』なのである。全てアゾビングには、知られていないのである。

迂闊な奴。

ビツシュはそう思った。

希望は、まだ、ある。

「……まあ、よい。どちらにしても、都合が良いのは変わらない。

これで国王暗殺を、ナラスティと、お前の仲間がやった事に出来る」

アゾビングは不穏当な事を言った。

要するに、アシユマを国王暗殺の首謀者にして、同時に政敵の失脚を狙う。

この男は、そういう事を、言っているのである。

この男、自らが、国王暗殺を企てておきながら……。

「何だと!？」

ビツシュは、身をよじって、何とかこの呪縛から、逃れようとした。

「うがっ!」

その時ビツシュは、腹部に鋭い痛みが走ったのを、覚えた。

「立場をわきまえんかあ！」

看守に警棒で、腹部を突かれたのだ。

「この……」

しかしビツシュには精々睨む事しか出来なかった。

「既に奴らは、我がイルドリアの警備兵に危害を加え、これを突破している。これもいい材料じゃな。ナラスティの放ったテロリスト、国王を暗殺す……か。くくく……これはいい」

アゾビングは、事が自分の思っている以上に運んでいる事に、御満悦の様だ。

「まっ、まて……！」

ビツシュは、暗殺を思いとどまらせる事を、言おうとした。

「ん？ 気が変わったのか？ そうではあるまいの……。まあ、気が変わったのならいつでも言ってくれて構わんぞ？ 尤ももう筋書きは変わらんがの……。く、くく……けっけっけっ！」

アゾビングは、すっかり自分に、酔っていた。

「……くそっ！」

ビツシュは悪態しか吐けず、そのビツシュの言葉と同時に、ガシャン！

と、いう牢獄の閉まる音が聞こえた。

サイコ・フライヤーが雲を掻き分け、空を飛んでいた。

アシュマ達を助けた船だ。

準戦闘用なので、居住空間は必ずしも良いと言える物ではなかったが、仕方がない。

いま、サイコ・フライヤーはナラスティ、イルドラ市長の市政府官邸に向けて、飛んでいた。

そのコクピットで、行き先まで自動操縦にして……。

「どうも済みません、ハルナさん」

フィナは、ハルナと呼んだ女性に、感謝の言葉を述べていた。

「いいのよ。ところでこの人が？」

ハルナと呼ばれた女性が、尋ねていた。

「ええ。アシュマ・アトーさん。こちらの女性がアーチェル・ナヴ

イア・アップルトン王女。レキシタニアの王女様にあらせられます。
……アシュマさん、こちらはナラステイ、イルドラ市長の秘書官で
……」

「ハルナ・ナリスです」

ハルナと名乗った秘書官は、きちんと切り揃えられた前髪と、ストレートのセミロングの髪で、マントの前を閉じて羽織り、大人の雰囲気身をまとった、美形の女性だった。

だが、少し凄みのある顔つきでもあった。

「……………」

アシュマはその彼女を前にして、何故か警戒の色を落とさなかった。

「大丈夫よ、敵じゃないわ」

「ハルナ様、アーチエル・ナヴィア・アップルトンです。以後お見知りおきを」

アーチエルは、なんの屈託も無く話した。

「勿体のう御座います。王女様。こちらこそ宜しくお願いいたします」

「さあ、最後はアシュマだけよ？ 覚悟を決めて言っちゃいなさいよ！」

フィナがうるさい。

アシュマは油断無く、細かい仕草まで観察していた。

「……………アシュマ・アトーだ。よろしく頼む」

無愛想な挨拶をした。

「こちらこそ」

ハルナも返事を返した。

そして、

「それよりも、その、血まみれの格好はどうなさったんですの？

アシュマさん。アーチエル様も。まさか、あそこに倒れていたドラゴンを、お二人で倒したというんじゃあ、ないですよ？」

ハルナはわざと試す様に聞いた。

「いえ、ちがいます」

アーチエルが言った。

やはり。

そこまで出来る人間がいるとしたら、化け物だ。

人間が、そこまで、出来る訳が無い。

ハルナの思考は、そこにたどり着いた。

が、次にアーチエルが言った言葉は、ハルナを驚愕させた。

「アシュマさま、一人で、仕留められました」

そんな、いる訳が無い。

その様な事の出来る人間が、この世に。

「然様で御座いますか。ではその血は、ドラゴンの返り血なのですね。市政府についたならお召し物を洗わなくては」

等とハルナは言った。

が、ハルナは、あのアシュマ・アトー、こちらの敵になるや否や？

この事が、頭から離れなくなっていた。

アシュマもアシュマで、マントの内に隠された、杖の様な物が気になった。

「そのアシュマ君！ ハルナさんのマントの下は、何もありません！ それ以上覗こうとするなら、浮気罪で告訴して、アーチエル様に裁いてもらいます」

フィナが茶化した。

「……………」

アシュマは依然警戒を解かなかった。

「あーあ、駄目だ、こりゃ。処置無しだね」

フィナは言った。

アシュマのそんな態度は、いつもの事と全く気にせず、アーチエルが、

「フィナさん、私の端末、駄目になってしまったんですけれど、フィナさんの端末貸していただけませんか？ ヨディ様に連絡を入れようと思って……………」

そう言った。

「あー。アーチエル様、私もなんですよ。どうやら、駄目になっちゃって……どうしてなんでしょう?」

フィナも同じ事を、訴えていた。

「強い電磁波の近くにいなかった? 例えば、雷とか……」
ハルナが言った。

「雷? ……あ! さっきの!」

フィナが何かに、気付いた様だ。

「アーチエル様! さっきのアシユマさんの感電したの! あの電磁波で、携帯をやられちゃったんですよ。きつと」

「ああ、成程……」

アーチエルも納得した。

「俺のせいかな?」

アシユマが、自分の事を指差して言った。

だが、困った風ではなかった。

「気にしないで下さい。アシユマさまのせいではありません。あの時は、あれが、最良の方法でしたもの」

アーチエルはアシユマを慰めた。

「でも、ヨデイさん達と、連絡が取れなくなってしまいましたね。

……そうだ、ハルナさんの端末を……」

フィナが言いかけた所へ……、

「御免なさい……私、今日持って来なかったのよ、端末」

ハルナがそう言った。

「そうですか」

残念そうにフィナが言った。

アシユマ、アーチエル、フィナの三人は、イルドラの市政府官邸に、来ていた。

さすがアーチエルは、小国なりとも一国の王女と言う事で、堂に

入った物だった。

フィナはどことなく、おどおど、そわそわとしていた。

アシュマは、この空間にどことなく殺氣の様な物を感じ、鬼虎の鯉口に手を添えていた。

市政府官邸の政務室と言う事だったが、全体が白で統一され、どこか寒々しく『死』を 連想させた。

ソファ等の丁度類も白で統一されていた。

突然、ハルナが入って来て、

「お腰の物を」

アシュマとフィナに言つて、鬼虎を取り上げて行つた。

アシュマは、

（いざともなれば、素手にてやるまでよ）

と、覚悟を決めた。

後の扉が開き、ハルナを伴つてナラスティが現れた。

「諸君らか？ かのビッシュ・ノマンを助け出して、アゾビングの不正を糾したいというのは？」

ナラスティ、イルドラ市長が問い質すと

「はい、そうです。市長。是非お力をお貸し下さい」

フィナが藁にも縋る一念で、ナラスティに協力を求めた。

「良いでしょう。出来うる限りの援助を致しましょう。そちらの方々もそうですか？」

問われて

アーチエルは、

「はい」

と言ひアシュマは、

「いいえ」

と、応えていた。

「つまりは、どう言う事なのですか？ えーミスター……」
わざと詰まった振りをした。

「アトー。アシュマ・アトー。ミスターは要りません」

アシユマはこの男は好かん、と思った。

（なんと、大物が掛かった！ ならば向こうの女性は……）

ナラスティは内心ほくそえんだ。

面には出さずに。

「つまりは俺がビツシュ・ノマンを助け出して、彼女……アーチエルはここに保護をして貰う……そういう事です」

アシユマはそう説明した。

「いいえ、違います」

アーチエルは、アシユマの前言を翻した。

「違うという？ ミス・アーチエル……」

「またも、言葉に詰まった振りをして……」

「アップルトン。アーチエル・ナヴィア・アップルトンに御座います。市長」

本名を聞きだした。

単純だが、名前を聞き出すには、一番効果的な方法だった

「おお、やはりそうでしたか。知らぬ事とはいえ、大変御無礼を致しました。どうぞお許し下さい」

（アーチエルか。こちらも網に掛かった。もう逃がすものか……）

ナラスティは口ではそう言った物の、心の内では喜んでいた。

「いえ、どうぞ御気に、なさらぬ様に……」

アーチエルはそうは言ったが、この青年のどこか、蛇を思わせる何かが、アーチエルに生理的な嫌悪感を抱かせていた。

その蛇がアーチエルの手の甲にキスをした。

全身の肌が泡立ち、背中に悪寒が走った。

が、一切表情は、変えなかった。

流石は、一国の王女である。

「では、どうなさるので？」

ナラスティ市長が訊いた。

「アーチエルは、ここで保護を」

アシユマが言った。

「アシュマさまと、一緒に救援に……」

アーチエルも譲らない。

「いかなさるのです？」

ナラスティが、二人に答えを促した。

「アーチエルはここに残れ」

アシュマが強く命令した。

「嫌です。私も一緒に！」

アーチエルも珍しく、強く拒んだ。

「だめだ。これから行く所は、アーチエルにとって危険すぎる」

アシュマがアーチエルを説得に掛かる。

「アシュマさまお耳を」

アーチエルが、話を密かにしたいと言うのは、余程の事なのだろう。

アシュマは、アーチエルの話を聞く事にした。

（わたくし、どうにもあのナラスティ市長が、信頼できません）

アシュマにとって、アーチエルが驚くべき事を言った。

博愛主義のアーチエルが、とてもそんな事を言うとは、思わなかったからである。

（何を理由にそんな事を）

正にアシュマにとって、今の素直な感情である。

（勘で御座います）

アーチエルにしては、不合理な答えではある。

（勘か……確かに俺も、奴は好かぬ所はあるが……）

だが、アシュマにとって勘は、最も重要視すべき物の内の一つである。

その人が持てる全ての判断能力を、瞬間的に引き出した物が勘であるとアシュマは思っている。

それが、普通の人間ならまだしも、言い出したのがアーチエルである。

他の人間と違って、何か感じる所があるのだろう。

しかし……。

「いかがですか？」

アーチエルが訊いてきた。

アシュマは迷った。

迷ったが……、

「分からぬでも無いが、だめだ」

そう決定した。

「アシュマさま……！」

アーチエルは叫んだ後、残念そうに俯いた。

「決まりだ」

アシュマは断じた。

「では、その様に手配して、構わないので？」

ナラスティが訊いてきた。

「構わぬ。実働部隊は、俺と、フィナと、あのハルナと言う、女だ」

アシュマは前記の通りとした。

「アシュマさま……」

アーチエルは、内心の不安を隠せないでいた。

「分かりました」

アーチエルが、残念そうに俯いた。

ナラスティは、内心にたりと笑った。

「その前に、お召しの物を。洗いますゆえ。次に湯殿へ」
ハルナが言う。

ナラスティが手元の呼び鈴を鳴らした。

「御用に御座いますか？ ご主人様」

侍女が直ぐにやってきた。

「お客人を湯殿へ案内あないせえ。丁重にな」

ナラスティは一行をもてなす様、メイドに命じた。

向こうにアゾビングの官邸を見ながら、ヨディ達は、イルドリアの目抜き通りにある食堂街の、『食事処ひよこ』にて、遅めの昼食を採っていた。

いや、夕食と言っても言い。

この道は、武道大会会場へと続く目抜き通りであるので、左右に立ち並んでいる食堂街は勿論、安いジャンキーな食べ物を売っている屋台類等も、今が稼ぎ時だった。

ヨディ達がいる食堂も、中ば戦場の様になっていて、給仕係があつちへ行ったり、こつちに来たりと大変だった。

ヨディが、余りにもものんびりとして構えているので、エファールとアルミナは、じりじりとし、周りの雰囲気とあいまって、落ち着きがなくなってきた。

「ヨディ、アシュマと合流しなくて、大丈夫なの？」

エファールが、諸々案じて聞いていた。

「合流できなかった物は、しょうがない。僕等だけで、行くしかないよ」

ヨディは断じた。

「心配じゃないの？」

エファールが、更に突っかかる。

「連絡を取り様にも、連絡がつかないんだ。どうしようもないよ」

ヨディは言ってみた。

「わかったわ。ヨディって冷たいのね」

エファールは、すっかり機嫌を斜めにした。

「なんで、そうなるのよ？」

ヨディが逆に聞きたくなった。

しかし、解らんでもないが……とも思った。

「お待ちどうさま」

給仕係が、ヨディが注文した食事を、置いていった。
パスタだ。

「わお」

「じゃあ、いいわ。それじゃあヨディ、いつ行くの？」

エファールはヨディに訊いた。

「あつ、うん……」

ヨディは来た食べ物に集中して、こちらの話等、上の空だ。

「ねえ！ ヨディ！」

エファールが、強く言った。

ヨディが仕方なく、といった感じで、

「ん？ ああ……もぐもぐ……今夜ね」

そう応えていた。

「んで、警備網どうするんだよ？ むここのセキュリティは、万全なんだろ？ どうするんだよ？」

アルミナもエファールにつられて、焦れてヨディに訊いた。

「そんなモン、こいつでピピピ。ハイお仕舞い、ですよ」

例の小型の電腦のキーを、叩く真似をして見せた。

「そんな単純なモンじゃ無いだろう？ ヨディ」

ネルゼイまでもが話に加わった。

「大丈夫。セキュリティが完備って言ったって、それは対人での話。網上ではそっちの警備は、まるでザル。実際、後一つ、エンターキーを叩けば、セキュリティはダウンするんですよ。ただ、ダウンしたら修復に入るでしょうから、それまでの時間しか活動できません。だからこうして、ここでぎりぎりの時間まで、待っている訳です」

ヨディは、順序だてて説明した。

「なんだ、さすがヨディ！ 仕事は、きっちりしているじゃねえか！」

アルミナはヨディの背中を、バンバンと叩いた。

「あ、お姉ちゃん、これ、追加ね！ こうなったら、アタシも食うぞ！ 腹空いていたんだ！」

アルミナはメニューを片手に、食事を注文していた。
暫くして、

「はい、
「ぎゅんぐん」

給仕係のお姉さんが、食事を置いていった。

「わお」
♪

アルミナも食事に参加した。

「気楽な物ね。アシュマと合流出来ていないのに」

エフ
アールは言った。

「よく食うな」

ネルゼイも呆れた。^{あき}

「これで、オルバニアンとアシュマがいたら、すごいなのよ?」

エファールが首をすくめて言った。

「お客様は観光ですか？
やはり国王杯を見に？」

給仕係の女の子が尋ねてきた。

「えっ？ あ、ええ。そうですよ」

ヨディが、受け答えをした。

「そうですね、世界三大武道大会の内の一つ、イルドリア・ノリトレア王国国王杯武道大会を見ませんかとねえ？でも知ってますう？あくまで噂ですけれど、あの、国王暗殺目論むビツシュ・ノマンの仲間に、アシユマ・アトーって言うのがいて、武道大会開催中に国王暗殺をするって言う噂が……」

「えっ!？」

ヨディが軽く驚いた後、アルミナが

「そりゃ嘘だ。嘘に決まってる！ アシユマに限ってそんな事ある

訳

アルミナが言いかけるのを、ヨディが、

「だ―――――っ
「！！」

と、大声を出して、誤魔化した。

一瞬店の中がざわついて、皆こちら側を向いた。

「どうしたんだ？ お前？」

ネルゼイが、ヨデイを心配がった。

「い、いやあ……そのお……ゴ、ゴキブリがそこらへんにイ〜、いない……なあ……」

ヨデイが誤魔化したつもりだったが、

「何を言っているんだ？ お前？ 大丈夫か？」

ネルゼイに、軽くあしらわれてしまった。

「で、でも武道大会は、あ、あるみたいですから……ど、どーぞこゆつくリイ……」

給仕係りの女の子は、その場を逃げるようにして、向こうへ行つてしまった。

「あそこのお客さんチョツとへんよ。気をつけた方が良いわよ」
ひそひそ噂された。

「アシュマがそんな事に……どうしましょう……」
エファールが案じた。

「まあ、何に巻き込まれようと、アシュマ君の事だ。大丈夫でしょ」
ヨデイが断定した。

「そんな……」

エファールは何かを言いかけたが、

「……そうね」
話を閉じてしまった。

いま、アーチエルは、虜の身となっていた。

本人は眠っているの、そうだとはい、気付いていない。

いま、アーチエルが眠っているのは、とある物のコクピットに類似した物の中だ。

それは、バヴェルの物だった。

なぜ、ナラスティがバヴェルを所持しているのか？

なぜ、アーチエルがコアユニットと言う事を知っているのか？

二番目の答えは、ナラスティが放った、諜報員がもたらした情報からだった。

ナラスティはガルマインが来ても、アーチエルとアシユマを渡すつもり等、毛筋の先程もなかった。

それどころか、アーチエルを自分の野望の道具として使う事。それしか考えていなかった。

そういう意味では、ナラスティはガルマインと似ていた。では一番目の答えは？

それは追々分かるだろう。

「どうか？ 様子は」

ナラスティは科学者に訊いてみた。

「脳波パターンの採取と多少血液を採取しました」

「そこまでは、ノリトレアの科学者もしているな」

左程驚く事も無いなど、ナラスティは思った。

「ここからが違います。……エナジア、起動！」

科学者が誇らしげに言った。

「起動させました」

助手が言った。

「エナジア、脳波パターンに同調！」

「エナジア、脳波パターンに同調！」

「エナジア、同調率五……十……十五……統合同調率は、どうか？」

「上がっております。五……七……十二……」

「分かった。いったん、灯を落とそう」

「分かりました」

順調に行っているかに見えた実験は、突然中断された。

何故か？

「何故、灯を落とす必要がある？ 何故このまま続けん？」

ナラスティが質問した。

当然の質問である。

「実験は続けます。今度はイメージスキャナーを使つての、実験となります」

科学者は説明を続けた。

「イメージスキャナー？」

科学者は聞きなれない言葉を使ってきた。

「はい。イメージスキャナーとは、自分の意のままにこのバヴェルを動かす装置に御座います。アーチエル嬢が眠っているので、イメージスキャナーを使つての実験は出来ません。ですので、先程サンプリングした脳波パターンと、DNA情報を使い、ナラステイ様に実験に参加して頂く事になります」

科学者はバヴェルと言った。

ここにバヴェルがあるのか？

「なに、私がか？」

ナラステイは多少驚いた。

まさか自分かバヴェルを動かす事になるうとは。
ある種の感慨がある。

「はい」

「ではこの娘は」

まるでアーチエルを、子供の玩具おもちゃの様に言う。

「用済みと言う事になります。ですが、万が一の事も考えて、バツクアップ用に取っておく必要があるかと」

子供に玩具は与えられた。

後は、どう遊ぶか、それだけが楽しみだった。

「そうか、バツクアップか。私も棄てるには惜しいと思っていた所なのだ。それ程この娘は美しい。いずれ私の物にして見せよう。時間をかけて、ゆっくりとな……くくく。……そうと決まれば話は早い。この娘を、娘の寝所に連れ申せ」

「はっ」

部下の医師が返事をした。

アーチエルは、ストレッチャーで運ばれる際に少し覚醒し、

(いけない……あれは……)

思った所で、また意識を失った。

薬で眠らされているのだ。

起きた時には覚えてないだろう。

夜、首相官邸に近付く影が三つ。

フィナとハルナとアシユマだ。

アシユマは、首相官邸に忍び込む為に、鬼虎を返してもらった。

当然の事だろう。

ナラステイも、それは断われなかった。

「アーチエル様を置いて来て、大丈夫なんですか？」
フィナが問うた。

いつものアシユマなら一も二も無く、アーチエルに居残りを命じてお仕舞いなのだが、今日は違った。

残した事に、強い後悔の念があった。

その根拠はあのナラステイだ。

あの男は危険だと、アーチエルの勘がそう告げていたではないか。
アシユマも、危険だと感知していながら、残してきた。

それに対する後悔の念が、湧き上がってきたからだ。

『今日は、アーチエルを置いて行く』

アシユマはフィナにそう応えていた。

が、

（アーチエルは、今頃どうしているだろう？）

そんな事柄が頭の中を渦巻いていた。

そしてやはり後悔する。

ここに、連れて来るべきだったと。

一行は、首相官邸の外壁のある地点にやって来た。

「……………さん」

「……………ユマさん！」

「アシユマさん！」

誰かが自分を呼ぶ声が聞こえる。

「あ？」

アシユマは、頓狂にも、そう応えていた。

「『あ』じゃありませんよ。しっかりして下さい。そんな事では命を落としますよ？」

フィナに窘められた。

尤もな話である。

「そうだな。済まん」

「ホント、しっかりして下さいよ？」

一拍置いて、

「……さて、ここね？」

フィナはそう言つて、小型の電腦を取り出し、首相官邸の外にあるケープルの差込口に電腦をつなぎ、首相官邸のセキュリティ関連の項目を選び出した。

「ん？」

「どうした？ フィナ」

「もう既に誰か『枝』をつけている様です」

フィナは、自分も『枝』をつけようかどうか、迷った。

「ヨディだな。では、もうセキュリティは、解除されているのか？」

アシユマは訊いた。

「いえ、まだよ」

フィナが応える。

「よし、じゃあ、それを待とう」

アシユマが、そう決めた。

フィナが『枝』をつけるのを止めた。

「じゃあ、私は予定通り、陽動に回るわ」

ハルナは、壁の向こう側へと、消えていった。

夜更け。

ヨディ達一行は、首相官邸の近くまでやって来た。

そして電腦を取り出し、モニタを開いた。

「ありゃ？ 誰か『枝』を付けに来たな？」

ヨディは頭を捻った。

「『誰か』って誰？」

アルミナが訊いた。

「誰って、アシユマ君達でしょ。アシユマ君はこう言つの苦手だから、フィナさんも一緒なんじゃないかな？」

「おお〜！ アシユマ、生きてたかあ。よかったあ」
アルミナは喜色ばんだ。

「じゃあ、早速いつてみようじゃねえか」

「そうですね。じゃあ、ポチツとな」

すると、官邸中の電灯が落ち、セキュリティの全てが、機能を麻痺させた。

「よし、今だ」

と、各々が行動を開始した。

「何で俺までが、泥棒の真似みたいな事、しなきゃいけないんだ」
ネルゼイがぼやいた。

「旦那、そりゃここまで来ておいて、言いつこなしでしょ！」

ヨディがそれを咎めた。

「ん、まあ、そりゃそうなんだがよ……やっぱり公僕としては……」
「政府の不正を暴くのも、公僕としての役目でしょ？」

ヨディは変な説得の仕方をした。

それを訊いてネルゼイは、

「ん、まあ、な」

等と納得したのかしなかったのか、ヨディに言わせると、
「歯切れ悪いねえ」

との事だった。

そんな二人のやり取りを見ていて、

「真面目にやってよ、二人とも」

と、エファールに、二人は叱られた

ノナと、オルバニアンは未だ、軟禁状態にあった。

ノナは、発泡酒の缶のプルトップを引いて、酒を飲み始めた。

「あゝあ、飲み始めちまいやがった。お前、未成年じゃないのか？」

「わたしは、もう十八よ。お酒を飲んでもいい年齢なの」

「まあ、それならそれで、構わないけどよ」

そう言いながら、

（ホントかよ？）

等と、オルバニアンは思った。

「じゃあ、オルバニアン、向こうからお酒取ってきて」

「はい、はい」

牢獄内に、サケがあるとは、贅沢な限りである。

そして、今や、オルバニアンは、ノナの言いなりだった。

しかしまあ、悪い気はしなかったが……。

オルバニアンは、向うの部屋へと姿を隠した。

外から

ピ・ピ・ピ……。

と、言う音がして、

プシュッ！

と、ドアが開いた。

侵入者は、内部に入り、標的を搜した。

ノナは、背後に、人の気配を感じた。

「オルバニアン？ 持ってきてくれた？」

ノナは、向こうを向いたまま、話しかけてきた。

「……………」

「？ オルバニアン？」

不審に思ったノナは、振り向いた瞬間、刃が振り下ろされてきた。

「！」

ノナは、前のめりに転がり、何とか難を逃れた。
刃は、ソファを斬って、止まった

暗殺者は剣を引き抜き、再び剣を構えた。

ノナは逃げようと、何とか立ち上がった。

「！」

暗殺者は、剣を横に薙いだ。

ノナは尻餅をつき、頭上を剣が流れた。

暗殺者は、三度、仕込み杖の剣を引き寄せ、構えた。

「あ、貴方はナラスティ秘書官の……ハルナ・ナリス……さん？」

ハルナ・ナリスは無言で、じりじりと、ノナへと近付いていった。

「私を……どうしようと言うの？」

ノナは恐怖のあまり、動く事が出来ずにいた。

ハルナはじつくり、ノナに近付いて行き……、

「決っているじゃない。あなたに死んで貰うのよ」

ノナに話した。

「ナ……ナラスティが黙っていないわよ」

「その彼が命じたのよ」

ハルナは、爬虫類を思わせる表情の硬さのままで、言った。

「……嘘……」

ノナは信じられなかった。

ナラスティが、自分を『殺せ』と言うなんて。

ノナが、今出せる言葉は、『嘘』しかなかった。

そして、死が身近に思えた。

思えてしまった。

ハルナは剣を未だ構えている。

その時オルバニアンがやって来て、

「つたく、人使いの荒い……」

と、両手に酒瓶を持ち、愚痴を言いながら入ってきた。

が、こちらの部屋に入ってきて、異変に直ぐ気が付いた。

オルバニアンは、一瞬で状況が分かった。

「！！ なっ……ノナっ！！」

オルバニアンは、叫んだ。

「！ オルバニアン！」

ノナも、オルバニアンの名を、呼んでいた。

「チッ」

ハルナは舌打ちをして、剣を上から振り下ろして来た。

「このっ！」

オルバニアンは両手に持っていたピンを、時間差でハルナ目掛けで投げた。

「おのれっ！！」

ハルナがピンを、剣を遣って、斬り割っていた。

その際にガラスの破片が、ハルナの顔を傷つけた。

オルバニアンはその間に、床に置いてあった丈高の電気スタンドを引っ掴み、ハルナに向けて横に薙いでいた。

ぶん！

と、音がして、ハルナを退かせていた。

「よくも私の顔に、傷を付けてくれたわね？ この始末はいつか必ず！」

セキュリティの一部が回復したのか、

ウウウウウウ！

と、警報がなった。

「チッ！」

ハルナは、再び舌打ちをして、逃げていった。

「待て……！！」

オルバニアンが行きかけるのを、

「オルバニアン！！」

ノナが叫んだ。

「えっ？」

オルバニアンは軽く叫んで、踏み止まった。

「私を一人にしないで。……おねがい」

ノナはオルバニアンに、残る事を懇願した。

「分かったよ。もう君を一人にしないよ」

オルバニアンはノナを抱きしめた。

震えるノナを、静める様に。

ヨデイがオルバニアンを助けに来た時、逃げるハルナの後姿を見た。

こんな牢獄で、女とは妙な……。

ヨデイに、嫌な予感が走る。

「何だ？ アイツ……！？ まさか」

反射的に、ヨデイは叫んでいた。

同じ事を考えていたのだろう。

アルミナが、

「とにかく、急ごう！ やばそうだ！！」

そう叫んだ。

オルバニアンの囚われている部屋は、直ぐに見つかった。

「オルバニアン！！」

ヨデイは、部屋の中へ駆け込んだ。

「ヨデイ！？」

驚いた様に、オルバニアンが叫ぶ。

「どうしてこんな所へ！？」

当然の疑問をぶつけてみる。

ヨデイ達が、こんな所にいる筈無いのに、と。

そんな疑問に、答える余裕は無い。

時間が惜しいと言う風に、

「急げ！ オルバニアン！！」

ヨデイが、そう言っていた。

オルバニアンは、それだけ逼迫しているのだと理解し、

「行こう、ノナ」

ノナを促した。

ノナも、脱獄のラストチャンスと、受け取ったらしく、

「ええ」

積極的に、脱獄の意欲を見せた。

そして、皆、部屋から出て行った。

「オルバニアン、君の武器です」

ヨデイがオルバニアンに刀と、ライフルと、弾を渡した。

「こいつはありがてえ。よく持って来れたな」

オルバニアンが感心した。

「まあ、何とか見つけ出しましたよ」

ヨデイが軽く言った。

「国際警察機構のネルゼイです。ノナ・イルマさんですか？ 後程

Dトランス……麻薬の事でお話があります」

ネルゼイが、ノナに質問をしようとした。

それに対し、オルバニアンが

「麻薬？ 何のこったあ、そりゃあ。後にしてくれ、後に」

軽くあしらった。

「ぬ！ とぼけるつもりか！」

ネルゼイが憤慨した。

ヨデイ達は、脱出口を捜して、通路を走った。

通路には、いたる所で保安要員達が、無残にも斬殺死体となって

転がっていた。

「しっかし、こりゃまた、どーした事だ？ 皆、死んでらあ」

ヨデイが驚いていた。

「刺客が来たんだ。とにかく急ごう」

そのまま一行は、エレベーターに乗り込んだ。

「これからどうするんだ？」

ネルゼイが、誰と言う事も無く訊いた。

「この官邸はもう、包囲されていると見た方が良いでしょうね」

ヨデイが答えた。

「じゃあ、脱出出来ねえのかよ！」

オルバニアンが叫んだ。

「まあ、聞いて下さい。地下に、ここいら全体が繋がっている、で
つかい施設があります。そこを伝って、別の施設から脱出します」

ヨデイが説明した。

「何だよ、その施設ってのは」

オルバニアンが質問する。

「何かの工場みたいですよ」

ヨデイが言った。

「そろそろじゃない？」

アルミナが注意を促した。

「よし！」

オルバニアンが、気合をいれて、ライフルを構えた。

チン！

と、言って目標の階層に来た。

皆が構えて、

プシューッ！

と、ドアが開いた。

一拍置いて、

ばっつ！

と、エレベーター前に展開した。

ゴン、ゴン、ゴン。

と、音がして、工場が稼動していた。

「やっぱ、誰もいねーな」

オルバニアンが言った。

「でも、直ぐ追手が、来るわ。急ぎましょう？」

エファールが、注意を喚起した。

その時、

ビシッ！

と、言って弾が壁に当り、破片が飛び散った。

「いつてえ！」

オルバニアンが怒った。

「誰よ！ 誰もいないなんていったの！」

アルミナが怒った。

と、敵はこちらにやって来た。

首相官邸の兵士だ。

「あつらー。一杯いらあ。よつぽ大切な工場なのね」

ヨディが、妙な関心を示していた。

「見て、あれ！」

エファールが注意を促した。

「ベルトコンベアーか？ ありやあ、どこまで？」

ネルゼイが疑問に思った。

「え……と、中で迷路ですね。これは」

ヨディが言った。

「構うこたあねエ！ あの中で、まいちまえ！」

オルバニアンが強気に出た。

もつと先に走って行くと、そこに配備された兵士に出くわした。

「何だ貴様ら！？」

すかさず、オルバニアンがライフルを発砲した。

対魔導機兵用のライフル弾の、威力は大きい。

敵兵士は、悲鳴を上げる間も無く、四散して飛び散った。

「きやあ！」

悲鳴を上げたのは、ノナだった。

「どうした！？」

オルバニアンが、駆け寄った。

「ひ、人があんなにも、バラバラになって……」

人の死ぬ所を初めて見て、半ば失神気味になりながら言った。

「なんだ、その事か。俺はてつきり、ノナの身に何かあったのかと心配したぜ」

「メンタル面でも心配してよ！ あんな物見せられて、いい気はし

ないわ!!」

ノナは、怒りを爆発させた。

オルバニアンは、気を使ったつもりなのだが、ノナにとっては、無神経極まりないといった反応を見せていた。

「う……すまねえ」

「よお、旦那、すっかり尻に敷かれてんなあ」

アルミナがからかった。

「いいだろ？ 別に」

オルバニアンは、反論した。

「皆さん！ ベルトコンベアに、飛び乗りますよ」

ヨデイが言った。

皆、フロアから、ベルトコンベアへと飛び降りた。

オルバニアンとノナは、一番最後に飛び降りた。

「この粉は何かしら？」

ベルトコンベアに飛び降りた、エファールは言った。

それは、袋詰めになされた白い粉だった。

「なに？ 粉？」

興味を示したのは、ネルゼイだった。

「これはもしかして……」

暗に麻薬ではないかと臭わせた。

ネルゼイは粉の袋を破って、少し粉を舐めてみた。

全員が、

「ぐくり」

と、喉を鳴らした。

「麻薬……ドラクスだ」

ネルゼイが言った。

「じゃ、じゃあ麻薬の黒幕は、アゾビング!？」

アルミナが疑問を呈した。

「イルドラの大物じゃ、なかったの？」

エファールも続いた。

「え？ 何の話だよ、そりゃあ!？」

逆にオルバニアンが、訊いた。

「何の話だと？ お前、その女は麻薬の、密売人なんだぞ！」

ネルゼイがそう断定をした。

「失礼ね！ 私、そんな事知らないわ！」

ノナが反論した。

「そうとも、何を証拠に！」

オルバニアンがそれに続いた。

「俺の殺された親友のメモに、お前の名前があるんだよ！ 『要注意人物、殺される可能性有り』 ってな！ 密売人以外に、何が考えられるって言うんだよ!？」

ネルゼイが言った。

「確かに殺されそうになったわよ、何度も！ でも、それは別の理由で……」

そこまで言ってノナは、

「はっ」

と、なった。

「別な理由？ でまかせをいうな！」

ネルゼイは、ノナに食いついた。

「……………」

ノナは沈黙を守った。

「あー、そこ、次の角で飛び移りますよ！」

ヨデイが、声を大きくした。

「いきますよ!!」

皆ヨデイの号令で、ベルトコンベアーを、飛び移って行った。

アシユマ達は、廃棄ダクトを伝って、地下のビッシュ・ノマンが囚われている階層までやって来た。

警報は未だ鳴り続けている。

ビツシュ・ノマンの牢の入り口にて、警備兵同士がなにやら喋っていた。

「大丈夫だ。俺達にや、関係ない。例の工場だとさ」

「そうか、じゃあ、関係ないな」

警備兵達より、少し離れた所に、アシュマ達は降り立った。

「ここで、少し待て」

アシュマはフィナに言つて、気配を殺し始めた。

アシュマの身体は徐々に透明度を増し、ついにはその体全てが消え去ってしまった。

フィナが何かを言いかけたが、それを堪えた。

通路の角から見てみると、敵の警備兵が次々と倒されていった。警備兵を倒しきった所で、ふっと姿を現した。

「今のが秘剣、『朧霞』ですね？」

フィナが言つた。

「どうしてそれを？」

アシュマが少し警戒して、訊くと、

「アーチエルさんから聞きました。いろいろ。いゝですねえ。恋する乙女って感じで」

そんな答えが返ってきた。

アシュマは、多少拍子抜けし、

「いつも、そんな事ばかり考えて、修行してるのか？」
と、フィナに訊いた。

「乙女は皆そうですよ」

さも当然であるかの如く、答えが返ってきた。

「呆れた」

「それって、酷いですう」

すると、フィナは、すっかりむくれてしまった。

当世の女子と言う物は、皆こうなのかと思うと、アシュマは頭が痛くなつて来た。

それは取敢えず置いておいて、

「フィナ、フィナ！ 頼む」

アシユマは、フィナに仕事を頼んだ。

「うゝゝゝ。分かりました」

フィナは例の小型電脳でもって、ビツシュの囚われている牢獄のカギの、開錠作業に取り掛かった。

開錠作業は直ぐに済み、ドアが開いた。

中は二重構造になっていて、扉がもう一つ有り、その前に警備兵が居た。

「？ 交代なら……」

頓狂な事を言いかける警備兵に対して、アシユマは素早く寄り、発気の術による掌底で黙らせてしまった。

すぐさま、フィナが開錠作業に入った。

それも直ぐに済み、ドアが、

ガコン！

と、大きな音を立てて開いていった。

「う……」

ノマンが唸った。

「ビツシュ・ノマン！」

すぐさまアシユマが駆け寄り、声をかけた。

「う……」

まだビツシュは、意識が混濁している様子だったが、徐々に意識を取り戻していった。

「ビツシュ！」

アシユマが再度呼びかけた。

「ア、アシユマ？ …… アシユマか？ 本当に？ よく来てくれた

…… なんて言って……」

ビツシュは、アシユマに礼を言いかけたが……、

「無駄口はいい。脱出が先だ！」

アシユマに一蹴されてしまった。

「あ、ああ、そうだな…… その無愛想ぶりは昔と変わらん」

ビツシュがそう言った。

「果たして、脱出できるかな？」

後から声が掛かった。

「！」

そこに居る全員が驚いた。

なんと声の主は、影武者でもなんでもなく、アゾビング本人だった。

「愚図どもめ。餌をばら撒けば、直ぐに飛びつきおって。ワシを裏切って、ナラスティの所へ行こうとしたか？」

アゾビングは、自分達に楯突く者達へ、揶揄して言った。

これにビツシュは激昂して、

「当たり前だ！ 自分の野望の為に、国王暗殺なんか、死んでもお断りだ！」

と、応えていた。

「馬鹿な奴。成功すれば、ナラスティは失脚、後はワシの天下だ。そうなればお前にもそれなりの地位と、報酬を与えてやったのに。期待しておったが、死んでも厭とはな。ならば、望みどおりにしてやるわ！」

アゾビングが頭を少し斜めに、傾^{かし}ぎながら言った。

「……正気じゃないわ」

フィナが言った。

その時アシュマは、懷に手を忍ばせ、アゾビング目掛けて、棒手裏剣を飛ばした。

「ぬうっ！」

アゾビングは驚いた。

すかさず警備の者が前に出て、自らを盾にしてアゾビングを守った。

自分を殺そうとしたアシュマに、怒りを表し、

「おのれ、下郎め！ 機動外骨格を前面に押しだせい！」

部下に命を下した。

すると、身長二メートル強の、人型をした、外骨格状の者が出てきた。

多分あの中に人が居るのだろう。

「よいな！ 生かして帰すな！ 手に余るようなら、このフロアごと爆破しても構わん！」

アゾビングが念を押して、上の階層へ行ってしまった。

「皆、なるべく俺の真後ろに、ついてくれ」

そう言っている矢先から、機動外骨格はミサイルランチャーを取り出し、アシユマ達目掛けてミサイルを撃って来た。

ミサイルは見事命中し、爆炎がアシユマ達を覆った。

機動外骨格のパイロットは、

「やった！」

と、思った。

が、次の瞬間、爆炎の中からアシユマが飛び出してきて、鬼虎で機動外骨格の胸の辺りを存分に薙いだ。

「フィナ！ 今の内に、適切な脱出路を捜してくれ！」

そうアシユマが叫んだ。

「分かったわ」

フィナが請け負った。

アシユマは、次の機動外骨格に向かって、跳んだ。

跳んで、外骨格の脳天から腹までを、斬り割っていた。

斧を持った外骨格が、横に薙いだ攻撃をしてきた。

それを掻い潜り、次にアシユマは、外骨格の腰から胸辺りまでを、斬り割っていた。

「アシユマ、腕を上げたな」

ビツシュが言った。

「俺じゃない。『鬼虎』が凄いだ」

アシユマは、不思議な事を言った。

そう言っている間にアシユマは、次の外骨格の中の人が居るであろう部分を、袈裟に斬っていた。

「アシユマ！ 分かったわ！」

フィナが叫んだ。

「どこだ？」

アシユマは、次の機動外骨格を相手にしながら、訊いた。

「この階層に、ライフラインを通す為の通路があるわ。そこを使えば、外に出れるわ！」

フィナは説明をした。

「わかった」

アシユマはそこに行く為、機動外骨格を次々と斬って棄てていた。アシユマが殿で、フィナ達と一緒にライフラインしんがりを通す、通路の入り口へとたどり着いた。

アシユマ達が、そこにたどり着いたのと同時に、大量の爆薬が運び込まれた。

そして、味方そっちのけで、すぐさま信管のスイッチが入れられた。

大きな爆発が、いたる所で起こった。

敵も爆発に巻き込まれ、体が爆散した。

この階層の天井である岩盤が剥がれ落ち、炎と衝撃波と岩盤がアシユマ達を襲った。

「きゃああっ！」

フィナは、落ちて来る岩盤に悲鳴を上げた。

ネルゼイは、このままベルトコンベアにのせられて、どこまで行くのだろうと不安になった。

まさか、このまま乗り続けはしないだろうとは思ったが、不安な事には変わりがなかった。

ネルゼイは癪だったが、不安には勝てずに、

「おい、ヨディこのままどこへ行くんだ？」

と、ヨディに訊いていた。

「もう直ぐ出口の筈です」

ヨデイが答えた。

ネルゼイは目を細めて見た。

「あれか？」

このベルトコンベアの行き先が明るく光っていた。

「あれは、違います」

ヨデイは言った。

ドドドッ！

と、言う音と共に、銃弾が着弾していた。

「きゃあっ！」

エファールが、悲鳴を上げる。

「自動銃座か！」

オルバニアンが言った。

「ンなる！」

オルバニアンが、ライフルで弾を発射すると、

ドカッ！！

と、言う音と共に、自動砲座は爆発した。

すると、他の自動砲座も起動した。

「ち！ 面倒な！」

オルバニアンは舌打ちをした。

きりが無いと思ったからである。

ヨデイが、全員に聞こえる様に、

「よし、ここから廃棄物用のコンベアへ、乗り移ります」

ヨデイが言った。

「ええーっ、またあ？」

そう言ったのはノナで、以前にもオルバニアンと廃棄物用のベルトコンベアで、逃亡してえらい目にあった事がある。

その経験からか、ノナがベルトコンベアに飛び乗るのを、嫌がった。

「つべこべ言わない！」

当の本人、オルバニアンが言った。

「でも……」

ノナがそれを躊躇^{ためら}う。

「オルバニアン！ 早く」

ヨデイが飛び移るのを促した。

「分かってらあっ」

そう言つて辺りを一斉射し、自動砲座を破壊した。

ネルゼイも跳び移った。

アルミナ、エファールもそれぞれ跳び移った。

あと、跳び移っていないのは、オルバニアンとノナだけだった。

「ノナ、跳ぶぞ！」

オルバニアンは、ノナに言う。

「え？ でも……」

まだノナは一躊躇^{ためら}っていた。

業を煮やしたオルバニアンは、

「行くぞー！！」

ノナを抱える様にして、コンベアに跳び移った。

下のコンベアに転がる様にして、オルバニアンとノナは跳び移つて来た。

「もう大丈夫です。後はこれに乗っていけば、外に出られます。もう直ぐです」

ヨデイがそう言った。

「待ち伏せされて、ジ・エンドってのは、なしだぞ？」

ネルゼイは不安な事を言った。

「これによると、それはなさそうです」

ヨデイは例の小型電腦を、取り出した。

「で、どこに出るんだ？ このコンベアは？」

アルミナが行き先を聞いた。

流石に、どこに出るか、気になりだしたらしい。

「汚物廃棄処理施設です」

ヨデイが事こともなげに言った。

他人事の様にと、形容してもいい。

「ええ〜っ！？ 厭だよ、そんなところ！」

アルミナが嫌がってみせた。

「あたしも、賛成しかねるわ」

エファールも、同意見の様だ。

「私も……」

おずおずと、ノナも同意見である事を、遠慮がちに示した。

「はい、はい。分かりました。アベニに来てもらいましょう。銀龍で」

ヨデイはあっさり折れた。

第四節 イルドリア武道大会

白銀に光る船が、イルドラに停泊していた。

イルドリリア武道大会直前と言う事で、イルドラには大小数多くの船舶が、寄港していた。

中でも、その白銀に輝く船は、異彩を放っていた。

大きさは、停泊している船の中では、勿論最大だった。

白銀に輝く船体は、ミスリルの輝き。

それは、ノリトレアの空中戦艦、ハーティアーだった。

ハーティアーは、ノリトレア艦隊の総旗艦も果たす程の、重要な艦艇である。

ハーティアーが来ているという事は、関白兼統合幕僚長、ガルマインも来ているという事だ。

そして、ノリトレア王国国王、ルーランも来ていた。

さらに、護衛の艦が、やはり数隻、イルドラに停泊していた。

その姿は正に、壮観の一言に尽きた。

ガルマインはまずイルドラ市長、そして次期イルドリリア領政府首相としてのナラスティと、会談を持った。

ここで、ガルマインは、ナラスティと今までどおりの関係が続けて行く事を、約束した。

後は軽い歓談のあと、ガルマインをホテルへと送り出した。

ここで、ナラスティは、終ぞ自分の手元にアーチエルがいる事等、これっぽっちも話さなかった。

そして、ナラスティは、ルーラン国王とも歓談したが、これといった事もなく会談を終えた。

「何度申し上げれば、解って頂けるのですか!？」
ドン!

と、机を叩きながら、ネルゼイは数人いる国際警察機構の幹部達と、議論を交わしていた。

「確かに、首相官邸の地下に、麻薬の精製工場があったんです! それに麻薬の密売ルートも、あの娘に必ず吐かせてみせます! 特殊降下部隊の出動許可を下さい! 早くしないと、証拠を隠蔽されてしまいます!!」

重ねてネルゼイは、一刻も早い出動と証拠の押収を訴えた。

「しかしねえ、ネルゼイ君。その、肝心の証拠がなきゃ、幾ら国際警察機構といえども、一領国に踏み込む訳には、いかんのだよ」

幹部の一人が、慎重論を出してきた。

確かに証拠が無ければ、警察機構と言えども、動く訳には行かなかった。

「そんな、悠長な事を言ってる場合ですか!!」

ネルゼイは、焦りを感じていた。

このままでは、ハリイの掴んだ事実のみならず、大事な証人であるノナの身柄の拘束、そして、イルドリアで見た大量の麻薬……これまでの全てが無駄になる。

「いい加減にしたまえ、ネルゼイ君!! 彼女は釈放する!! 特殊部隊の出撃も認めん!!」

我が耳を疑った。

全ての事は、無駄だったのか?

ハリイの仇も、討てないのか?

「んな……、何で?」

「証拠不十分だっ!!」

そして、警察官として、もつと絶望的な言葉が、ネルゼイを待っていた。

「君も単独行動をとった責任を取ってもらっ!! 当分の間は謹慎処分だっ!! 追って沙汰をするっ!! 以上だっ!!」

「この……」

ネルゼイはドアノブを持ち……、

「クソツたれ共が!!」

と、思い切りドアを閉めた。

もう自暴自棄となったネルゼイに、怖い物は無かった。

国際警察機構の正面玄関から出て来たネルゼイは、ヨデイとオルバニアンが居る所までやって来た。

「どんな案配？」

ヨデイが訊いた。

ネルゼイは、首を横に振り、

「最悪だ！」

と、吐き出した。

「彼女は、出してくれるんだろうなあ？」

オルバニアンが一番気にしてる、ノナの事を訊いた。

彼女は今、参考人として、取調べを受けていた。

が、何も出てこないの、近く釈放されそうだった。

「……ああ」

ネルゼイは、渋々その事を肯定した。

「で、降下部隊とやらは？」

ヨデイがまた訊いた。

「だめだ。話にならん!!」

ネルゼイが嘆いた。

「なあ、俺、も一回、イルドラに行きてえんだけど」

オルバニアンが言った。

「馬鹿野郎。俺は謹慎中の身だ！」

ネルゼイが反論した。

「おい、国際警察が、ルーラン国王暗殺と聞いて、そのままにして置くのですか？」

ヨデイが説得し始めた。

「僕はね、国王暗殺と麻薬……あながち関係無いとは、言えないと

思っんですよ」

とまで言い切った。

「あ？ ……じゃあ、ありゃあ、噂じゃ無いつてのか？」

ネルゼイは、信じられんと言った表情で訊いた。

「何を言っているんですか？ まず、そう言う風評が立つたら捜査するのが、あなた方の仕事じゃないですか！ それをすっかり見落として。アシユマ君が行方不明なもの、きっと何かに、巻き込まれているんですよ。でなきゃあ……」

ヨデイが捲くし立てる。

「な、なな、なんだそりゃあ……じゃ、じゃあ暗殺はこれから？」

「そうですね！ しかもそのチャンスは武道大会の中、公衆の面前で！ 逆に言えば国王が公衆の面前に立つのは、武道大会だけ！」

ヨデイは断定した。

「そうだな麻薬のルートも、あの工場だけで、解明されてねーし…

…」

ネルゼイは、まだまだ解明されてない謎が、あそこにはあると痛感はしていた。

「それには国王暗殺を防ぐ為、武道大会に出場します。あの厳しい警戒の中で、普通暗殺等出来ません。そのチャンスは、前にも後にも一回だけ。そこを抑えて、捕えるしかありません！ それを元にアゾビングを捕まえれば、麻薬の流通ルートも解明できるでしょう」

ヨデイは、問題解明のルートを、示唆した。

「な、成程」

ネルゼイが得心した表情をした。

「そうになると、喜んで下さいオルバニアン、彼女の無実も証明できるでしょう」

ヨデイは、オルバニアンにも、光明への道筋を示した。

「そうか！ ……でもその暗殺のチャンスって？」

オルバニアンは、肝心要の事を聞いた。

「それくらいは、自分で考えて下さい」

先生のヒントは、ここまでだった。

「それじゃあ、俺の謹慎は」

ネルゼイが訊いた。

「無視して下さい」

ヨデイの受け答えは、あっさりした物だった。

「よし、そうと決まりゃあ……じゃあお前らは、イルドリアへ降りる。俺はイルドラへ行く」

「何でまたイルドリアでなくて、イルドラなの？」

ヨデイが訊いた。

「世界最大の貿易港だからな。イルドラは。おそらくDトランスは、イルドラを中継基地にして、各地にばら撒くんだろ。俺はそっちの方から攻める」

ネルゼイは、切り口を変えるつもりだった。

「分かりました。じゃあ僕らはイルドリアへ……」

ヨデイが言いかけるのを、

「いんや俺は……」

と、オルバニアンが遮った。

「うん？」

「俺は、おっちゃんの手伝いをしようと思う。彼女の……ノナの無実を、晴らす為にも」

オルバニアンは、イルドラへ行く理由を述べた。

「お前も健気だねー」

ネルゼイが、頭を縦にうんうんと振りながら、頷いていた。

「分かりました。でも、武道大会が始まる前までには、帰ってきて下さい」

ヨデイは意味深な事を言う。

「？」

「武道大会は全員参加ですから」

ヨデイはそう言った。

「で、私達も参加するのね？」

エフアールは尋ねた。

「ええ、こちら側の手駒が多ければ多い程、敵の目論見を崩す確率が、高くなる訳ですから」

等とヨデイは解説した。

「アタシ達はいいとして、ヨデイやオルバニアンは大丈夫なの？
まともに剣を使っている所を、見た事無いんだけど？」

アルミナがヨデイを茶化して言った。

「オルバニアンはともかく、僕は強いですよ」

ヨデイが応えた。

「おい、おい。俺だって剣ぐらい遣えるぜ」

オルバニアンも慌てて応える。

「でもなあ、こう言う時、アシュマがいてくれたらなあ……」

ため息混じりにアルミナが言う。

「だめよ、アルミナ。こう言う時にこそ、アシュマを信じてあげなきゃ。必ず戻ってくるって」

エフアールがアルミナを窘めた。

「分かりましたあ。お姉さまー」

アルミナが茶化した。

「うふふふっ」

晴れて釈放された、ノナが笑った。

「どうしたい？ 何か可笑しかったかい？」

アルミナが尋ねた。

「いえ、皆さん、とても仲が宜しい様に見えたので、私もその輪に入れたらいいなあって」

ノナは本当に、羨ましいと思った。

「入れば？ それでおしまい。簡単な事さ」

アルミナは断じた。

「あ、はい……」

ノナは、アルミナのその調子に気圧された。

「駄目よ、アルミナ、そんないい方しちゃ。どうぞ、こっちへいらつしゃいな」

エファールが優しく言った。

「はい。有難う御座います」

ノナが緊張して言う。

「まあ、最初はこんな物でしょう」

ノナの緊張の度合いを見て、エファールが言った。

『こちらイルドラコントロール。貴船の名前と所属乗船名簿、来訪目的と滞在日数を教えられたし』

「あー、こちらは『銀龍』。所属はアヘイビア、エバス財団・貿易部所属。来訪目的は貿易。滞在日数は不明。乗船名簿と積荷リストは、これからそちらに転送する。あと、こちらにはウイスキーがあるが、いかが？」

ヨディはいつもの事をいつもの様に語った。

そこへネルゼイが、

「おい！ ヨディ！ 『ウイスキー』なんて使うのか？ 俺の目の前で！？」

と、咎めた。

「こうでもしないと、イルドラなんて行き着けませんよ。この手の船は、みんな。それともここから引き返します？」

ヨディがソフトに、ネルゼイを脅した。

「うっ……」

ネルゼイは、言葉に詰まる。

「オ、オルバニアン！ ノナ！ 着いた。降りるぞ！」

「待って下さい。僕達も降りるんですから」

「うお？ そ、そうか……」

ネルゼイは、ばつが悪そうにした。

ノナがそれを見てくすくすと笑った。

ネルゼイは格好がつかないのか、

「しっかし、お前も変わってるなあ。何であんな野郎と、つるんでるんだ？」

等と、オルバニアンに話を振った。

「誰が好きで一緒にいるんだよ？ 腐れ縁だよ」

オルバニアンが応えた。

「そうなの？」

ノナが訊いた。

「そーさ」

オルバニアンが答え、

「それより君を襲った奴らだけど、心当たりは？」

逆にノナに訊いていた。

「ないわ」

それに対してノナは即答した。

「でも、あの工場では、確か別の理由で狙われてるって」

と、オルバニアンが言った。

それはノナにとって、痛い所を突かれたらしく、

「そ、それは……その……あ！ だってホラ麻薬の事じゃなきゃあ、

別の理由って事に、なるじゃない？」

と、なんとなくお茶を濁して、誤魔化そうとしていた。

「そーかあ？ そんな風にや……どっちにしても、このままじゃ、

命、あぶねーんだぜ？」

オルバニアンは、納得しかねるといった風で、ノナに食い付いて

いた。

「いーの。放っておいて」

ノナは自分の事を、放念する様求めた。

「放って置けるか！」

「しつこいと嫌われるぞ？ オルバニアン。大体ノナ、君は何でつ

いて来たんだ？ 事が解決するまで、保護してやったのに」

ネルゼイが、その訳を訊いた。

「……………」

ノナは黙ったままだ。

「さて、いつもの事ですが、はぐれたり、何かあった場合は、ここに戻ってくる事。どうしても戻れない場合は、連絡を入れる事。いいですね？」

ヨデイが皆に『いつもの事』を言っていた。

「今回のお留守番は、アベ二爺とノナさんです。お留守番の方々、後を宜しくお願いします。では今日も一日、安全第一で行きましょう」

「それよりおっちゃんよお、アンタどーすんの？」

オルバニアンが、ネルゼイをおっちゃん扱いにした。

「おっちゃんじゃねえ！」

一拍入れてから、ネルゼイは話し始めた。

「用途不明の定期便があるんだ。イルドラとイルドリアの短い区間をわざわざ行き交う奴と、イルドラからどこへ行くか分からない奴の二種類……。二。三デツキがキーステーションだから、その倉庫にチェックを入れてみる」

「ふゝん。つつたって、ヨデイの真似事すんだろ？」

オルバニアンが、からかい気味に言う。

「おいおい……」

ネルゼイは逆に呆れていた。

「今晚はおっちゃんの手伝いだから、ここを動くんじゃねーぞ」
オルバニアンはノナに釘を刺した。

「うん……」

ノナは、素直に頷いて見せた。

「じゃあ、行つて来るからな」

オルバニアンは、ノナに挨拶をした。

「うん………さよなら……」

ノナはその場で、妙な別れ方をした。

「よくぞ戻ってきた。アシュマ・アトー・シヨアク・アシュオンよ」
イルドラの執務室で、アシュマはナラステイに対峙した。
イルドリアでの爆発は、鬼虎の念導境界面で防がれた。

あの後三人は助かったのだ。

ライフライン口から脱出し、ハルナと合流し、あの場を逃れて、
気が付いたらここへ来ていた。

ハルナは消え、フィナとビツシュは半ば、拘束状態で連れて行かれた。

アーチエルに会わせると言っても、会わせてくれない。

そんな状態で鬼虎も、人質が居るが故に、取り上げられた様な物だった。

アンフェアだと思った。

「フルネームで呼ばれるとはな。何年ぶりだ？」

アシュマは殺気を帯びた、笑みをしていた。

アンフェアな事が、アシュマの殺気の原因となっていた。

言霊と言言葉がある。

どこでどう調べたかは知らないが、フルネームで呼ぶ事で、交渉のカードにでもしたつもりなのか？

お笑い種だと思った。

「そちの感傷に、付き合っている暇は無い」

ナラステイも狡猾で、爬虫類の様な笑みで、アシュマを見ていた。

「アーチエルと、鬼虎を返して貰おう」

アシュマは、殺気を更に膨らました。

「無償で返す程、商人は甘くない」

ナラステイは利益を求めた。

「……全くだ。で？何をすればいい？」

アシュマは、やはり殺気のある笑みをしていたが、目は笑っていなかった。

それだけに、凄みのある顔になっていた。

アンフェアだと覚えつつも、乗るしかなかった。

こちらのカードは、ナラスティを殺す事以外ないからだ

「国王を守って貰いたい」

ナラスティは『意外』な事を言い出した。

「『殺つて』くれ、の、間違いじゃないのか？」

アシュマは揶揄して様子を見てみた。

「今、国王に死なれて喜ぶのは、アゾビングしかおらん。それでは困るのだよアシュマ君。さて君の剣の腕を、見せてもらおうか？」

ナラスティは言った。

「その前に聞きたい。俺の連れはどうした？」

当然の権利だった。

これが聞き入れられねば、素手にてもナラスティをいたぶり、体に訊こうと思っていた。

「アーチエル様は、丁重に保護をしている。これは本当だ。安心していい。残りの二人、ビツシュ・ノマンとフィナ・エマルは待機して貰っている」

「待機？」

またナラスティは、奇妙な事を言った。

「そうだ。待機だ。さて！ 得物は何にする！？」

ナラスティは、この状況を楽しんでいる様にも見えた。

「状況によって、使い分ける」

アシュマは、相手が何を言っているのか、今ひとつ掴みかねていた。

よって、慎重に答えざるを得なかった。

「はっ！ はははははっ！ 成程。言う事、一々尤もだ。では君には、木刀を貸し与える。それでこれからの試練を、乗り越えてくれたまえ」

床の一部が競りあがり、木刀が出てきた。

定寸より三丁四寸程長い。

が、アシュマの手には、丁度良い長さであった。壁が開かれ、十人の男達が現れた。

「先ずは、こいつらを倒せ、と、言う事が……」

仕掛けたのは、向こうの連中だった。

十人全員で、佩刀を八双に構え、突進してきた。

全員白装束で一系乱れぬ行動をとり、アシユマに迫ってきた。

アシユマは木刀を右手にだりと下ろして、右に左にゆらりゆらりと、的を取らせない様な動きをして、つかみ所が無かった。

『向こう』の連中は、多少惑わされた様だが、そのまま突っ込んできた。

アシユマと白装束の男達が交錯した時、男が一人吹っ飛んだ。

男達は皆、吹き飛ばされた男を見た。

男一人が吹き飛ばされる等、思っても見なかったからである。

そしてその隙に乗じて、アシユマは一人、また一人と、白装束の男を袈裟に斬り、腹を薙ぎ、次に次にと男達を、木刀で打ち据えて行った……。

……そして白装束の男は、とうとう最後となり、木刀を腰だめにし、相討ち覚悟で突進してきた。

アシユマはその男の攻撃を難なくかわすと、袈裟斬りを相手の背中に叩き込んでいた。

「これまでの時間一分十四秒……すばらしい！ 新記録だ！ さて、最後の難関だ。さあ、君達出てきてくれたまえ！」

壁が、

プシュッ！

と、音を立てて開き、出て来たのは、ビッシュ・ノマンとフィナ・エマルだった。

「…… ナラステイ！ 二人に何をした！！ 事と次第によっては……」

「さて、アシユマ。洗脳も催眠も、何も受けていない」

ビッシュが言った

「…… 本当だろうな？ ナラステイ？」

アシユマが言った。

「本当だ。保障しよう」

涼しげに言う。

「では尋常な勝負として、立ち会っていいのだな？」

アシュマは、大事な事として確かめた。

「そう言う事だ」

ナラステイが保障した。

ビッシュは六尺七寸近くある巨漢だ。

膂力もかなりある。

剣士としてみるならば、決して油断できる相手では、ない。

「ではっ！！」

フィナとビッシュが構える。

「いざ尋常に、勝負！！」

ビッシュが言つて、二人とアシュマは、間合いを取った。

友人であり、剣客同士であつたあの頃から、二人はどの様に成長したのだろう。

それは、この勝負の結果が、教えてくれるだろう。

アシュマはこの勝負において、『秘剣・朧霞』と『秘剣・空蝉』を自ら封印した。

つまり、純粹な剣士として、立ち会おうとしたのである。

アシュマは突進した。

しかし唯の突進ではない。

いつでも八方向へ、対応できる走りだった。

ビッシュもこちらに向けて、突進してきた。

どうやらアシュマは、左脇構えから抜き胴で来る。

そう読んだ、ビッシュはこっちも左脇構えに構え、走ってきた。

アシュマの構えは見慣れない構えだった。

それは、裏・閃光一刀・崩しの構えだった。

それにしてもフィナは、どこへ消えたのだろう

アシュマは『秘剣・万の眼』まんのかみめを使った。

『万の眼』は、一種の心眼である。

アシユマを中心に、全ての情景が見えた。

ビツシュの背に、フィナが潜んでいる情景が見える。

そして一気に、生死の間仕切りが切られた。

アシユマは、ビツシュの木刀の軌道を読み、ビツシュの一撃を、紙一重でかわした。

そしてアシユマは木刀を横に薙いだ。

アシユマの打撃を食らい、ビツシュの体が『く』の字に曲がると同時に、ビツシュの背中からフィナが現れた。

アシユマはそのまま走り抜け、フィナへと振り向いた。

フィナは木刀を突きたて、アシユマ目掛けて、宙より降りてきた。

アシユマは、ふっと間合いを外し、降りてくるフィナを痛打し、フィナを数間ほど先に吹き飛ばした。

アシユマは、

ふうーっ！

と、大きく息を吐いて言った。

「これでいいのか？」

「合格です」

ナラスティが、満足げに応えた。

「いたたた……」

ビツシュは、脇腹を押さえながら、立ち上がった。

「ビツシュ……」

アシユマが呼びかけた。

「やはり、腕を上げたな、アシユマ。がはははは」

ビツシュは豪快に笑っていた。

「先ずは契約を履行する前に、アーチエルの無事と、鬼虎を、確認させてもらおうか？」

アシユマは当然の事を、要求した。

「当然……か。こつちだ、来たまえ」

アシユマ達が最初に連れてこられたのは、研究施設のような所であった。

鬼虎は、何かの台の様な物の上に、乗せられていた。

それから何かの実験装置が、横にずらりと並べられていた。

どうやらこの実験機器を通じて、鬼虎の事を探ろうとしているらしい。

それにしても、鬼虎に特別な『性能』があると、よく分かったものだと、そちらの方に関心が行ってしまう。

「こんな事をして、鬼虎の正体は分かるまいよ」

アシユマは言った。

ナラスティは、今の一言で、多少気分を損ねた様だ。

しかしこちらにとって、そんな事は関係が無かった。

次にアシユマ達が連れてこられたのは、病院の集中治療室の様な所で、アーチエルはそこに寝ていた。

アシユマ達は、そこから一段高い所から、アーチエルを見下ろしていた。

「貴様！ アーチエルに何をした！？」

「何もしたりはせん。本当だ」

ナラスティは本当の事を言う。

「あの点滴は何だ？ まさか、変な薬とかじゃあないだろうな！？」

「いや、それは無い。ただの点滴だ。疲労が溜まっているだけだ」

「近くに行つてあわせろ」

「……………」

「分からんのか？ 『あわせろ』と言っている」

「仕方あるまい」

ナラスティは渋々承知した。

アシユマ達は階段を降りて、アーチエルのいる階まで来た。

アシユマはドアを開き、アーチエルの元へ歩み寄った。

そして声を掛ける。

「アーチエル！ アーチエル！！ アーチエ……………」

「…………聞こえてますわよ、ちゃん」と

アーチエルはにっこりとした笑顔を、アシユマに向けてきた。

ただ、疲労しているのか、笑顔に覇気がなかった。

「アーチエル……。ナラスティは、君に何をさせているんだ？」

「大丈夫よ。変な事は何もされていないわ。それは分かるの」

「ああ、そうか」

「ただ、薬で眠らされているから、よくは覚えていないけど……でも、とても危険な事をしている様な気がするわ」

「薬か……ナラスティめ」

アシュマが、静かに怒りを表した。

「アシュマさま。今は、アシュマさまの成すべき事をしてね。私、待つてるから」

「大丈夫。そんなに待たせる事は、無い」

「はい。分かりました」

「生まれる前からの因縁だ。必ずアーチエルのことは守る」

アシュマは不思議な事を言った。

「え？」

アーチエルは軽く疑問を呈す。

が、何か得心がいったのか、柔らかに微笑む。

アシュマとアーチエルは軽く口付けをする。

アーチエルの寝ている側には、洗い立てのボディアーマーが置いてあった。

アシュマは、ナラスティの所へ戻ってきた。

そして、ナラスティの鳩尾を、一発ぶん殴ってやった。

ナラスティは、一問程先まで吹っ飛んだ。

「あんたの人氣は、その顔にもあるんだろうよ。顔を殴られなくて良かったと思え。さて具体的な段取りだが……？」

ネルゼイとオルバニアンは、イルドラの二。三デッキへと着いた。屋外に倉庫街がある。

辺りはコンテナの山で、身を隠すのには絶好の場所だった。

二人は、なおも、二〇三デッキの倉庫のある方へ、身を隠しながら近付いていった。

「あれか？ どーすんだ？」

オルバニアンが訊いた。

「とーぜん現場を押さえて、証拠にするんだよ」

ネルゼイが、この場での目的を言った。

二人はコンテナの上に登り、コンテナの上から二〇三デッキを、見張っていた。

「もうそろそろ、問題の便から、荷がやって来る」

ネルゼイが言った。

「あれか？」

問題の物資は、フォークリフトに載せられて、やって来た。倉庫の扉が開き、物資は倉庫の奥まで、運ばれていった。

二人は素早く、倉庫の入り口まで移動し、隙を見て倉庫の中へと身を滑らせた。

問題の物資は、倉庫の奥で、丁度荷卸しがされる所だった。

フォークリフトは荷を残し倉庫から出て行った

残ったのは積荷をチェックしている倉庫内の人間だけだった。

二人は、チェックしている人間に素早く近付き、オルバニアンが刀の峰で、相手の首筋を打った。

「よしよし」

ネルゼイが言った。

「このチェック票も貰ってこーぜ」

オルバニアンが目敏く証拠となる物を手に入れた。

ネルゼイは積荷を調べていた。

「やはりDトランスか……」

その時、倉庫の更に奥から、

「誰だ！！」

懐中電灯で、同時に二人は、照らし出された。

保安要員は、マシンガンを撃ってきた。

「くそっ！」

オルバニアンは、反射的にライフルを撃ってしまった。
相手の男は、頭を粉微塵にされて、絶命した。

「あつ、馬鹿！」

ネルゼイは言ったが、もう遅い。

ウウウウウウ！

警報が鳴り響いた。

「急げ！」

ネルゼイは言った。

「あそこだ！！」

倉庫内の保安要員が、叫んでいた。

「おい、おっちゃん。どこでどう間違つて、こんな大騒ぎになったんだヨ？」

オルバニアンは不思議がった。

「お前なー」

ネルゼイは呆れていた。

相手の保安要員が、一斉に撃つて来た。

こちらは魔導石を持っているので、問題は無い。
逆に的はここですよと、言っている様な物だ。

「ぬっ！」

オルバニアンが、ライフルを撃った。

撃たれた者は、たちまち肉塊になる。

明らかにオーバーキルだ。

元々が、魔導機兵用の武器なのだ。

そつなつて当然だった。

保安要員達が、また撃つて来た。

オルバニアンには、格好の餌食だった。

また二人程、ライフルの餌食になった。

「お前の持っている武器は、凶悪すぎるな」
ネルゼイが呆れた。

「俺にはこの位が、丁度いいの」

オルバニアンには、ネルゼイの言葉が効かないらしい。
倉庫の扉が閉じ始めた。

「いそげ、おっちゃん！」

「言われなくとも、分かっただろ」

何とか二人は、扉が閉まる前に脱出できた。
が……。

「くく……見つけたぞ、とうとう。……そうか貴様ら警察の犬だったか」

現れたのは、ナラスティの配下のダムだった。

「お前死んだんじゃ……」

ネルゼイが言った。

「死ぬか！」

ダムは、腕をぶうんと、振り回した。

オルバニアンが辛うじて避けると、コンテナに拳が当たり、コンテナがひしゃげてしまった。

「せいっ！」

オルバニアンは目標物が近かったので、ライフルを使うのを嫌い、居合いよろしく刀を遣った。

が、刀はダムが上げた腕に阻まれ、オルバニアンの無銘の豪刀は、なんと刃こぼれを起こしてしまった。

「こりゃ、だめだ」

後ろに下がり、対魔導機兵用ライフルを構えて、撃った。

ズドン！

と、言う音がして、弾はダムに命中し、後に吹っ飛び、転がった。
「やった……のか？」

暫く見ていると、男はぴくりとして、ゆっくりだったが起き上がった。

「この特殊流体金属の皮膚を持つ体には、その程度の銃弾等効かんわ！」

そうダムは言い、オルバニアンはすかさず、手榴弾を投げた。
ドン！

と、言う音がして男は倒れて、燃え上がった。

「おっちゃん！ 今の内に逃げようぜ！」

「殺ったんじゃないのか！？」

「ライフルの弾も効かなかったんだ。あの程度じゃ、死なないよ」
そう言ってオルバニアンは逃げ出した。

案の定、男は起きだし、オルバニアン達を追いかけてようとしていた。

二人はチョッパーバイクにまたがり、エンジンを回した。

「急げ！」

オルバニアンが叫んだ。

「分かってる！」

ネルゼイは言ったが、焦る。

スターターを、何度も何度も踏み込んだ。

ダムがこちらに向かって、走り出した

ドルン！

と、エンジンが掛かった。

「急げ！」

再度オルバニアンが言った。

バイクが走り出す。

ダムは、今頃やって来た配下の者に、色々と号令をかけている様子だったが、もう、時既に遅く、オルバニアン達のバイクは遠くに走り去り、追跡の機を失っていた。

「上手く行ったんじゃないか？」

オルバニアンは誇らしげに言った。

「何言ってるんだ。こっちは冷や汗物だったぞ。しかし、これでイルドラも、Dトランスに関与しているな」

ネルゼイも少し誇らしげだった。

オルバニアンとネルゼイは銀龍に戻ってきた。

「ノナツ！ 帰ってきたぞ」

返事は無かった。

「まさか！」

オルバニアンはブリッジへと、走ってきた。

「しまった！ やられたか？」

周りを見回してみるとアベニがだらしなく、鼾を掻いて寝ていた。

「アベニ！ おい、アベニの爺様！！」

揺さぶって起してみる。

「ん？ ああ、オルバニアン殿……この、アベニ……一生の不覚、
ノナ様に薬を盛られ申した……」

そう言つて、自分の不甲斐なさを嘆いた。

「どういう事だ？」

オルバニアンが混乱した。

「こう言う事かも知れんぞ？」

ネルゼイは、レコーダーを指差した。

レコーダーには、録音済みのランプが点滅していた。

オルバニアンは、再生ボタンを押した。

『オルバニアン、御免なさい。驚いたでしょう？』

「！？」

ノナの声だった。

『お願い、オルバニアン。この事にはこれ以上深く関わらないで。
もう、私の事は構わないで。私と一緒にいると必ず命に関わるわ。』

……だから……もう……オルバニアン、騙すつもりじゃなかったんだけど……御免なさい。……貴方を巻き込みたくないのよ……。私、
貴方の事が……だから、さよなら。オルバニアン』

オルバニアンは、声の主がノナである事と、その内容に、驚きを
感じ得なかった。

レコーダーはそこで切れていた。

「バカヤロウ!!」

そう言ってオルバニアンは、
ガン!

と、下のボードを蹴った。

「もう、十分、巻き込まれていらあ! 今更……今更!!」

そんなオルバニアンを、ネルゼイは見守る事しか出来なかった。

イルドリア・ノリトレア王国国王杯武道大会の、開催日となった。
武道大会は伝統に則り、イルドリアの荒野の真ん中に。古代に設置された遺跡で、開催される事になっていた。

遺跡と言っても色々と補強されて、スタジアムとしての機能も、十分すぎる程整っていた。

駐車場も完備されていたし、隣にはアトラクションが中心の、テーマパークも建っていた。

その上更に近くには、イルドリア領政府首相官邸があった。

「さて皆さん」

ヨデイが言い始め、

「いよいよ、武道大会です。まずは予選に通らないと、話しになりません。皆で決勝戦に出場出来る様、頑張ってください」

「でも安全第一に」

エファールが閉めて笑いを取った。

特設観覧席では、既にナラスティが席に着いていた。

アシュマとの談合の後、すぐさまこのイルドリアに、来ていたのである。

特設観覧席は、箱型の部屋をしていて、広さは左程に広くは無い。壁の内三方がガラス面になっていた。

その上は、やはり特設観覧席で、ルーラン・ナル・テルドリニアナ、ノリトレア国王とノリトレア王国、関白ガルマインが、席に就いていた。

「ナラスティ様」

側近の者が声をかける。

「何だ？」

「アゾビング様が、御着きになりました」

席の後の出入り口から、アゾビングが入ってきた。

「アゾビング様。先に失礼しております」

ナラスティは軽く頭を下げる。

「うむ、構わんよ。これからは若い者の時代。老兵は消え行くのみ」
それに対して、ナラスティは皮肉で返した。

「消え行くのみだ等と仰られずに。貴方が来ないと始まりません。
何せ私の、イルドリア領政府首相就任の祝いですから」

それに対してナラスティも皮肉で返した。

「そうか……そうじゃな。ワシも若い者に道を譲って、祝わんとな。
『現』領政府首相と、して」

「ええ、祝っていただけると、嬉しく思いますよ。『前』領政府首相殿」

「しかし大胆な。由緒ある武道大会を、自分の就任祝いにするとは、
いやはや驚き入った次第ですな」

「いえいえ、これからの時代、これくらい自分をアピールを出来ませんと。ここで躊躇っている様では、これから先、何も出来ないでしょう」

二人は早くも、舌戦を交わしていた。

個人用の更衣室。

そこは割りと広かった。

アゾビングの配下の者が、とある武芸者に対して、命を下していた。
た。

国の行く末を担っているのは、お前だと言わんばかりに。

「いいか、お前に全てが掛かっているのだぞ。分かっているな？」

「分かっています。私とてイルドリア随一の剣士。万が一にも失敗等有り得ません」

命令を受けた者も、自信を見せた。

「頼もしいな。期待しているぞ。出場する時は、この仮面を、付けて行くのだぞ？」

仮面を手渡した。

アゾビングの部下は、そう言うと、部屋を出て行った。

「ふう」

暗殺者は一息入れた。

ガチャッ！

と、扉の開く音がして、部屋に入って来る者がいた。

「！？ 貴様、何奴！？」

暗殺者が言った。

「一手、御指南頂きたく、参上」

謎の男が言った。

「卑怯者め。何故武道大会に出ぬ？」

暗殺者が、卑怯と言っ言葉を使った。

笑止であると、謎の男は思った。

「仮面を付けければ、そこもと同じ。こちらも身分を、明かせぬ身でな」

謎の男は、意味深な事を言った。

「何で勝負を決する？」

暗殺者が、勝負を望んだ。

「どの得物にても」

謎の男は、不敵にも、そう言い放った。

つまり自分は、どの武器でも勝てる。

そう言っている様な物だった。

「ならば木刀にて」

暗殺者は、謎の男の事を、小賢しいと思った。

ならばと暗殺者は、最も得意とする得物で、挑んできた。

「相分かった」

謎の男も了解した。

アゾビングの放った暗殺者と、謎の男は、木刀を持ち対峙した。二人とも相正眼に構えて、微動だにしなかった。

仕掛けたのは、暗殺者だった。

暗殺者は、正眼から、謎の男の喉元目掛けて、突いて来た。

謎の男は、それを読んでいたかの如く、体を右半身に開いて、暗殺者の木刀を打ち下ろした。

暗殺者は木刀を取り落とし、無刀になった。

次に謎の男は、左手の掌底に気を集め、相手の鳩尾に打ち込んだ。暗殺者は壁まで吹っ飛び、そして気を失った。

謎の男は暗殺者に猿轡をはめ、刺客の着ていた衣服を剥ぎ取り、体を縛ってロッカーの中に放り込んだ。

そして謎の男は、暗殺者が着ていた服を身につけ、仮面を付けて、試合会場へ向かった。

途中で、アゾビングの配下の者に、会った。

「おい、用意はいいのか？」

「……………」

謎の仮面の男は、黙っているしかなかった。

アゾビングの配下は、その沈黙を肯定の意味と取ったらしく、

「よしっ、行けっ！」

そう言った。

予選が終わり、ヨディのチームが順当に勝ち残った。

仮面の男も勝ち残り、他二名も勝ち残った。

特筆すべき事は仮面の男……（本物ならば）リク・スナトと言う選手は、（これも本名かどうかは怪しいが）予選の全ての試合を三十秒以内に、袈裟からの一撃で鎖骨を折り、一本勝ちをしている事であろう。

恐るべき手練れと、言わねばなるまい。

決勝戦は合計八人、七試合で行われる事となった。

ガルマインは、この試合の行方に、別の興味をそそられた。

だが、残念なのは、

「アシュマ・アトーがいないな」

そのような事だった。

「ガルマインよ何か言ったか？」

『国王』ルランが訊いた。

「いいえ、何でも御座いません。陛下」

「そうか」

決勝戦を前に、勝ち残った八人を選手控え室に呼び、改めてルールの説明が行われた。

「さて、改めてルールを説明いたします。まず、勝負は一本制。本大会は武器の使用を認めます。但し殺傷を目的とした行為は、これを反則として負けとします。また、武器は木製の物のみを認めます。他の材質、例えば鉄、ゲルマニウム、ミスリル、セラミックといった物は、全て使用できません。これを使用した場合においても、反則負けとします。判定は審判の判断、もしくは戦闘不能、選手の試合辞退の申し入れ、場外となった場合になります。では、試合の無い選手は、この控え室で待っていて下さい」

一拍置いて審判は話し始めた。

「尚、ここにいる上位八名は、権利として、ここから決勝戦を見る事が出来ます。勿論見ないで帰るのも構いませんが」

「では、決勝戦第一試合を始めます。オルバニアン・マグマイヤー前へ」

「はい」

「アルミナ・ラ・シア前へ」

「はいっ」

「では、始めッ！」

オルバニアンはとにかく、アルミナの剣が回転を始める前に、何とかしなければならぬ。

迅速さが大切だと思った。

一方、アルミナは最初から戦利眼を使って、戦いを有利に導こう。そう思っていた。

戦利眼には、未だ太刀筋が、描かれていなかった。

それならばと、アルミナが背をオルバニアンに向け、左回転を始めようとした矢先に、アルミナの木製の大剣の前に、オルバニアンが腰を落として、木刀が縦に置かれた。

アルミナの剣の動きが封じられた。

その時、戦利眼には初めて、剣の動きが映し出された。

アルミナの剣の動きを、立てた木刀で封じておいて、そのまま木刀を刃先から柄に滑らせるようにして、アルミナの方へと移動しようとした、その様が映し出された。

アルミナは、急いで腕をたたみ、逆回転で剣を回し始めた。

スピードの乗った、アルミナの大剣が、オルバニアンを襲う。

こうなれば、オルバニアンの刀が先か、アルミナの剣が先か、速さ合戦の様相を見せていた。

オルバニアンは、木刀は僅かに届かないと判断したのか、またも腰を落とし、木刀を立てて、アルミナの斬撃を辛うじて防いだ。

ここで、オルバニアンの木刀が折れなかったのは、アルミナの剣の根元で受けた為で、これがアルミナの剣の先であったなら、大量の運動エネルギーで、木刀は粉々に粉碎されていただろう。

事実、オルバニアンが木刀を立てた所を支点に、アルミナの剣は、慣性の法則に則り、右に流れようとした。

これをアルミナは、必死になって、剣を持っていかれない様にしたのは、アルミナのリストが、異常に鍛えられ、しなやかで弾力のあるものだったからである。

そしてお互い、剣と刀を持ち合い、鏢迫り合いとなって、一進一

退。

双方押す事も、引く事も、出来なくなっていた。
アルミナの戦利眼が働いた。

オルバニアンはこの状態に焦れて、打ち込みを始めようとしていた。

大きく重い剣だ。動きは鈍るに違いない。

オルバニアンはそう判断して、一步引くと同時に、打ち込みを始めた。

袈裟に逆袈裟、そして胴。

その中で、オルバニアンは、顔面にだけは打ち込もうとは思わなかった。

黙っていれば美しい、そのアルミナの顔面だけは、傷をつけたくは無かったのである。

剣者として、甘いといわれれば、甘いだろう。

が、勝つ為に、そこまではしたくなかったのである。

案の定、アルミナの剣は、鈍い動きで、打ち込みについて来るのが、やっとだった。

だが、戦利眼の働くと、身幅が広い剣のおかげで、オルバニアンの攻撃を、辛うじて防いでいた。

今度はアルミナの方が、焦れてきた。

オルバニアンの動きに、アルミナが、ついて来れなくなってきたのだ。

アルミナは、刀の打ち込みに、隙が出来るのを待った。

一瞬、オルバニアンの動きに遅滞が見られ、隙が出来た。

オルバニアンも、疲れて来ていたのだ。

アルミナがその隙を逃さず、後へするすると後退するのと同じ時に、頭上で剣を回し始めた。

オルバニアンも離れじと、アルミナの後を追って木刀を構えた。

アルミナは歩を止め、オルバニアンへと斬撃を送った。

だが、もう既にアルミナの戦利眼には、オルバニアンの太刀筋が

見えていた。

見えてはいたが、この流れを止める事は、出来なかった。
オルバニアンは、すすす、と、素早く間合いを詰めた。

若干速く、アルミナの喉元に、切っ先を付ける。

アルミナは勢いを止められず、それでも剣を立てて（刃を寝かせてオルバニアンを傷付けたくなかったからだ）、オルバニアンを吹っ飛ばしていた。

しかし、勝利判定は、オルバニアンだった。

アルミナがオルバニアンの手を掴み、起き上がらせると、

「アタシの完敗だ。お祝いに今度おごるよ」

そう言った。

「いや、実戦では相打ちだったろう。おごるのは俺がするさ」
オルバニアンが言った。

「勝者、オルバニアン・マグマイヤー」

勝ち名乗りを受けると、会場が沸いた。

アルミナとオルバニアンは、並んで控え室まで戻って来た。

「お帰りー」

ヨディは、オルバニアンとアルミナを出迎えた。

「つぎの試合はと……おっちゃんじゃない」

ヨディが言った。

「おっちゃんではない!」

「頑張つてね、おっちゃんの相手は……」

言いかけて、ヨディは凍った。

相手はオール秒殺の、鎖骨砕き野郎だからだ。

「決勝戦、第二試合を始めます! ドクワント・ネルゼイ、前へ」

「おう!」

ネルゼイが受けた。

「リク・スナト前へ」

「……………」

それに対して、仮面の男は無言だった。

「おや？ お宅の所の剣士ですか？ 強そうだ」
ナラステイが言った。

「はっ、はっ、はっ。偶然、偶然勝ち残っただけですよ」
アゾビングは謙遜して見せた。

が、内心では、

（上手くやれよ）
と、願っていた。

「おい、おい……俺の鎖骨折るのだけは、勘弁してくれよ」
ネルゼイは相手に願った。

が、相手の剣士は喋る言葉なかった。

「では、始めッ！」

号令と共に、仮面の男は、距離をするすると縮めると、正眼から上段へと無造作に腕が上がり、そしてゆっくり木刀の切っ先が、ネルゼイの肩口へと吸い込まれていった。

その間、ネルゼイは、白昼夢かスローモーションでも見ているかの様に、木刀が降りてくるのが見えた。

それでいて切っ先はと言うと、これがまた見えないのだ。

ネルゼイはこれはいけない、と思い、木刀を横に構えた。

が、仮面の男は、ネルゼイの木刀を粉碎し、鎖骨を折る程ではなかったにせよ、肩口を痛打した。

「それまで！！ 勝者リク・スナト！」

「圧倒的な強さじゃないですか？ アゾビング様」

ナラステイは言ったが、実際は

（そうではなくては。こっちも色々と手を打ちましたからね）

等と思っていた。

「いえいえ、偶然じゃよ」

アゾビングは言ったが、

（この強さなら、行ける）

内心興奮していた。

様々な想いが交錯する中、大会は進んでいった。

わあっ！

と、会場は沸いたが、仮面の男は試合後の感動も何も無かったかの様に、控え室へと入って行った。

「大丈夫ですか？」

ヨデイがネルゼイに訊いた。

「あ、ああ。手加減はしてくれたらしい」

ネルゼイは応えた。

「しかし、よくもまあ、あれだけ速い攻撃に反応出来ましたね」

ヨデイが感嘆していた。

「速い？　そうか、速かったのか……俺には、とてもスローモーに感じたが」

ネルゼイは、正直な感想を漏らした。

「それだけ、あの高速の試合に、対応していたという事ですよ。それにしても相当の遣い手の様ですね」

ヨデイは相手に警戒心を持った。

「相当の遣い手だ」

ネルゼイはヨデイに同意した。

「次は誰ですか？」

「お前だよ！」

ネルゼイは突っ込んだ。

「僕ですか？」

「そうだよ！　お前だよ！」

「そうですか。じゃあ、チヨツと行ってきますよ」

ヨデイは棒を片手に、試合場に向かった。

「決勝戦第三試合を始めます！　ヨデイ・ヨフル、前へ」
「いエイっ！！」

ヨデイは観客にブイサインを作って見せた。

（もう、ヨデイったら、みっともないわ）

エファールは、恥かしい思いをした。

それは皆も同様で、顔を下に向けていた。

「ロア・ル口前へ」

「はい」

「では、始め！」

相手の選手は、木刀を正眼に構えた。

対するヨデイも、棒を正眼に構えた。

相手の選手は、正眼から刀を振り上げ、そしてヨデイ目掛けて、振り下ろしてきた。

ヨデイは、

「はいっ」

そう言う掛け声と共に、相手の木刀を棒の先で受け止め、棒で器用に相手の木刀をからめ取ると、相手の木刀を放り投げ、場外に飛ばしてしまった。

そして棒の先を、相手の鳩尾に突き入れると、相手の選手はぐったりしてしまった。

で、そのまま病室送りとなった。

腕だけ見ると、恐ろしい程の、手練れである事が分かる。

「それまで！ 勝者ヨデイ・ヨフル」

名乗りが挙がると、

「いえいつ！！」

再びブイサインを作って見せた。

「あれさえないけりやいいのに」

エファールが言った。

「全くだ」

オルバニアンが同意した。

「じゃあ、次、私だから」

エファールが、控え室から出て行った。

「決勝戦第四試合を始めます！ エファール・マーヤ・ソーファ前へ」

「はい」

「ババルズ・ドートス前へ！」

「おおー！」

相手の男は、気負っていた。

それに対しエファールは、極々自然体で居た。

「それでは、始め！」

「おおー！！！」

エファールは剣を腕の前に掲げる、独特の半身の構えで相手と対峙した。

対する相手の男は、二刀流で大小の木刀を前で交差させた、独特の構えで対峙した。

短い対峙の後、相手の男から、先陣が切って落とされた。

相手から木刀を振り下ろされて、エファールは半歩下がった。

また、木刀を横に薙ぎ、エファールは半歩下がった。

相手が追うと、追った分だけ、エファールは下がった。

「お……、おのれ！ 愚弄するか！？」

相手の男は怒った。

「なら、少しだけ、相手をしてあげようかしら？」

エファールは揶揄した。

「お、おのれ！！ これ以上の屈辱があるのか？」

相手は長刀を袈裟に斬りかかって来た。

エファールはそれを半歩下がって、それをかわして、また半歩踏み込んで、剣を突き入れた。

普通ならここでエファールの剣が、急所を突いて勝ちを得るのだが、相手は流石二刀流。

エファールの攻撃を、短刀が防いだ。

「！」

「ふははは！ どうだ！」

相手の男は笑って、自分の力を誇示した。

エファールは一步引いて、拳を顔面に置いて剣を立てた。

そして狙いを定め、無言の内に、剣で相手突き始めた。

が、今度は相手の男が、大小の刀でもって、エファールの突きを

かわす。

エファールはいったん剣を引いた。

「厄介な……」

エファールは呟いた。

相手の男が、

「やっと分かったか。我が剣は、攻撃の剣にあらず！ 守りの剣なり！」

そう言い切った。

そして、エファールは、半歩下がろうとした。が、後には、最早その様な余地が無い事を、知った。

「ふはは。どうした？ 後ろに下がらんのか？ ワシの間合いだぞ？ 相手をするのは少しだけか？ ふは、ふは、ふは、ふはははは！」

今度は相手の男が、エファールを揶揄した。

揶揄されたエファールは怒り、

「いいわ。『本気』で相手してあげる」

そう言い放った。

男はそれを聞いて、

「『本気』か。これは面白い。今まで本気でなかったと言うのか？ そこまで追い詰められながら……ふはは……」

更にからかった。

「黙ってないと、舌を噛むわよ？」

そう言つて、エファールが突いて来た。

軸足はその場にあつた。

「ふはは……これでは何もかわら……」

エファールの突きの速度が、変わってきた。

明らかに回転の速度が、速くなって来ていた。

段々相手の表情が、険しくなってきた。

「あら？ どうしたのかしら？ 表情が硬くつてよ」

先ず、右手の長刀を持っている方の手を狙い、右の拳を突いた。

「あうっ」

うめき声と共に、

カラン。

と、言う音に、木刀を落とした。

この時点で審判の判定が出るかな？

と、ヨディは思ったが、出なかった。

どうやら、まだ短刀を持っているからと、言う理由で試合は続行された様だ。

そんな事はお構い無しに、エファールは試合を続けた。

そして短刀を持っている手にも突きを入れ、短刀も落とした。

この時点で審判が

「いっぽ……」

そう言いかけたが、エファールが夜叉の形相で、まだ相手を攻撃していた。

頭に、胸に、肩に、肘に、鳩尾に、膝に、脚に……

既に相手は気絶していたが、エファールが相手が倒れこむのを、許さなかったのである。

「それまで！！ それまでだ！！ エファール・マーヤ・ソーファ
！！ 貴女の勝ちである！！ 攻撃を止めないか！！」

そこまで言われてエファールは、初めて自分を取り戻した様だった。

「勝者、エファール・マーヤ・ソーファ！」

勝者の名乗りが拳がっても、歓声は一切上がらなかった。

エファールは控え室に入ってきて、

「『また』やってしまったわ」

等と、言った。

この様なエファールを見るのは、皆初めてだった。

が、彼女にとっては、『また』なのである。

男達はこれから、『エファールを怒らせる』のはやめようと言う事になった。

「アシュマが居なくて良かったわ。こんな私、見せられないもの」
エファールはそう言って椅子に座ってしまった。

「では、決勝戦第五試合を始めます。オルバニアン・マグマイヤー
前へ」

「はいっ！」

オルバニアンが返事するのに対して、

「リク・スナト前へ」

「……………」

やはり、この選手は黙りを決め込んだ。

「どうやら奴が暗殺者らしいな」

ヨディが言った。

「そうね」

エファールが返す。

「だが、あそこにいるうちは、どうあっても暗殺は無理だ。となると、チャンスは一回限り。優勝者が王から直接、冠を受ける時だけだ」

ヨディはそう断定した。

「始め！」

準決勝第一試合が開始された。

オルバニアンは、少し左半身に構えた上段の構えで、相手を威圧しようとした。

が、仮面の男は、するするする、と間合いを詰め、正眼から上段へとゆっくり移行し、そのまま無造作に木刀を振り下ろした。

そう、全く無造作に、木刀を振り下ろしたように見えた。

だが実際は、物凄い高速で、刀が振り下ろされていた。

オルバニアンは左足を引き、左半身から右半身と構えを移して、仮面の男の初太刀を外す事に成功した。

そしてオルバニアンは仮面の男に対して、上段から木刀を打ち下ろしていた。

しかし仮面の男の、振り下ろした初太刀が見せ太刀で、すり上げ

た太刀が本太刀であつた事を、思い知らされた。

オルバニアンは、上段からの打ち下ろしを始めたが、完全に間合いを外されていた。

仮面の男は、半歩身を引きながら、物凄い速さで刀をすり上げ、振り下ろされるオルバニアンの木刀と交差した。

途端にオルバニアンの木刀は粉微塵に粉碎され、振り上げられた木刀は反転し、オルバニアンの肩口へと吸い込まれていった。

オルバニアンは、

（やられる！）

そう思い、次に来るであろう衝撃に、思わず体が反応し、思わず身を固めていた。

しかし、次に来たのは肩口に、ポンと何かが乗った感触だけだった。

「それまで！ 勝者リク・スナト！」

オルバニアンは、それでも白昼夢を見ているが如く、茫然自失としていた。

「まだまだだが、以前よりは上達している様だな」

仮面の男が、オルバニアンとすれ違いざま、ぼそりと呟いた。

「え？」

オルバニアンは振り向いたが、男は既に控え室へと入って行った。

「次は私達の番ね」

エファールがヨディに言った。

「さつきみたいな事が無い様、お手柔らかにお願いしますよ」

「それは、ヨディ次第ね」

「はあ、参ったなあ」

「決勝戦第六試合を始めます！ ヨディ・ヨフル前へ」

「わーい！ いえーい！」

またヨディは観客席に向かってアピールした。

「それ止めてよ、恥かしいから……」

エファールは、ヨディに向かって、言っていた。

「エファール・ソーファ、私語は謹んで。エファール・ソーファ前へ」

「はい」

エファールは、静かに返事した。

双方共に、気負った所は見受けられなかった。

「では、始め！」

だが、試合になると、ヨディは人が変わったかの様に豹変し、棒を正眼の構えに固めた。

（やだ、ヨディったら、こうしてみると意外にカッコいいじゃないの……っと、試合に集中、集中）

エファールは、試合中にもかかわらず、迂闊にも、不謹慎な事を考えていた。

（それにしても、構えに隙が無いわね）

エファールは、左半身に構えているヨディに対して、ヨディを中心に、反時計回りに回っていた。

それに対してヨディは、首だけをこちらに向けて、眼で、エファールを追っていた。

（だけど、ヨディ。それだと死角が出来るわよ？ どうするのかしら？）

エファールの指摘どおり体を動かしていなし、ヨディはエファールに対し死角を与えていた。

（悪いけれど、これは頂かせてもらおうわ）

エファールが、ヨディの死角目掛けて、剣で突いてきた

（もらった！）

思った瞬間、その場からくると、身を翻し右半身になりながら、棒を上から叩きつけてきた。

エファールは剣を突き出し、体が完全に伸びきってしまったていた。

エファールは慌てて体を元に戻して、棒からの攻撃をかわした。

どうやら、『死角』への攻撃は、ヨディの『誘い』であるらしい。

そして、一息つく間も与えず、ヨディは攻撃を仕掛けてきた。

ヨディは棒を前後に繰り出して、突きの連続攻撃を繰り出していた。

突きの連続攻撃は、エファールの十八番おはじである。

お株を奪われて、いい気がする訳が無い。

エファールも、攻撃を受けつつ、徐々にではあるが、反撃をしつつあった。

だが間合いが違った。

棒の間合いの方が、長いのである。

体の伸びきった所で、ヨディは棒で、剣を絡め取ろうとしてくるのである。

どうやらその方が、戦い易いらしい。

「ええい！ 細かい事をちまちまと！ 男でしょ！？ ヨディ！ 正々堂々と勝負しなさい！」

「正々堂々としているじゃあ、ないですか？ 僕は。思い通りにならないからと言って、怒るのでは、子供と同じですよ？」

「ええい！ 問答無用！！」

「問答無用だったって、話しかけてきたのはエファールさん、貴方でしょう？」

「ええい、細かい事を、男のくせに！」

「あ、ちよーっと、ヤバイかな？ 切れ掛かってるし」

「もう遅い！」

そう言つてエファールは、突きの回転数を、上げてきた。

だが、ヨディは、回転数が高くなる前に、棒を絡めたり、突きを入れたり、中々エファールに主導権を渡さなかった。

エファールは思い切つて、棒を握っている『拳』目掛けて、突きを入れた。

ヨディは待つてましたと言わんばかりに、棒で絡め取り、エファールの剣を場外へ放り出してしまった。

「あ……！！」

エファールは、意外な事でもあったかの様に、驚いた。

「どうでしょう?」

ヨディは満面の笑みで、エファールを見た。そうされては適わないとして、

「わかったわ。私の負けよ。審判、そういう事にして」

エファールは審判にそう伝えた。

「分かりました。勝者、ヨディ・ヨフル!」

会場が沸いた。

『本大会の決勝戦は、休憩十分を入れた後に開始します』
館内アナウンスが言った。

観客もその間に、トイレ等に行ったり、ジャンクフード等を買に行ったりしていた。

休憩時間になった途端、皆がヨディの周りに集まった。

「ヨディ! 負けるなヨ! 気合だ気合!」

オルバニアンが言った。

「負けるなって言っても、こればかりは、時の運ですから」

ヨディは古人の話を引き合いにした。

「もう、ヨディしか、残って無いんだからね」

アルミナが、珍しく悲痛な声を出していた。

「そんな風に言われても、なる様にしか、ならないんですから」

ヨディは至極尤もな事を言った。

「相手は、得体の知れない化け物だ。気をつけていけ」

ネルゼイがアドバイスをした。

「いや、そんな事言われても……」

困った事を言ってくれる物だと、ヨディは思った。

「みんな、これ以上ヨディにプレッシャーかけてどうするのよ?

高々ノリトレアの王が死んで、ノリトレアは政情不安定になり、それがこのイルドリアとイルドラに波及して、最悪内戦状態になるだけじゃない? びびらせてどうするのよ?」

エファールがけろりと言った。

「いや、今のが一番堪えたんだけど……さっきのお返ししていない

？」

ヨディは目が点になった。

「ほほほ……何の事かしらー？」

「まあ、とにかく武器、用意して待機だな」

アルミナが言った。

『間も無く試合を再開します。間も無く試合を再開します。選手の方は武舞台横の、選手控え室まで集まって下さい』

「もうー控え室まで来てるっつーの。二人とも。てゆうか、二人だけなのに、集まってるのはどーゆう事よ？」

オルバニアンが、アナウンスに対して、言い掛かりを付けていた。相当、苛々としているらしい。

「いーじゃない、只のアナウンスなんだからさ」

アルミナが、オルバニアンを、なだめていた。

「決勝戦本戦を始めます！ リク・スナト、前へ」

「……………」

「ヨディ・ヨフル前へ」

「宜しく、どーぞ」

ヨディは、秒殺仮面男に、右手を差し出したが、

「……………」

無視されてしまった。

「あ……そっ……なし……ね？」

ヨディは、出した右手を引っ込めた。

審判が前に出る。

二人は所定の位置に着く。

「では決勝戦始めッ！」

審判が号令を掛ける。

「やっぱりアンタが出てきたな。イルドリアの暗殺者さんよ」

ヨディは、仮面の男だけに聞こえる様に、呟いた。

「……………」

仮面の男は黙ったままだ。

そして仮面の男は、これまでの相手とは違い、迂闊に近寄る事等せずに、だらりと木刀を下げたまま反時計回りに回り始めた。

ヨデイも棒を構えて、眼で男の行方を追っていた。

「あれは、さつき私が、ヨデイと戦った形だわ」

エファールが言った。

「じゃあ、大丈夫だな。あれはヨデイの誘い技だ」

オルバニアンが、太鼓判を押した。

男がやはり、ヨデイの死角で仕掛けた。

「ハマったぜ」

オルバニアンが呟いた。

ヨデイはその場からくると、身を翻し右半身になりながら、棒を上から叩きつけてきた。

男はその棒を頭上で受け、そのまま滑る様に走り寄って来た。

ヨデイはこれは危ないと思い、思わず、つつつ……と、後退した。相手の男は、頭上の木刀をくるツと回転させると、ヨデイに対して袈裟に斬って来た。

間一髪でヨデイは、凶刃から逃れたと思った。

が、服が袈裟に斬られていた。

真空状態による物なのか、木刀に纏わせた『気』による物なのか。これでは真剣と変わらない。

ヨデイは、仮面の男は木刀一本あれば、国王暗殺等容易いと判断した。

「こりゃ、こつちから攻めないと、いけないって訳ね」

そう言つてヨデイは、構えなおすと、

「おしっ!!」

気合を入れて、棒を回転させた。

それは、男の掌で止められた。

「ありゃ？」

ヨデイが、頓狂な声を上げた。

今度はヨデイは、棒で突いてみた。

数合手を合わせたが、棒で突いて攻撃している筈のヨデイが、切っ先で棒の先を払っている男に、どんどん端へと追い詰められていた。

苦し紛れに、棒を正眼から、叩きつけていた。

そこからの連携技で、男を突いていた。

そして薙ぎ。

意外と効果があるのか、男は後退った。

やっと、余計な力が抜けて、本来の動きに戻れた様な気がした。前に突いて、すかさず薙ぐ。

男は思わず後退る。

「へへっ！ いただきっ！！」

ヨデイはすかさず、下から男目掛けて、薙ぐ。

男は体を開く事で、それを凌いだ。

「！」

ヨデイが棒を、横に薙いだ。

仮面の男が体を、するするする、と引いて棒をかわした。

「よし！ 今度こそ」

ヒュッ！

と、音がして、棒が仮面の男目掛けて、飛んで来るが、

ガッ！

と、木刀で受けられた。

「結構やるじゃん、世の中広いぜ」

ヨデイは感嘆した。

そのまま木刀で、棒を押さえつけながら仮面の男が、

「来い、良い事を教えてやろう」

仮面に遮られているのか、くぐもった声で言った。

「おっ、初めて喋ったのかな？ 僕も教えてあげよう。勝つのは、

僕だって事をね」

ヨデイは、根拠の無い、勝利宣言をした。

「やだ、ちょっと！ ヨデイ、押してるじゃない？」

エファールが、興奮気味に言った。

「うーん、やはりあの仮面野郎、できるな」
ネルゼイが言った。

「こりゃチョツとヤバイな」

オルバニアンも同調した。

「チョツと二人とも。あれだけ押しているじゃない？」

エファールは、二人の言葉に、納得がいかなかった。

「乗せられているんだよ、あの仮面の男に」

オルバニアンは指摘した。

「そんな馬鹿な！！ あれ程、押しているのに？」

エファールは言い張った。

「それよりも現実問題として、武装して国王陛下を……何か引つかかる言い方だなあ……まあ、いいや、とにかく陛下を守るのが、最短の道だと思う」

オルバニアンは言い切った。

実際の試合はと、いうと……。

ヨディが押し気味に、試合運びをしていた。

仮面の男が、確かにおされ気味に見えた。

「どうだ！？」

横に難いにおいて、

「これで最後だ！」

ヨディは棒で突いてきた。

これを仮面の男は、器用にも自らの木刀と脇の下で上手く挟み込むと、ガツチリ銜え込んで、棒はうんとともすんとも、言わなくなつた。

「棒術は長い分だけ、相手より長い間合いを取れるが……」

「くっ！」

「一旦、間合いの内側へ入られると……」

男はそう言うのと、更にするするすると間合いを詰めると、仮面の男の掌が光って……

「いけないわ！ ヨデイ！！」

エフアールが叫んだ。

「くっ！」

ヨデイが短く声を漏らした。

「こうなる！」

仮面の男は、掌底を、ヨデイに食らわせていた

ヨデイは、何メートルも吹っ飛ばされて、場外へと落ちた。

「それまで！」

「あゝあ、ヨデイ負けちゃったあ」

アルミナが嘆いた。

「別にいいんだ、負けても。現場さえ押さえれば」

オルバニアンは、直ぐにでも外へ出られる、用意をした。

「折角良い所まで、行つてたのにい」

エフアールはまだ、嘆いている。

外では、まだ興奮冷めやらぬ、と、言った所か。

観客席でも、未だ熱気が最高潮、と言った呈である。

「や、やったぞ！ ふ……ふあはははは！」

「おめでとう御座います。アゾビング様。表彰式ですな」

ナラスティが称える。

「表彰式？ ……おお！ 表彰式！」

『表彰式です。ただ今、特設観覧席より、国王陛下が御発ちになりました』

アナウンスが、響き渡る。

国王陛下には斜め四方に、魔導石を持った念者が控えていた。

観客席が沸いた。

アナウンスも、聞こえない程である。

アゾビングと、ナラスティの観客席では……。

（うまく殺れよ）

アゾビングはその瞬間を待った……。

第五節 表彰式そして乱戦。

フィナ・エマルは、アーチエルが監禁されている、医療施設の入り口に来た。

一階上の観察室には、誰もいない。

監視カメラは、潰してきた。

ドアの前までやってくる。

見張りが居ないのが、物怪もっけのさいわいの幸いだ。

ナラスティは、人を見下す所がある。

それが油断となり、こう言う所に形となって現れる。

セキュリティ上の、盲点と言った所か。

カードの差込口がある。

セキュリティカードの類だろう。

フィナはカード型端末を取り出し、端子を、小型電腦とカード読み込み口にそれぞれ取り付けて、小型電腦のプログラムを走らせた。

「来て……はやくう……」

次々確定して行く暗証番号。

暗証番号が確定した。

ピー！

と、言う音がして、ドアのロックが、

ガチャリ！

と、開いた。

アーチエルは覚醒していて、ベッドの上に座っていて、外をボーッと眺めていた。

「アーチエル様」

フィナが声を掛ける。

アーチエルがこちらを見た。

「フィナさん？」

アーチエルがとぼけた声を出す。

「こちらへ。早く」

フィナが催促する。

「？」

アーチエルはいまひとつ要領を得ない。

「脱出します。こちらへ」

フィナがアーチエルの手を取る。

「はい。今、着替えて……」

アーチエルはまだとぼけた事を言っている。

「着替えは、サイコフライヤーの中でゆっくりと。今は脱出に専念するのが妥当かと」

「はい。分かりました。このまま脱出するのですか？」

「いえ。鬼虎を取り戻して、それから脱出します」

「あれ程、ナラスティを信頼していた貴女が、何故心変わりをしたのですか？」

アーチエルが疑問に思う。

「ええ。私達を、アシュマさんの力量を測る道具に仕立てた仕打ち。アーチエル様とアシュマさんへの仕打ち。そしてアシュマさんから鬼虎を奪った仕打ち。これらを見て、信用なくなりました。尤も師匠は、アシュマさんと勝負が出来て、嬉しかった様ですけども。また師匠から、アーチエル様をよろしく頼むと、言伝を頂いたので」

フィナが様子を見ながら廊下に出る。

「そうですね……」

そうアーチエルは呟き、誰もいない廊下を、走って行った。

フィナは鬼虎が置かれている研究施設へと、潜んでやって来た。セキュリティーは、悉く潰してきた。

そろそろ、警報が鳴らされ、場所も特定されるだろう。

その前に鬼虎を奪い返し、何としても脱出し、アシュマに鬼虎を手渡さなければならぬ。

フィナは研究室へと乗り込むと、無言で、鬼虎の研究をしている

研究員に体当たりを食らわせた。

研究員が三人程吹き飛ばされ、鬼虎が床に放り出された。

鬼虎はアーチエルが押さえた。

フィナは自分の佩刀を持ち、声高に、

「追ってくるなッ！！ 知らせるなッ！！ やった奴は殺すッ！！」

そう凄んで、フィナとアーチエルは部屋を出て、廊下を走り去った。

アーチエルが鬼虎を持っている。

すると不思議な事が。

頭の中で声がするのである。

（汝、我と血の契約を交わすべし。さすれば、汝、無限の力を手に入れん）

と。

「フィナさん、何か仰いましたか？」

「いいえ。何か？」

「いえ……」

（この声は何なのだろう？）

今も、アーチエルの頭の中で響いている。

アーチエルは話題を転じる。

「フィナさん、アシユマさまとビツシユ様は？」

アーチエルは訊いた。

「別行動を取って居ます。今頃はイルドリアに、居る筈です」

「そうですか」

フィナはサイコ・フライヤー格納庫を目指していた。

その頃になって、やっと警報がなり始め、警備員達がぱらぱらと出始めてきた。

「アーチエル様、魔導石はお持ちで？」

「はい。持っております」

「宜しゅう御座います。あの一番手前のサイコフライヤーを『借り』ます」

「分かりました」

「その者、待ちなさい」

先着の警備員三人程が、フィナ達に気付き、追いかけてきた。

「『待ちなさい』と言われて『はいそうですか』と止まる程馬鹿じや……」

と、言いながらフィナは、アーチエルの方を振り向いた。

するとアーチエルは、立ち止まっていた。

慌ててフィナが、

「アーチエル様こちらです！」

アーチエルの手を取った。

「立ち止まられていましたが、まさか呼び止められたから……と言
う訳じゃありませんよね？」

フィナは多少苛つきながら言った。

「あの、そうですけど。……いけませんでしたでしょうか？」

アーチエルが、恐る恐る訊いた。

「こう言う場合は、逃げるのを最優先にして下さい」

しごく尤もな答えが、フィナから返ってきた。

そうこうしているうちに、矢張り、所詮、女の脚。

男の脚にはかなわずに、先程の警備員に追いつかれてしまった。

「ちっ！」

フィナは舌打ちをした。

ここで時間を掛ければ掛ける程、自分が不利になって行くのだ。
時間を掛けている暇は無い。

相手の警備員が、何か喋ろうとするのを無視して、フィナは無言
でいきなり抜刀し、一人目の脚を斬り裂いた。

返す刀で二人目の脚も斬り、三人目でやっと抜刀の体勢を取る所
の小手を打ち、手を斬り裂いた。

「フィナさん……」

「さ、王女、急いで。言いたい事は分かっております。ですが時間
がありません」

「分かりました。緊急なのですな」

「はい」

息を切らして、フィナはサイコフライヤーに乗り込んだ。

「行きます！ つかまっています下さい」

フィナがアーチエルに注意を喚起した

「は、はい」

アーチエルが緊張して答えた。

このサイコフライヤーは、念者と操縦者が同じタイプであった。
小型であった。

発進を遮る物は何も無い。

フィナはサイコ・フライヤーを駆って大空へと舞い上がった。

一方ナラスティは、携帯に電話が掛かり、
ピー！

と、言う音とともに、携帯をとった。

「この回線は何度も入れるなと………何！？ アーチエルと鬼虎が！？ え？ 警備の盲点を！？ そんな話はどうでも言い！ 今どこに？ なに？ こっちに向かってきている！？ 馬鹿者！ 全力を挙げて阻止しろ！ いいな！」

ナラスティは声音も高くそう言った。

「なにやら大変な様子ですな」

アゾビングが揶揄する。

「いえいえ。これ等問題の内にも入らぬ事にて」

ナラスティが応える。

一方、ガルマインの観覧席。

「兵の配置は出来ておるな？」

ガルマインは、側近の者にそう呟いた。

「はっ、配置完了しております」

「うむ。それならば、良い。それとだ……黒尽くめの男達と影の者

のトライアルも、終了に致す。ハーティアーに収容する。そう伝え
い」

ガルマインは、非情にも、ルーランを見捨てようと言うのだ。

「は。しかし何故、今になって兵の配置等と……」

「イルドリア側の兵の動きが妙だ。こう言う時は、早めに退けるに
限る」

「ルーラン様はいかがなさいますか？」

「守れないのが残念じゃ。あれは良い手駒じゃった。しかし、死ん
でくれればここへの睨みを強く出来る」

「は……了解いたしました」

「まあ、手駒はあれだけではない」

ガルマインは奇妙な事を言った。

折角手にした、手駒ではなかったのか？

手放して、惜しくは無いのか？

だが、ガルマインはルーランを見捨てようとしていた。

「は？ 今、何と？」

側近の者は訊き返していた。

「そうだ。アー又殿は来ておるか？」

「はっ、ただ今『御車』で、お休み中との事です

「出撃の機会もあるやも知れん。『調整』を済ましておけ」

「はっ」

ナラスティの観覧席でも、密やかに……。

「私の兵を配置させておけ。急げよ。気取られるな。王は必ず守れ。
いいな？ あと、アーチエルと鬼虎を密かに回収せい。よいな？」

「はっ、畏まりました」

ナラスティは、既に表彰式後の事を、考えて動いていた。

ルーランは表彰式上で口上を述べていた。

「戦の女神、マルホベラの名に於いて、汝に勝者の冠を授ける」

仮面の男に、榮譽を示す草で出来た冠が、被せられた。

「ああっ」

顔を背けたのは、エファールだ。

……しかし、戴冠式は無事終わった。

会場中が沸いた。

驚愕したのはアゾビングだった。

（何故だ……何故殺らん!?）

会場が一瞬だけシンとなった。

仮面の男が仮面をむしりと、下に棄てて、

「貴様の野望もこれまでだ!! アゾビング!!」

その者は大音声だいおんじょうに言った。

それを見て、彼を知る者は皆、異口同音に

「アシュマ!!」

と、叫んでいた。

「お、おい、何の演出だ?」

一般客がざわついた。

そこへビッシュ・ノマンが現れて、

「国王暗殺の実行犯はこいつだ! 洗い浚あらいぬい吐いたぜ。観念くわんねんしな!

!」

そう言つて、本物の犯人を連れてきた。

「どうだ! 潔く自分の罪を認めるか!?」

ビッシュが畳み掛けた。

「これは、どう言つ事ですか? アゾビング様」

同室のナラステイが、事の成り行きを尋ねた。

「な……何をしておる! 早く奴らを捕えんか!! 奴らこそ、国

を脅かす国賊ぞ!!」

アゾビングは、大慌てでアシュマ達の捕縛を命令した。

「何か揉めてるなあ。やっぱ、こつち来るのかなあ?」

ヨディは棒を構えなおした。

「チッ! 悪足掻きもいとこだぜっ! アシュマの所に行こうぜ

!」

オルバニアンは合流を促した。

オルバニアン等は、何処にどう隠していたのか、手持ちの武器を取り出した。

「よお！ アシユマ。水くせえじゃねえか！ そうならそうと、早く言ってくれば良いのによ。何で仮面なんかで、誤魔化してたんだよう！」

オルバニアンはアシユマに言った。

「お前達が無神経すぎるだけだ」

アシユマが呆れていた。

「死んでる物かと、思っていましたよ」

ヨデイが涙ぐみながら言った。

「勝手に殺すな」

アシユマもまんざらでは無いらしい。

「アシユマ！」

アルミナが飛び込んできた。

「アシユマ、本当にアシユマなんだね？」

「ああ」

「ちょっと、小娘、離れなさい……よつと！」

エファールは、アルミナを強引に引き離れた。

「そういえば、もう一人の小娘がいないわね。どうしたの？ アシユマ」

「今、来る」

アシユマが視線を転じた先には、サイコ・フライヤーで降りてくる、アーチエルの姿があつた。

ナラスティはそれを見て、まさかあそこまでサイコ・フライヤーで来る等とは、思っていなかった。

アーチエルは先日貰った、ボディアーマーを着ていた。

武舞台上に、サイコ・フライヤーが降下して、アーチエルはその場に降り立った。

そしてアーチエルは、アシユマの側にやってくると……、

「はい、アシユマさま！ 鬼虎です！」

鬼虎を手渡した。

「うむ！ 助かる、百人力だ」

アシュマはそう言つて、アーチエルの頭をなでた。

「先日、皆で着付けてくれた、ボディーアーマーが上手く着付けられているか、心配でなりません」

照れ隠しにアーチエルはそう言つてみせる。

「大丈夫よ」

「上手く着付けられているぜ」

エファールとアルミナが太鼓判を押してくれた。

「有難う御座います」

そして次の瞬間、アーチエルの顔つきが変わった。

「よいか！？ 皆の者、殺すでない！！ 相手は先ずはアゾビング！！ 彼奴を追え！！ アルミナ様と、オルバニアン様はこの場にて、国王陛下と証人を護るべし！！ 頼みましたよ！」

アーチエルが皆に下知を下した。

「応！」

「了解だ」

次々オルバニアンとアルミナに、了解の旨が帰ってきた。

兵士達が、アシュマら目掛けて、突進してきた。

アシュマは鬼虎を抜き、峰に反した。

そして近づく兵を、薙ぎ払った。

「師匠！ お待たせしました。助勢します」

フィナが言った。

フィナとアーチエル、二人で脱出してきたのだ。

「おおフィナか。我ら二人で、この証人を護るぞ！」

ビッシュは弟子に命じた。

「はい！ 師匠！」

弟子も師匠に、付き従った。

一方、オルバニアンが、ルーラン王の方に目を転ずれば……
「そなたは過日の……」

ルーランが言いかけ、

「今日は『国王陛下』を護る事を仰せ付かった、唯の兵士ですよ。『陛下』」

オルバニアンが言い切った。

よく見ると二人は、衣装の違い等があれど、よく似た顔つきだった。

ただ、ルーランの方が若干背が低く、線が細い様な感じがした。ここから、アゾビングがいる、特設観覧席は近かった。

登りの事を考えても、精々百メートル程。

アゾビングを捕えるには、十分な距離だった。

ただ特設観覧席の直ぐ上に、サイコフライヤーが、浮いている事が気に掛かるが……。

ガルマインが、陣取っている特設観覧席で……。

「ここはこれまでだな」

と、ガルマインが言った。

「儂のハーティアーまでの退路を確保せよ。その後イルドラにて待機。ナラスティの事だ。まだ何か、隠し玉があるやも知れん。イルドラで様子を見る」

側近の者に、そう言った。

「あの、国王陛下は？」

側近の者が言った。

「仕方が無い。打って出るには、乱戦が過ぎる。折角手にした大事な駒だった、他の駒が無いではない」

「はっ」

「アーヌ殿はまだか？」

「もう直ぐにでも」

アシユマが外で、アゾビング捕縛の為、奮闘していた。

するとそれは突然、上空から『降って』来た。

それは、青黒い甲殻類の様な甲冑を身に纏った者、アーヌだった。『アーヌか！ アーチェル！ ヨディと一緒に行け！ ヨディ、ア

「チエルを頼む！」

アシュマがヨディに頼んだ。

「わかった。さ、王女様」

「アシュマさま！ 必ず生きて帰ってきて下さい！！ 約束です！
！」

アーチエルが悲壮な想いで、アシュマに叫んだ。

アシュマは眼で返事をした。

「アシュマ・アトー。いつぞやはこの我に、屈辱的な敗北を味合わせてくれたのう！ 今度はお主が、一敗地にまみれる番よ！ 二度とワシの前に、姿を表せる事が出来ぬ様にしてやる」

アーヌが佩刀を抜いた。

アシュマは

「おや？」

と、思った。

いつものアーヌの刀（と、言ってもいつもアシュマが破壊しているが）と少し違う様な気がした。

「どけ！ アーヌ！ 貴様に付き合っている暇は無い！」

アシュマはアーヌでさえ、戦っている時間を惜しんだ。

「無くとも付き合ってもらおう。何しろ新しい刀が手に入ったでな、試し斬りには丁度良い？」

アーヌは不穏当な事を言った。

「なに？」

「先ずは、こう言うのはどうだ？」

アーヌが繰り出した技は、アシュマ自身もまだ名をつけてない、三日月状の光の刃だった。

ナラスティとアゾビングの特設観覧席の部屋では、争いが起こっていた

「どちらにしろ貴方に聞く事が、山の様にある様だ。アゾビング様をお連れしろ！」

と、兵士二人が、両脇からやって来ようとした。

「くそ！ 謀ったな？」

怒りを頭あたまにするアゾビング。

「さあ？ 何の事ですか？」

とぼける、ナラスティ。

キリキリキリと、何か機械的な音がした。

「？」

カタンー！

と、天井が開いて、アゾビングは垂れているロープに手をかけ脚をかけて、サイコ・フライヤーがアゾビングを収容して行く。

「しまったあ！」

ナラスティとヨデイが、同時に言った。

アゾビングは、

「ははは……」

と、笑いながら、空の彼方に消えた。

「ハルナを呼べッ！ 行き先は奴の官邸だっ！ それに私の特殊部隊を呼べ！！ 国王陛下を安全な場所へお連れしろ！ そしてこの場の撤収だ！ 最早この場に意味は無い！」

そう、ナラスティは命令した。

ヨデイも、アーチエルとエファールを引き連れて、階段を下りてきた。

そこへアシュマが吹っ飛んできた。

アシュマの体は階段を粉碎し、その瓦礫の中に埋まっていたが、中から頭を出した。

上半身の服はボロボロで、最早服の用を足してなかった。

「アシュマ！ ここにいても、もう意味が無い。撤収だ」

ヨデイが言った。

「なら、オルバニアンの方を、先にしてくれ。こっちはそれ所じゃ無い」

アシュマが辛うじて言う。

言っている側から、三日月型の光の刃が、アシュマを襲う。

三日月状の光の刃が、アシュマを直撃した。
だが、辛うじて、アシュマの念導境界面が働き、直撃のショックを和らげていた。

念導境界面よりはみ出した光の刃は、背後の石の階段にぶつかり、瓦礫となってアシュマを押し潰した。

アシュマは、瓦礫に埋まってしまう。

「やめて！ もうやめて！！ アシュマさまが！ アシュマさまが死んじゃう！！」

アーチエルが叫び、泣きながら、瓦礫をどけていった。
アシュマは見つかった。

「アシュマ！！」

ヨディとエファールが、叫び声をあげる。

だが、アシュマは気を失っているのか、眼は閉じられていた。
最悪の場合は、死も考えられた。

アーチエルが、泣きながらキスをした。

それは舌をからめる事も知らぬ不器用なキスだった。

「娘ごよ、そこを退かれい。そこではお主も巻き添えを食うぞ」
意外な事を、アーヌが階段を上りながら、から言った。

「いえ……退きません」

アーチエルはそう言って、退かなかった。

「退かぬなら、お主ごとアシュマを斬るぞ」

アーヌは、脅しと取れる事を言った。

「アシュマさまを斬ったら、私が鬼虎で貴方を斬ります！」

瓦礫から鬼虎を掘り起こす。

鬼虎で狙いを定める。

その時に、うっかり刃で、指を軽く斬って切ってしまった。

（……汝、我との契約は為せり……）

頭の中で声が響く。

（え？ けいやく？ 何なの？）

「う……う……」

アシュマの意識が覚醒した。

「何、アシュマ？ アシュマ！ アシュマさまあー！！」

アーチェルの瞳からこぼれた涙が、アシュマを伝う。

アーチェルは最後に何かを決意したかの様に鬼虎を持つとうとしたが、鬼虎はもとあった場所になく、持たれるべき者の手にあった。

「アシュマさま、大丈夫なの？」

アーチェルはアシュマの身を案じた。

「ああ、大丈夫だ。天使のキスを貰ったから」

アシュマにしてはロマンティックな事を言った。

「覚悟はいいか？ アシュマ・アトー！」

アーヌはアシュマを呼んだ。

「いつにても」

アシュマも返す。

そして鬼虎は、いつにも増して銀色に光っていた。

「秘剣、裏・閃光一刀・崩し！」

アーヌは刀を一閃二閃させ銀色の弓形の刃を飛ばしていた。

アシュマはそのままアーヌへと突っ込んだ。

弓形の光刃は鬼虎の念導境界面で光となり、雷光に変換されて鬼虎に吸収された。

「おおっ！！」

アーヌは叫んだ。

「アーヌー！！」

アシュマも叫んでいた。

アーヌは刀を横に薙いだ。

アシュマも鬼虎を横に薙いだ。

二振りの刀が中空で交わり火花を散らす。

鬼虎がアーヌの刀を弾いた。

新しい刀と言うだけあって、粉碎する事は難しかった。

鬼虎は弾いた勢いをそのままに、アーヌ鎧の、腹部の辺りを強打していた。

アーヌは、これまでに無い程の衝撃を、腹部に受けた筈であった。事実これまで、一寸たりとも傷を付ける事の出来なかった鎧に、僅かながら傷を付ける事が出来た。

あくまで、『傷』程度だが。

鎧は硬くとも、中身は鎧に比べ弱い筈。

これがアシュマの『読み』であった。

そのままアシュマは、アーヌに激突した。

アシュマは左腕の肘をアーヌの顎下に入れ、アーヌの後頭部で階段を粉碎しながら滑り降りてきた。

どうやらアーヌは、気絶してくれたらしい。

しかし、鬼虎の銀色の光は、失われてしまった。

とどめを刺す事が、難しくなった。

鬼虎があそこまで光って、やっとな傷一つ。

あそこまで硬い鎧とは、一体何で出来ているのか？

鬼虎と、同じ素材で、出来ているとも言うのか？

向こうでは、オルバニアンとアルミナが、ヨディに何か説明をしている様だ。

向こうには、アーチェルも居るらしい。

「だから、お守りしろと言うのは、正式な護衛が到着するまで、最後までお守りするのはやりすぎと言う物で……」

ヨディは珍しく困惑していた。

「正式な護衛なんて、来てねえよな」

オルバニアンが言う。

「はい、来ていません」

と、ルーラン。

「親衛隊は！？」

ヨディは訊いた。

「来ていません」

またルーラン。

「四方をお守りしていた、護衛の方々は？」

「皆、逃げました」

「他の護衛は!？」

「怪しいのでオルバニアン様をお願いして、追いついていただきました」

「何でそんな事、するかなあ？」

ヨディは頭を抱えた。

「ヨディよお、こうなったら、連れて行くしかないんじゃないか？
本人も死にたく無いだろうしさあ」

オルバニアンは人情が出たのか、そう言った。

「流石はオルバニアン様！ 言う事が違う。これでノリトレアに戻れば、英雄ですよ！」

ルーランが乗せた。

「あああは、そうかなあ？ あは」

オルバニアンは、ルーランに踊らされた。

「いや、それは無いと思う」

アルミナが言う。

「よし。ここでごちゃごちゃやっていても、仕方ない。ルーラン王を保護しつつ、我々も敵陣へ乗り込みましょう！」

ヨディが閉めた。

どこの軍の物かは知らないが、アシユマ達は、軍の残した装甲兵員輸送車を拝借し、アゾビングの待つ、領政府首相官邸へやって来た。

アゾビングが、向こうからこっちの方へ、向かってきた。

「一点突破で脱出するぞ」

アゾビングは命令をした。

各所、各所では戦闘が勃発していた。

アゾビングの周囲八方向には、親衛隊の者が警護に当たり、前三名の『特級』の念者が槍を持ち、樹脂製のシールドを持って、行進

していた。

目の前に敵が現れると、念者が敵の攻撃を受けつつ、敵を串刺しにして進む。

と、言った構図であつた。

アゾビングは、着実に脱出への道を進んでいた。

アシユマ達は、首相官邸の前まで来た。

そこでは蜂の巣を突付いた様に、激しい銃撃戦が行われ、これっぽっちの隙も、見出せないでいた。

「ヨデイ、奴の居所は！？」

オルバニアンが訊いた。

「チョツと待つて下さいね……二号棟に、貨物とは違う別の定期便……これは偽装でしょうね。そこにサイコ・フライヤー発着場があります。それが、おそらく奴の、脱出専用のサイコ・フライヤー発着場でしょう」

ヨデイはそう断定した。

「よしそこだ！ 突っ込むぜ！」

オルバニアンがアクセルを踏もうとしたが、

「待つて下さい、オルバニアン様。幾ら装甲の厚い車と言っても、こんな銃弾の嵐の中じゃ、車が保たないと思います」

アーチェルの指摘があつた。

それは正解だつたらう。

何しろ榴弾や、ロケットランチャーにバズーカ、はたまた対戦車ミサイルまであるのだから。

「安心しろ、アーチェル。その役目は、俺が引き受けよう」

アシユマが、盾役を買つて出た。

「アシユマさま」

アーチェルが心配そうに口を開く。

鬼虎の鯉口を切り、上のハッチから上半身を出すと、早速銃弾の雨霰に晒された。

鬼虎の念導境界面に触れた物は全て、光に変換され、雷光となつ

て、鬼虎の鯉口に吸い込まれて行く。

「よし、行ってくれ」

アシユマの号令で、装甲兵員輸送車は、銃撃戦のと真ん中を走り出した。

早速、獲物が来たと、皆、輸送車目掛けて、ロケットランチャーだの対戦車ミサイルだのを、撃ってくる。

これらは全て鬼虎の念導境界面で鬼虎のエネルギーとして吸収されて行った。

大抵銃撃戦は、念を持たない兵共の戦闘様式であって、念能力を持つ白兵戦の花形、念者、即ち剣士や騎士、侍、といった者には適わなかった。

しかし、中には例外もあって、勿論余程の強念者じゃない限り、対戦車ミサイル等には適わないし、中には稀だがオルバニアンのように、念者が対魔導機兵ライフルで攻撃する事もあった。

が、大概是念を持つ者は、魔導石を持ち、『騎士』であったり、『サムライ』であったりして、未だ戦いの花形である事には、変わりが無かった。

勿論『似非念者』も入る。

大量のmanaカードを仕込むのだ。

こうして戦闘の花形に躍り出るのだ。

では鬼虎とは一体なんなのか？

ただの魔導石代わりとは到底言えない。

絶対無敵の硬度を持ち、敵の攻撃を吸収して、時には鬼虎のエネルギーとして攻撃手段に変換する。

主人であるアシユマの、生命を蘇らせた事もあった。

この世界には、鬼虎の用な能力を持つ刀等、二振りとして存在しなかった。

今の所は……。

鬼虎とは、一体なんなのであろう？

「突っ込むぞお!!」

オルバニアンは、堂々と、正面玄関から乗り込んだ。

中では銃弾と砲弾が飛び交い、未だ戦いが続いている事が証明された。

だが、それも段々秩序の取れた物に、取って代わられつつあった。即ち、一方が他方において、優位になりつつある、と言う事だった。

ナラスティが、サイコ・フライヤーで現れた。

「現在の状況は？」

搭乗口から下りてきた、ナラスティは訊いた。

「ほぼ制圧しました」

配下の者が述べた。

「そうか。国王陛下は？」

続いてナラスティが、訊いた所、

「不信な外国人に、連れて行かれました」

そう、答えた。

「不信な外国人だと？ …… アシユマめ……」

最後の方は呟きに近かった。

「は？ 今、何と？」

「貴様には関係ない！」

ナラスティは、苛つきながら言い放った。

「ははっ。申し訳御座いません」

「いずれ、国際警察が嗅ぎつけるだろうが、後腐れの無い様に、工場もアゾビングも消せ！」

ナラスティは、非情な命を下した。

「はい」

そう言って配下の者は消えた。

「ナラスティ様」

そこには、ハルナ・ナリスがいた。

「なんだ、ハルナ」

「はい。この機会に、アシュマやノナを、消しておいた方が無難かと」

ハルナは進言した。

「うむ任せる」

ナラスティは許可をした。

「では……」

ハルナは何処かへ行つて、姿を晦ましてしまった。

装甲兵員輸送車は、タイヤを軋ませながら、首相官邸の階段を登つていった。

途中まで登つて、折り返しの所で、止まってしまった。

「ここから先は、体力勝負です。みなさん、頑張つて下さい。では行きますよ」

ヨディが仕切った。

アシュマは、アーチエルを片手抱きにして、どんどん上へ登つて行く。

一番最初にへばつたのは、ヨディだった。

「ほうら！ ヨディ、しゃっきりしないと、置いて行くわよ」

エファールに注意された。

「そんな事言つてもね、えっと、ほら僕、王様タイプだから、指揮者は黙つて、後から……」

ヨディはなにやらとぼけた事を言つて言い訳にしようとした。

「何、馬鹿な事言つてるの？ ホントに置いてくわよ？ ルーラン陛下だって、平気な顔してるのに、笑われるわよ？」

ヨディはまた、エファールに、叱られた。

アシュマは守る兵を打ち据えながら、階段を上つて行った。

アーチエルは当然今は、アシュマから降りている。

ルーランはアーチエルの側にいた。

「私も体作り、本気で考えましようかしら？」

アーチエルは言った。

「どうして？」

アシュマは敵兵を、捌きながら訊いた。

「アシュマさまの、足手まといには、なりたくありませんもの」

等と、アーチエルは、可愛い事を言った。

「そんな事は、考えなくて良いのに」

「この話は、いずれ改めて、お話しますね？」

「俺が覚えていたらな」

「それではアシュマさまは、忘れてしまいまする！」

アーチエルがむくれた。

そうこう言っている内に、アシュマは幾人かを、打ち据えていた。

アゾビングは、サイコ・フライヤー発着場に、着いていた。

「よくぞご無事で」

配下の者が言った。

八人の親衛隊も、ボロボロになって、たどり着いていた。

「こんな時の為の、影の者達ではなかったのか？ どこへ行ったのか？ 奴らは？」

この期に及んでも、アゾビングは愚痴を、言う始末だった。

「大体ナラステイが……」

呪詛の様に、憎い男の名を呼んだ。

「早く船に乗りませんと、追っ手に追いつかれてしまいます」

「分かっておる！！」

アゾビングは、癪癪を爆発させた。

「ナラステイじゃ！ おのれ、ナラステイめ！ よくもワシをコケにしおったな！ 全てはあのナラステイが悪いのじゃ！！」

アゾビングは怒りの感情を、そのまま剥き出しにしていた。

「アゾビング！」

アシユマの声がした。

「！」

アゾビングが、その声に驚き振り向いた。

「だからこの様な時の為の、影の者達ではなかったのか!？」

未だに、そう言っている始末だ。

「アゾビング様。こちらへ」

配下の者に案内された。

「分かつておる！ お前達、食い止めよ！」

アゾビングは、ボロボロだった供の者を、再び戦わせようとしていた。

「ぬっ!!」

驚きをアシユマは示した。

ボロボロとはいえ、この様な手勢を擁していようとは。

「ええい、面倒な！」

アシユマは鬼虎に気を集めたした。

鬼虎は仄かに燐光を放ち、刀身に光の球を纏わせた。

『蚩』である。

「せいっ！」

気合とともに、光の球を相手にぶつけた。

気の膨らませ方をセーブしたので、殺傷までには、至らない筈である。

アシユマは、倒れている兵を一気に飛び越えて、アゾビングを追い詰めようとした。

倒れた、アゾビングの手勢は、アシユマを追いかけてようとしたが、そこへヨディやビッシュ達が到着した。

「アシユマ！ 雑魚は任せろ！」

ビッシュが叫ぶ。

「頼む！」

アシユマは一気に間を詰めた。

「待てッ！」

アシユマは、アゾビングの頭を掴んで、引っ張った。

アゾビングは、見事に後に転がって尻餅をついた。

「終わりだ。アゾビング」

アシユマは鬼虎の切っ先を、アゾビングの鼻っ面に突きつけ、言った。

皆が、

「アシユマ！」

と、呼びながら、集まってくる。

ネルゼイが、

「アゾビング。いずれ、麻薬の密造、流通販売、不法所持、またノリトレア王国国王暗殺の計画、国内騒乱等の容疑で、逮捕されると思え！ 今は公務執行妨害で、身柄を拘束してやる。さあ、手をだせ」

ネルゼイが手錠を片手に、アゾビングに言っていた。

「くくく……くそッ！ おのれーッ！」

周りの人間が驚く程の大音声で、アゾビングは叫んだ。

「ナラスティの犬共め！ そんなにワシの首が欲しいか？ 奴とて同じ穴の貉ぞ！ 麻薬とてそうじゃ。今までは二人でやっていたが、奴め、利益を独占しようとして、ワシを追いつ落として……」

アゾビングは、ここでも呪詛の様に、ナラスティへの怒りを頭あたまにしていた

「てめえ、この期に及んでまだ……」

オルバニアンが言った。

「おぬし、あの女はどうした？ あれはナラスティの女ぞ。あの女は奴の弱点じゃ」

アゾビングはオルバニアンに謎かけをした。

「あの女？ ……ノナかつ！ ノナの事なのかつー！」

オルバニアンは、厳しく問い質した。

「けけけえっ！ 自分で考えるんじゃない……ワシも、もうおしまいじゃ」

アゾビングは自分の最期を予告した。

その時「カチッ」と、音がした。

ナラスティが、手に持っていた、スイッチを入れたのだ。

「何の音？」

フィナが訝しがった。

「しかしワシ一人では死なんぞ！ 貴様らも道連れじゃ……ナラスティもな！」

アゾビングは皆を道連れにするつもりだった。

「いかん！ みんな、逃げるんだ……！」

ビッシュが叫んだ。

建物中が、不気味な低い唸り声を上げて揺れ始めた。

「あーっはっはっはっはっ……！ はっはっはっはっはっ

っ！」

アゾビングが笑っていた。

最早、狂気の笑いだった。

「いかん、脱出だ」

アシュマが言った。

「城を崩す気だ……！」

ヨディも言う。

「アゾビングは……！」

オルバニアンが訊いた。

「そんなの無視無視」

ヨディが答えた。

城は大きく揺れ、シャンデリア等が崩れ始めた。

アシュマはアーチエルを抱き上げた。

アーチエルは素直に抱き上げられた。

そしてアシュマは、もう一人、抱き上げようとしていた。

「陛下、御免！」

アシュマは、ルーランを抱き上げた。

「きゃっ！」

ルーランは女子おなこの様な悲鳴を上げた。

「軽いですね、陛下」

（これはもしや？）

アーチエルは、その時のルーランの反応や仕草から、ある事を思いついた。

しかし、今は、それを追及する時ではない。

アシュマに抱かれながら、城を脱出して行った。

依然、城内の揺れは、激しくなるばかりで、思う様に前へ進む事が、難しくなってきた。

壁にかけてある絵は皆、揺れて落ち、彫像等も揺れて倒れて崩れた。

天井や、壁の崩落等も、激しくなってきた。

床にもひびが入り、所々では完全に崩壊して、床としての機能を、なしていない所も有った。

アシュマ達は一階にたどり着き、崩れ落ちてくる天井に気をつけながら、出口へと向かった。

何とか、やっとの事で、外に出て来たは良いが、外でも庭園やそれらを繋ぐ道等が崩落を始めていて、アシュマ達が脱出すべき、コンコースから伸びる道等も、崩落が酷かった。

「皆、急げ！！」

アシュマが叫んでいた。

走りながら、後の道がどんどんと、崩落していった。

その時アシュマに声が掛かった。

「待て！ アシュマ・アトー！」

声の主はアステルの隊のハーミティーだった。

「お前は、ハーミティー。生きていたのか……」

「最後の挑戦よ！ アシュマ・アトー、勝負！」

「今はそれどころでは無い！ 見ろ！ 全てが崩落しかかっている

！ 下手をすれば命を落としかねん！」

「そんな事は知ったことでは無い！ アステル隊長の仇……」

「アステルはお前の何なのだ？」

「最愛の人よ！ それをお前は私から奪った！」

「アーチエル、降りてルーランを頼む」

「アシュマさま！」

「女の情念は恐ろしいものよ。此处で断ち切らねば、後に累が及ぶ」

「アシュマさま！ 殺しては駄目」

「なるべくそうしては見るがな……」

「アシュマ！ 勝負よ！」

ハミティーが叫ぶ。

彼女はマナカードのセットを一ダース用意してきた。

「いけ！ はやく！」

アシュマがアーチエルに叫ぶ。

「……分かりました。アシュマさま、ご無事で！ 陛下、こちらへ！」

アーチエルとルーランは道を急いだ。

「やっと二人きりになれたな」

ハミティーが言う。

「逃げる。巻き込まれるぞ」

アシュマが言う。

「かまうものか！ 行くぞ！」

そしてハミティーが呪文を唱える。

『汝ら聖なる創造主に仕える者よ

汝ら敢えて苦難を求むる者よ

汝らの苦難は茨の道程

汝らの苦難は栄光への道筋

永久の闇に一条の光を放て

汝の敵を撃て……』

ハミティーはトリガーキーとなる最後の言葉を飲み込んだ。

ハーミティーの手に光の弓が形どられる。

マナカードーダースが全て焼ききれる。

（物凄い念の総量だ……）

アシュマは鬼虎の鯉口を切った。

「これはな、『禁呪』と言って、今までの呪文とは威力が桁違いなのさ。これでお前を葬り去る！」

「ちっ！」

アシュマが舌打ちをする。

『マジックアロー！』

ハーミティーはトリガーキーを口にし、矢を放った。

光の矢がアシュマに迫る。

アシュマは抜き打ちでマジックアローの矢を弾いた。

アシュマの右腕が痺れる。

（これほどまでの威力か！）

「そんな……命を賭けた、マジックアローでさえ効かぬとは……」

ハーミティーはその場に崩れ落ちた。

「？」

アシュマはハーミティーに近付いた。

何の気配もしない。

首に手を当てる。

「死んでる……」

ハーミティーは念の総量を全て使いきったのだ。

念は所謂生命エネルギー。

それを使い切ればどうなるか。

結果は簡単。

死が待つのみ。

上から物が降ってくる。

アシュマの念導境界面に阻まれる。

「いかん！ 急がねば」

アシュマは道を走り始めた。

皆、何とか首相官邸の敷地内からの、脱出に成功していた。
アシュマも追いついた。

「ふう」

一息ついたのは、オルバニアンだった。

「悪業の報いで崩れて行くのね」

アーチエルは独り呟いた。

「しかし、ヨデイ。何だ？ 麻薬って？ 俺は初耳だぞ？」
アシュマが訊いた。

「ふふふ。そうさ、仕上りはこれからだからね」

ヨデイが言った。

第六節 バヴェル対アシュマ・アトー

夜。

銀龍号。

キツチン付近にて。

フィナがこれまでに調べた事を皆に言っ
て聞かせていた。

「そうね……ナラステイ、やっぱ、怪しいわ。大体、ここまでの地位にのし上ってくるのに、かなり際どい手も使ってる。勿論証拠は掴ませないで……だから早くしないと麻薬……。だから早く手を、打たないとお!!」

「このっ！ 僕を取るなっ!!」

ヨデイが叫ぶ。

「うっせーなあ!! 早いモンがちだろうが!! あ、アシュマ!

何、一人で、でけえの取ってんだよ!!」

オルバニアンがフォークとナイフを振り回している。

「早い者勝ちだ」

アシュマが肉を頬張る。

「ちよっと! アタシの分取らないでよねえ!!」

アルミナが文句を言う。

銀龍内での、『いつもの』食事風景だった。ヨデイとオルバニアンが主にもめて、そこにアルミナが加わって、アシュマが横から、掻っ攫うという構図だ。

一番得するのは、決まってアシュマだった。

人はそれを、漁夫の利といった。

アーチエルはその間を何とか掻き分けて、給仕して行くと言う構図だった。

「イライライライラ……」

「おっとすまねえ、それ取ってくれ」

「ちよっと、僕の前を横切らないでくれ……あ、アシュマ君またそ

んな大物を」

「腹に収まってしまえば問題ない」

「ちよつと、アタシの分は!？」

「ちよつと!!! 私の話聞いているのっ!?! これでも一生懸命調べたのよ!!!」

フィナが『切れ』た。

「はっ! はいいいいっ」

「ご、ご免なさい!」

その様子に、鬼を見たか修羅を見たか、ヨディとオルバニアンが謝った。

「そうです。皆さん、これではいけません」

ルーランが言い出した。

「な、何がでしょう、陛下?」

アーチエルが、辛うじて訊いていた。

「まず、アーチエル王女、貴方がいけません」

ルーランが、まずアーチエルを窘めた。

「わ、わたくしで御座いますか?」

アーチエルは驚いた。

まさか自分に、非難の矛先が来ようとは、夢にも思わなかったからである。

「貴方のような高貴な御方が、給仕をするというのが、間違ってます」

アーチエルにとっては、意外な事を言われた。

「そ、そんな事、言われまして」

(アシユマさまが喜んでいただけなら……)

アーチエルは、アシユマの方をちらりと覗いた。

アシユマは口をもぐもぐさせながら、無表情な目でルーランを見ていた。

「それになんですか、この食事風景は。もっと食事と言う物は、エレガントにゆつたりと歓談しながら、すべき物です。それなのに、

オルバニアン殿！！」

ルーランが名指しで、何かを言おうとしていた。

「は、はい！？」

オルバニアンは、まるで先生に注意される初等学級の生徒の様に、起立した。

「貴方は王族なので、もつとマナーに則った食事と言う物を、しなければいけません」

ルーランは、先生の様に言った。

「あ、あのルーラン陛下？」

エファールが尋ねた。

「何でしょう？ ミス・エファール」

「^{ははが}憚りながら、ルーラン陛下のお立場で、オルバニアンを王族扱いにいたして、宜しい物なのでしょうか？」

エファールは、矛盾した事について、問い質した。

「ああ、ミス・エファール。有難う。そこに思い至りませんでした。だからと言ってオルバニアン殿！！」

ルーランの矛先は、依然としてオルバニアンにあった。

「は、はい？」

オルバニアンはまた硬くなった。

「もう少し美しい食事の仕方と言う物を、学びましょう。他の人もそうですよ、特にヨディ殿！」

ルーランの標的は、オルバニアンからヨディへと、代わった。

「は？ 今度は僕ですか？」

ヨディは、

『参った』

と、言う表情をした。

「貴方には素質があります。どこか気品と言う物が見え隠れしています。もう少し、食事の仕方と言う物を、学びましょう。良いですね？」

まるで講師の如くルーランは振舞った。

「はい。畏まりました」

「宜しい」

「最後にミス・アルミナと……アシュマ様、お二人も気をつけて」
「はい」

「分かった」

アルミナに関して言えば、殊勝にも素直な返事をしていた。

問題なのはこの男、アシュマ・アトーである。

仮にも一国の、それも王の前で、

「分かった」

で、済ましてしまうその神経の凶太さ、いや、それを通り越して、
無神経振りにである。

「へーかー!!」

「何でしょう？ オルバニアン殿？」

「二人の処置が甘すぎると思います。特にアシュマ。なぜ、へーかはアシュマに『様』付けなんですかあ」

オルバニアンは、さっきの仕返しに、思いきり突っ込んだ。

「う……………」

返答に困るルーラン。

「それにさっき俺達は『はい』とか『畏まりました』で、許されたのに、なんでアシュマは『分かった』で許すんですかー？」

オルバニアンは畳み込んだ。

「オルバニアン」

エファールが小声で窘めた。

「そんな事より、麻薬の話はどうなったんだ？」

アシュマが訊いてきた。

「もういや、この人達と一緒に食事するの。ネルゼイさん、どうぞ
フィナが、ネルゼイに、バトンを渡した。

「やっぱり俺の友人、ハリイの言った事に間違いはなかったな。ナ
ラステイが本星だ」

最初に、ネルゼイは切り込んだ。

「で、艦隊の出動要請はヨ？」

オルバニアンが訊いた。

「駄目だ。話しにならない。それ以前の問題だ。証拠能力がねえってよ。あの部長取り上げてくれん。アゾビングの線からも、ナラスティを責めようとしたが、『被疑者行方不明』のまま国王暗殺に關してだけ、送検だと。いざこれから攻めますよって時に、あのイルドラごと籠城なんかされてみる、眼も当てられんよーな事にだってなる。実際、今、牢人をゴマンと、抱え込んでるって言う話じゃねえか」

ネルゼイは身振り手振りを加えて言った。

「おー、やだねえ。さむさむ。チョツと本部長とやらには、探りを入れておきますか。で、それよりノナ・イルマの行方、分かりましたか？ 王女様」

ヨデイが言った

「じゃーん！ へーん！」

アーチエルが、何かを取り出して見せた。

「何だそれ？」

と、オルバニアン。

「ノナ・イルマさんのライブ・チケットなのです」

アーチエルが応える。

「それ、いつ？」

アルミナが訊く。

「今日、これからよ」

そのライブ会場は、五万人超の規模が有り、イルドラでも有数の、多目的ホールだった。

今はライブ用に舞台がせり出し、脇には巨大なスピーカーが設置してあった。

バックバンドもドラムス、ベース、キーボード、ギター、それに

バックコーラスと充実していた。

勿論、ノナはその中心である、ボーカルを担当していた。

曲目が変わるたび、歓声が沸き起こり、楽曲と、ボーカルの声とあいまって、一瞬、相手の声が聞こえない程の、音量になった。

「すごい人気だな……付いて行けません」

あまりの大音量に辟易したのはヨディだった。

「あのノナさんが、こんなになるのね」

その豹変振りに、驚かされたのは、エファールだった。

アルミナは、こう言うものには割りと順応性が高く、直ぐにノリ始めた。

オルバニアンは、舞台上の歌姫に、釘付けだった。

アーチエルは心配そうに、舞台の方を見つめていた。

アシュマは、やたら反対側を気にしていた。

「危ないな……」

アシュマがオルバニアンに、声をかけた。

「あ？ 何が？」

オルバニアンは、今ひとつ飲み込めない様子だ。

「狙撃のいい的だ。側に付いていてやれ」

アシュマが心配する。

「な、何言ってるんだい、勝手にいける訳、ねーじゃねーか」

オルバニアンは照れくさそうに、理由をつけて行こうとはしなかった。

「行つてやれ、彼女が危ないんだぞ」

アシュマが目を据えて話した。

「……………」

オルバニアンは、真剣な顔つきになり、

「行ってくる」

一言残し、舞台袖へと向かった。

「さて、俺も行くか」

アシュマは、一人何処かへ行こうとした。

「どこ行くの？ アシユマ君？」

ヨデイが、アシユマの行き先を、聞いてきた。

「ノナが狙撃されない様に、見回ってくる」

「そう。僕も行こうか？」

「出来れば」

その頃暗殺者は、狩られる者をスコープ越しに、狡猾そうなその瞳で捕えていた。

その者はナラスティの秘書官、ハルナ・ナリスだった。

BOX席からライフルを構え、狙いをつけて、いつでも発射出来る体制にしていた。

「ナラスティ様の愛を、一身に受けた女……許せない」

彼女はそう言って、トリガーを引いた。

タン！

と、言う音と共に、銃弾が発射された。

銃弾は見事、ノナの胸を貫通した。

「オ……オルバニアン……」

ノナは倒れこみながら、オルバニアンの名を呼んだ。

舞台上には、歌声が途切れ、マイクスタンドにすがり付き、倒れこんだノナがいた。

オルバニアンは、その一連の光景が、スローモーションの映像を見ている様な、まるで現実味の無い物の様に見えた。

「！」

アシユマとヨデイは驚き、急いで撃った場所を捜した。

観客は最初、何かの演出かと思い、一瞬盛り上がったが、バンド連中も異変に気付き、演奏を中止していた。

観客は騒ぎ始めたが、まだ出口へ向けて突進していない分だけ、ましといえた。

「どけっ！ はなせっ！！」

オルバニアンが袖口から、ノナの所へ行こうとしていた。

「どけよ！」

「こ、困りますお客さん」

警備員に阻まれた。

「担架早く！」

担架が入ってゆくその隙を突いて、オルバニアンは中に入った。

「どけっ！……ノナッ！……ノナ！！」

オルバニアンは、ノナの側に来た。

「……オルバニア……ン」

担架の上で、ノナは血まみれの手を差し出し、オルバニアンの名を呼んだ。

オルバニアンはその手を握り締め、

「ノナ……」

彼女の名を呼んだ。

「オルバニアンごめんね、私、謝らなきゃ……」

ノナは、何かを言おうとしていた。

「良いんだ、もう何も喋るな」

オルバニアンは、ノナの身を案じ、喋らせない様にした。

だが、彼女は彼にとって、意外な事を言った。

「わたしね……ナラステイの女だったの……」

「え？」

オルバニアンは、軽い混乱を呈した。

この期に及んで、何を言うのかとも思った。

「政治家にとつて、スキャンダルは命取り。だから狙われたんだわでもね、私解ったの。私が心から愛していたのは、オルバニアン、貴方だって……。だからご免ね。オルバニアン」

そういつて、彼女は大粒の涙を、幾粒も幾粒も零していた。

「何言っているんだ。もういい。喋るな。俺は何があっても、君に生きてて欲しいんだ！！」

オルバニアンは心のままに言葉を発していた。

「じゃあ、許してくれるの？」

彼女は……ノナは……自分の罪は、許されるのかと尋ねていた。

「ああ。ああ、許すよ。だからもう喋るな……」

オルバニアンは彼女の……ノナの魂を救ってやった……。

「嬉しい……」

その言葉を最後に、ノナは瞳を閉じ、オルバニアンの手から、彼女の手がすり抜けた。

「！！ ノナッ！ ノナッ！！」

オルバニアンは、担架で運ばれて行くノナを、その場で見送りながら……、

「うおおおおおおっ！！！！」

その場で、慟哭するしかなかった。

イベント・ホールから出てきた一行は、その場でずらり一直線に並んだ。

イベント・ホール一体は、警察車両がまばらに止めてあった。ただし、警察関係者の出入りは、激しかった。

「オルバニアン」

ヨデイが声を掛けてきた。

「仇をとろう。弔い合戦だ」

ヨデイにしては珍しく熱い事を言った。

「仇討ち……」

オルバニアンが、噛み締めるように反復する。

「そうだ」

「しかしお前らだけで、どうやって戦うんだ？ 戦力不足は明らかだぞ？」

ネルゼイが言った。

「ダスト・モンキーは、イルドラのDトランスの強奪を、予告する」

ヨデイが言った。

「なっ……」

「これなら、国際警察も、黙ってらんないでしょ？」

ヨディは付け加えた。

国際警察機構の本部ビル、ネルゼイは自分のオフィスに戻って来た。

部下の一人が、オフィスに入ってきて、いきなり言った。

「警部！ 帰ってらしたんですね？」

ネルゼイは機嫌よさそうに、

「なんだ？ 何かあったのか？」

そう言った。

「また、ダスト・モンキーからの予告状です！」

部下が、報告をして来た。

「何だ？ 見せてみる。なにに？ 『イルドラにあるDトランス
いただきに参上』……そうか。オグスルムス、発進手続きだ」

ネルゼイは諸手続きをすつ飛ばして、国際警察機構の外部団体、
国際警察軍の旗艦オグスルムスの発進の手続きをしようと言うのだ。

「え？ オグスルムスですか？ 絶対無理ですよ。そんなの」

部下は、至極当然の事を言った。

オグスルムスは、国際警察軍の持つ艦艇で、超弩級戦艦である。

クラスと戦闘力だけで言えば、ノリトレアのハーティアーに引け
を取らない。

ただし、向こうが美しい流線形で、艦の形を構成しているのに比べ、
こちらは角は取れているにせよ、無骨な四角柱を基本とした形であつた。

主武装は艦首主砲四門（二百センチプラズマキャノン）、三連装
回転式副砲十二門（五十センチ電磁レールガン）、艦首ミサイル発
射管、その他砲門多数、ミサイル発射管……となっている。

「発進デッキに行くぞ。発進準備は、出来ているだろうな？」

ネルゼイは訊いた。

「そりゃあこの仕事の性質上、いつでも発進は出来ますけどね？」

部下はそう話した。

「今の週番艦長は誰だ？」

「エレイキ艦長ですが」

「エレイキか。アイツ、派手な事、好きだ物な。案外、いけるかも知れん」

「ネルゼイ警部、楽しんでませんか？」

部下は不安になった。

「よし！ 発進デッキへ行こう！」

ネルゼイは足取りも軽く、オグスルムスのデッキへと、向かった。

で、オグスルムスのブリッジは、メカむき出しのよく解らないメーターや、変わった形のメーター類が、床に壁に天井に、張り巡らされていた。

そして天井には、メインスクリーンになる巨大なモニタが、はめ込まれていた。

「……で、ダスト・モンキーをダシに、イルドラに喧嘩を売るってのか」

エレイキ艦長は訊いた。

「そういうこつた」

ネルゼイが肯定した。

「気に入った！！ 最近なかったからな、こつ言つ派手なの！！」

……よし、機関始動！ 臨界と同時に発進……」

エレイキ艦長は、発進準備に取り掛かった。

「同時に本部長とイルドラに打診！ ダスト・モンキー逮捕に向かうつてな！」

ネルゼイは息巻いて言った。

「いいんですか？ 警部。チョツと強引じゃあ……」

「ダスト・モンキーを捕える為だ。構わん。こちとら天下御免でいい！」

と、ネルゼイは決めて見せた。

ナラスティの執務室である。

相も変わらず、白一色で統一されていて、生气と言う物が、まるで感じられない。

そこへ……

「ナラスティ様大変です！」

配下の者が、ナラスティの許可も無くドアを開け、慌てて入ってきた。

「何だ騒々しい」

ナラスティが咎めた。

「国際警察機構の艦が、こちらに向かって、進行中との事です！」
配下の者が、報告をした。

「何だと？ どういう事だ？」

これには、流石のナラスティも驚いた。

「それが、ダスト・モンキーなる者を、捕える為だとか……不法侵入で撃退しますか？」

「とうぜ……」

言いかけた時、ナラスティの机にある、電腦のモニタ上に電子文書で、

『Dトランスを頂きに参上。ダスト・モンキー』

と、画面に映し出された。

それを見、怒りを感じながら、ナラスティが言う。

「当然だ！ ノリトレアに救援要請を頼め！ 無駄かも知れんが……。私も出る！ 車を用意しろ！ ダムも呼べ！ 奴はこう言う時にしか役に立たん！」

「はっ。失礼します」

ドアを閉め、配下の者は出て行った。

「Dトランスを奪うだと？ ふざけた奴め！」

忌々しげに、ナラスティは言った。

「艦長！ イルドラから戦闘艇二十一隻、巡洋艦五、駆逐艦十六、本艦に近付いて来ました」

「よおーし！ 戦闘準備！ 同時に警告を発しておけ！ ……ま、あんま関係ないだろうけどな」

エレイキ艦長は腕組みして正面を睨む。

「どうぞ」

ネルゼイの部下が、コーヒーを差し出した。

「うむ」

ネルゼイは、オグスルムスのブリッジの椅子に腰を掛けながら、何かの書類に眼を通していた。

「あの、大丈夫ですか？」

側に立っていたネルゼイの部下が案じていた。

「何が？」

ネルゼイが訊き返す。

「責任問題になりませんか？ 命令無視も、甚だしいでしょう？」
心配げに訊いてきた。

「大丈夫だ。そんなに君が気にする事じゃない」

ネルゼイが部下に対して安心させる様に言った。

「皆、用意はいいですか！？」

ヨディが、皆に聞いた。

「ああ。準備OKだぜ」

炎龍に乗り込んだ、アルミナが言った。

「オルバニアンは？」

「ああ、いつでも良いぜ。奴らを殺れるんならな」

オルバニアンも、炎龍のメインコクピットから、返信していた。

「OKだ。他には？」

「いつでもいいわ。OKよ！」
と、主砲座のエファール。

「感度良好です」

フィナが、通信席から言った。

「アーチエル様は？」

「いつにても」

半球版に手を添えて、応えた。

「みんな気合が、入ってますね。宜しい。アシュマ君は？」
「いつでも」

アシュマが、ゴンドラに手を添えて、言っていた。
では、ビッシュさん、それにアベニ、陛下をしっかりお守り下さい。

「心得た」

「畏まって御座る」

「陛下、大丈夫ですか？」

「はい、大丈夫です」

ルーランも言う。

「分かりました。では、『不本意』では有りますが？ 警察の艦と合流します」

ヨディは本当に渋々警察と合流する事を言った。

「艦長！ 入電であります」

通信士の者が、艦長の前に立った。

「読んでみな」

エレイキ艦長は促した。

「はい。『我、故アツテ貴艦ヲ援護スル者ナリ。同行ヲ許サレタシ。D・M』」

「ネルゼイ、こいつ等かい？ ダスト・モンキーってのは」

エレイキ艦長は、興味深げに訊いた。

「そしてみたいだな」

ネルゼイは返答する。

「じゃあ、こっち側で、いいんだよな？」

「そうだ。こっち側だ」

「そういう事だ。さし許すとしても、返信しておけ」

エレイキ艦長は、そう指図した。

「はい、了解であります」

「よし、戦闘ブリッジに移行！」

オグスルムスのブリッジは、通常航行用の通常ブリッジから、戦闘用の戦闘ブリッジに移行した。

「ヨディさん、向こう側から、返信が届きました。『貴艦ノ援護ニ感謝スル』だそうです」

フィナが報告した。

「よし！ 向こうさんの支持も取り付けた事だし、いつちよ、行きますか！ 砲撃戦用意！！ なお、副砲座は自動追尾とする！

炎龍は砲雷撃戦後に、発進予定の事！ 砲撃はオグスルムスと同時に開始する！ アシユマ君ゴンドラ、お願い」

ヨディは、てきぱきと指示を出した。

「了解した」

アシユマは脚フックと命綱で固定され、ゴンドラから船外へ、せり出してきた。

「艦長！ 撃つて来ました！」

「よし、向こうが先に手エ出したんだからな。慌てるなあ！ 射程はこっちの方が長いんだからな！ もっと引き付けろ！」

余程手練れの艦長なのか、少しも動ぜず引き付けた。

敵艦艇は、射程も何も無く、撃ってきた。

ただ、中には直撃コースの弾もあって、オグスルムスの念導境界面ではじいたが、艦艇の方に多少の揺れを与えた。

若く、戦闘経験の浅い乗務員等は、動揺した。

「……………艦長！」

エレイキ艦長は、目を閉じたまま沈黙を守った。

「……………」

「……………艦長！！」

「……………」

「艦長っ！！」

「……………」

エレイキ艦長は、初めて眼をくわつと見開き、叫んだ。

「よし！ 全砲門開け！！ 一斉射撃だ！！ 一隻も逃がすなあ！！」

ゴン！

と、音がして、オグスルムスの主砲の砲門が、開いた。

砲門内で加速された粒子が、収束され砲門内が明るくなり始めた。見る間に収束された、エネルギーの束が、砲より発射された。

「よし！ こつちも攻撃開始だ」

ヨデイが叫んだ。

オグスルムスのエネルギーの束が艦艇を貫く。

駆逐艦級の艦艇は轟沈、若しくは戦闘不能となり、動ける艦艇はたちまち半数以下となった。

それでも抵抗しようと、空飛ぶ魔導機兵を放出してきた。

「何だありゃ？ 魔導機兵が空を飛んでいるぞ！？」

世代が一つ二つ古いエレイキ艦長は驚いた。

「よし、オルバニアン！ 炎龍発進用意！」

ヨデイが指示を出した。

その時イルドラの反対側から出現した艦艇が、攻撃を開始してきた。

それはノリトレアの超弩級戦艦、ハーティアーだった。

ハーティアーは艦首主砲二門（四百センチプラズマキャノン）三連装回転式副砲十二門（五十五センチ電磁レールガン）、その他ミサイル発射管、砲門多数となっていた。

そしてハーティアーには隠し玉が『まだ』あった。

「通信士回線をこっちに回せ。ハーティアーと戦うとなれば、分が悪すぎる」

ネルゼイが言った。

「回しました。どうぞ」

通信士はその旨を告げた。

「そのハーティアー級の戦艦！ 何をしている！ 公務執行妨害だぞ！ あとで、国に対して、莫大な罰金が科せられても、構わないのか！？」

ネルゼイが脅しを言った。

『公務執行妨害が、聞いて呆れる。いま、国際警察機構に問い合わせた所、イルドリア、若しくはイルドラに対して、『この様な武力行使を伴う様な作戦は、行われていない』と、言うではないか？』

つまりこれは、貴君らが勝手に行った、侵略行為であるといえよう』

『ガルマインだ！』

と、オルバニアンが、スピーカー越しに言ってきた。

「国際警察機構は、どの国に関しても捜査状況を公開する事はない。それは、どの国に対しても、公正な手続きにより、捜査をするという事。つまりはこの作戦は『存在しないと言うだけの根拠は無い』という事になる。故に貴殿が行っている行為は、公務執行妨害であって、即刻中止してもらわねばならない。そもそも貴殿の船は、ノリトレアの船であって、ノリトレアがこの件に介入する事は、内政干渉に当たり、イルドリアの主権を、脅かしているのではないのか？」

ネルゼイも一歩も引かなかった。

『内政干渉と言うならば、こちらとも言わせてもらおう。そもそもイ

ルドリアは、ノリトレアの国の一部分であつて、独立国家ではない。ノリトレアが自治権を認めているだけであつて、独立を許した覚えも無い。よつて、内政干涉には当たらない筈である」

ガルマインはイルドリアは自分の国であるといつてきた。

「ならばなおの事、兵を引かれよ！ 捜査の邪魔である」

ネルゼイも、はつきり捜査の邪魔と言い切つた。

『……………』

ガルマインは沈黙を守つた。

（引くか？ 兵を……………）

ネルゼイは願つた。

（くくく……………兵を引くのはどちらかな？）

ガルマインは待つた。

「ネルゼイ警部！ 本部から連絡です！」

「そんな物、後にしろ」

ネルゼイは、鬱陶しげに言つた。

「本部長から、捜査の中止に関してです！」

部下は、重大な事を言つてきた。

「なんだとお？ チョツと貸せ……………なんですか？ 本部長いま忙しく……………」

ネルゼイは、急いていた。

『忙しくて、ではない！！ 即刻捜査を中止せんか！！ それに君には殺人罪、国内騒乱罪の疑いもある。即刻出頭せよ！！』

この部長は、身に覚えの無い事まで、言つてきた。

「殺人罪？ 俺が？」

ネルゼイにとっては、寝耳に水である。

『ちよつと、失礼しますよ』

ヨデイは勝手に、回線に割り込んできた。

『誰だね君は！ 回線に勝手に割り込んできて！！ そつか！ 君があれかね！？ ダスト・モンキーなる盗人かね？』

本部長ががなつた。

『いや、その盗人って言う言葉を、そっくりそのままお返ししますよ。本部長さん』

ヨディは、何かを言うつもりだった。

『何だと？』

本部長の声音が、高くなった。

『いやあ、色々、ナラステイ市長から、接待を、受けていますな。こちらには、画像もある。いやいや、こちらの資料には、マンション購入とありますな。部長の年収にしては、分不相応ですな。おや？ このマンション購入は、ナラステイ名義になってますな。真にもって、市民からの税金を食い物にするとは、『税金泥棒』もいいところですな。おや？ おまけもある。愛人との、Dトランスパーティーまで開いているとは、この写真を公表したら……おっと、まだありそうだ……』

ヨディは、まだまだ、言うつもりだった。

パン！

と、乾いた音が鳴り響いた。

『あらら、自分で殺っちゃったよ』

とはいえ、ヨディはあまり驚いた様子を、見せなかった。

「ヨディ！ お前なあ！」

ネルゼイが言った。

『旦那、旦那。ハーティアー』

「おお、そうだ。ナラステイには、以上の様な嫌疑も出ておる。それでも貴殿はまだ侵略行為と言うか？」

『……………』

「これ以上捜査の邪魔をするというのなら、公務執行妨害とみなし、連行しますぞ」

『………了解した。存分になされよ』

ガルマインは、退かざるを得なかった。

しかし、このダスト・モンキーなる若者油断ならん。

ガルマインはそう思った。

「エレイキ艦長、貴方の出番ですぞ」

ネルゼイはバトンをエレイキに渡した。

「うむ。待っておったぞ。残りの艦隊を蹴散らすぞ！ あと、イルドラに打電！ これより後のイルドラへの入出港を認めず。違反をした物は即刻撃破する！ 以上！」

エレイキ艦長はイルドラへ警告を発した。

するとイルドラから蜂の巣を叩いた様に魔導機兵が飛んで来た。

『ヨディ！ 外へ出られないのかっ』

オルバニアンが怒りを顕にした。

「オルバニアン、今、外は魔導機兵で一杯です。今、外に出て行ったら、敵のいい的です」

ヨディは諭した。

『かまわねえ！ 外へ出させてくれ！』

オルバニアンが願った。

『ヨディ、お願いだよ。出させてやってくれ』

アルミナまでもが、オルバニアンの出撃を願った。

「アルミナさん……」

ヨディは、胸に打たれる物があつた。

だが、艦を預かる者としては、乗組員を悪戯に、危険な目に合わせる訳には行かない。

『構わんだろう。外へ出させてやれ』

アシュマは、戦士としてのオルバニアンの情熱に、賭けてみたいと思った。

「アシュマ君、君まで……分かりました。でも気を付けて下さい。回りは敵だらけですから」

と、ヨディはそう言つて、二人の安否を気遣い、レバーを引き、外部ハッチを開けた。

『かえってやりやすい！ 発進するぜ！』

オルバニアンと、アルミナを乗せ炎龍は、闘いの空へ飛び立った。
「ヨディ殿」

ルーランが何か言いたげに、ヨディの側にやって来た。

「な、な、な、何でしょう？ 陛下」

多少の狼狽えを見せながら、ヨディは受け応えていた。

「今のハーティアーには、空中戦闘のできる魔導機兵を、五十機搭載している筈です。それを使えば、戦闘は楽になるのではないのでしょうか？」

ルーランは、ハーティアーに関する秘密を、ヨディに話した。

「陛下……そうか。今はそんな改修が行われていたのか」

ヨディは何かを独りごちた。

「？」

ルーランは少し不思議な目をしてヨディを見ていた。

「いえ、陛下。有難う御座います。しかしどうやって、ガルマインに連絡を着けるか……」

ヨディは、頭を悩ませた。

「直接私が連絡を取りましょうか？」

ルーランが言った。

「いえいえ、そんな、いや、しかし……うー」

またヨディは、頭を悩ませた。

するとルーランは……。

「ガルマインよ。聞こえるか？ ルーランである！」

「おわっ？ 陛下！？」

ルーランが、勝手に通信機を手に取り、喋り始め、ヨディが驚いた。

『ルーラン陛下だと？ ……貸せっ！ ……陛下で御座いますか？

ガルマインに御座います』

ガルマインも狼狽え気味だ。

「うむ。ガルマインか。大儀である。先日はようも余を、置いてけ堀にしてくれた。その時の礼はきつと致す故、楽しみに待っておりがよい」

「ははっ」

ガルマインは控えた。

「時にガルマイン。ハーティアーには『アシナガバチ』が常駐しておったな。あれを使え」

ルーランは命令した。

「しかし、陛下。あれは、国土防衛の為の物であって……」

ガルマインが言い淀んだ。

「正義を行う為ぞ！」

ルーランが叱咤した。

「……わかりました。所で、今どちらに？」

ガルマインが、探りを入れた。

「故あって、ヨディ・ヨフルの所におる」

ルーランは、策謀も何も考えず、素直に言った。

「陛下！」

ヨディが叫んだ。

『何ですと！？ 陛下！！ ヨディとは誰ですか？ まさかダスト・モンキーの事ではありませんまいな？ その様な者の所にいては……』

明らかにガルマインは、狼狽えていた。

「……………」

ルーランが黙った

「い、いかがしましたか、陛下？」

今度はヨディがうるたえた。

「うるさいので、切りました」

素直にルーランが言う。

「き、切った……」

一安心なのか、不安の始まりなのか、ヨディにとって疲れる数分間であつた事に、間違いは無かつた。

「あの、陛下？」

アーチエルが話し始めた。

「なんですか？ 王女？」

ルーラン王が受けた。

「出来ますならば、『正義』の名の元に、人の命を無駄に散らすのを、お控えくだされば、嬉しく存じます」

アーチエルは畏まって言った。

様々な大義名分の為に、人々が傷ついたり死ぬ事を、嫌ったからである。

「……………王女よ、そなたはいつも『そう』なのか？」

不思議そうにルーランは、訊いた。

「『そう』とは？」

今度はアーチエルが、不思議そうな顔をした。

「陛下、アーチエル様はいつも『そう』で御座います」

代わってエファールが、応えた。

「そうか……相分かった。今後、気を付ける事に致そう」

ルーランはアーチエルの前に行き、柔らかく言った。

「有難う存じます。陛下」

アーチエルもやわらかく言葉を返した。

戦艦ハーティアーから『アシナガバチ』が、飛んで行った。

それを、ブリッジで見ていたガルマインは、

（ルーランは、あそこまで覇気があったか？ それともルーランの名を騙った、他の誰かか？ では、他の誰かとは、一体誰だ？ いや、他の誰かでは、『アシナガバチ』の事は知るまい。矢張りルーランか）

と、結論付けた。

一方、オルバニアンとアルミナは、素晴らしい戦果を挙げていた。

右手にライフル、左手にロッドを持ち、空中での姿勢制御はアル

ミナがし、武器管制をオルバニアンが行った。

中々遠距離ではライフルを用いて敵を撃ち落とし、近々中距離ではロッドを用いて敵を粉碎していた。

「何？ アシナガ……何だって？」

オルバニアンが、アルミナに訊いていた。

「アシナガバチよ！ 今回味方に、付いてくれるんですって。一応

味方のコードにしておくから」

アルミナが叫んだ。

「ん！ わかった！」

オルバニアンは、言っている背後から、イルドラの魔導機兵が攻めて来た。

「ん！」

アルミナは頭頂部を中心に機体を回転させた。

同時にオルバニアンが左腕のロッドを振り回し、敵の頭を粉碎していた。

更に同時に、横方向の敵を、ライフルで撃ち落していた。

「すごい……」

アルミナは、オルバニアンの操縦センスに、驚いていた。

「オルバニアン、あんた魔導機兵乗りになりなよ。アンタだったらエースになれるって！」

アルミナは褒めた。

「そうかい？ 俺はもう十分に、エースパイロットのつもりだぜ」

言いながら、オルバニアンは背後の敵を振り向きざま、ライフルを撃って片付けた。

「それに、ノナの弔い合戦だしな」

オルバニアンは気合を入れていた。

「変な気合の入れ方だけは、しないでくれよ！ でないとこっちがやられてペアだ！」

アルミナが忠告した。

「わかってらあな！」

オルバニアンが、また一機撃墜した。

その間オグスルムスは、何度目かの主砲を斉射し、残りの艦艇を撃破した。

「よしっ！ イルドラに突入するぞ！！ ゲートに強制接舷！！
突撃準備！！ 俺も出るぞ！」

ネルゼイは息巻いた。

オグスルムスは、第十三番ゲートに接舷して、強引にロックをし、突撃隊を侵入させていった。

「よし、俺達も行くぞ！ アルミナ！」

オルバニアンが素早く言った。

二人は警察の部隊より、ナラスティのいる場所に近い所に、機体を下ろした。

「OKよ！」

アルミナも愛用の大剣を、炎龍のマウントラッチから取り外し、背に担いでオルバニアンの後に続いた。

ヨデイの銀龍は、オルバニアンの炎龍よりは幾分離れている所に、着艇した。

アシュマはいったんゴンドラ内に戻り、ヨデイ達と共に出ようとした。

「アシュマさま！」

アーチエルに引き止められた。

「何？ アーチエル」

アシュマは頬に軽くキスを受けた。

「！」

「おまじない。幸運の……」

アーチエルは少し恥かしそうにした。

「有り難い。千万の味方を得た気分だ。ビッシュ、フィナ、アベニ爺、アーチエルとルーランを頼んだぞ。アーチエル、行ってくる！」

そう言いながら、アシュマは銀龍から走って出ていった

「はい。アシュマさまもご無事で！」

アーチエルも声を大きくして、アシュマを見送った。

「……王女よ」

ルーランがアーチエルの語りかける。

「はい、陛下。何で御座いましょう？」

アーチエルが受ける。

「王女達は、不思議な間柄よのう。主が呼び捨てにされ、従者の方

が『さま』付けで呼ばれる。これで、王女の威厳は保たれるのか？」
ルーランが、不思議がつていた。

「威厳も何も……いいえ、それ以前に身分等関係ないのです。私はアシュマさまを、好いていますし、アシュマさまもわたくしを好いて下します。アーチエルはそれで十分なのです。そういえば、陛下も以前にアシュマさまを、『様』付けで呼んでましたよね？」

そう、切り替えていた。

ルーランは、逆に耳まで真っ赤にして、そっぽを向きながら……

「そ、そーであつたか？」

そう言い、アーチエルは、

「はい。陛下」

そう応えていた。

「そうだ！ あ奴め！ 今、余の事を、呼び捨てにしたぞ！」
ルーランは叫んだ。

「何？ 侵入された？」

ナラストイは車の中で訊き返していた。

「愚か者！ 私の艦隊はどうした！？」

憤怒を含みながら訊いた。

『全滅しました』

「何！？ 私の魔導機兵隊は、どうした？」

『こちらも壊滅状態です。』

「何という事だ！ ダムを出させる！ あと、イルドラにある、全Dトランスを処分しろ！ いいな！？」

ナラストイはそこまで追い詰められていた。

『はっ！』

「私は脱出する」

事、此処に至っては、と、思ったのだろう。

車の座席、ナラストイの隣には、ハルナ・ナリスが乗っていた。

アシユマ達は集結して、ナラスティの後を追っていた。

丁度、今、アシユマ達は、倉庫街の屋根の上から、下を見下ろしていた。

「ナラスティがいるぞ！」

ヨデイが見つけたようだ。

「何だと？」

アシユマが聞き返していた。

「どこだ！？」

オルバニアンが、周囲を捜す。

「その先の倉庫よ。角を右」

エファールが指摘した。

「わざわざこんな所に、公用車で来る奴いるか？」

アルミナが貶^{けな}した。

「あれか！！」

そう言ってオルバニアンは、ライフルを構えて、三斉射した。

弾は逸れて、一発も当たらなかった。

「チョツと、落ち着きなさいよ、オルバニアン」

アルミナが諫めた。

「俺のやり方に、口出しするなっ！」

オルバニアンは興奮気味に喚いた。

その間に車は、ライフルからの死角に入ってしまった。

「落ちて着けオルバニアン。お前の気持ちも分かるが、怒りに我を忘れるな」

アシユマに窘められた。

「……………済まん」

オルバニアンは、反省している様だった。

敵が出現して、オルバニアン達の方に、向かってきた。

およそ、先程の攻撃から推測して、大体の位置を掴んでやって来たに、違いない。

「敵か」

アシユマが呟いた。

「数は……およそ三十か」

アルミナが言った。

「ふふふ……楽勝だぜ!!」

オルバニアンが、何かを敵に向かって、投げた。

それは手榴弾だった。

敵兵数人が吹き飛んだ。

敵兵が散った。

それに合わせてこちらも散る。

単体での戦闘力ならば、こちらの方が上である。

皆それぞれ、敵兵を切り伏せて行く。

「この先のデツキだ!」

オルバニアンがそう叫んだ時、目の前に黒い影が立ちはだかった。

「!!!」

オルバニアンは反射的に、その黒い影の腹目掛けて、ライフルを発射していた。

だが、黒い影は、数発弾丸を受けて倒れたにも拘らず、何事もなかったかの様に立ち上がった。

「あ!？」

オルバニアンは驚いた。

「また会ったな、小僧」

黒い影が言った。

「また、アンタか。ごついの」

オルバニアンは辟易しながら言った

「ダムだ。尤ももう直ぐ死ぬ訳だから、名乗りを上げても意味は無いがな」

ダムは手に巨大な爪を装着させながらそう言った。

そしてその巨大な爪で、攻撃してきた。

オルバニアンは咄嗟にライフルを盾にし自分は後退った。

ライフルは難なく両断され、爪の第二撃が、振り下ろされ様とし

ていた。

（ヤバイー！）

オルバニアンがそう思った時、大音声に、

「まで！！」

言う声が上がった。

ダムは反射的に、振り下ろす手を止めた。

声の主はアシュマだった。

アシュマは鬼虎をだらりと右手に提げていた。

「お前達は先に行け。ここは任せろ」

アシュマが言った。

「無茶言うな、アシュマ。奴はなあ、ライフル弾も通じない、化け物なんだぞ！？」

オルバニアンがそう言った。

「俺には、この『鬼虎』がある。良いから行けッ。後で追いつく」

アシュマはアシュマで、アーヌ以上の化け物等、そうざらには居まいと踏んでいた。

「お前か？ この俺に挑もうなんて馬鹿は。何が『鬼虎がある』だ『鬼虎』なんてえ代物は……ん？ 『鬼虎』！？ ……『万人殺しの妖刀鬼虎』かッ！！ ならば貴様はアシュマ・アトーか！？」

ダムは驚いた様子だった。

「いかにも」

言いながらアシュマは、鬼虎に血振りをくれて、納刀した。

「へへへ……当代随一の剣客を殺ったとなりや、俺の名も拳がるってモンよ」

ダムは爪を構えながら間合いを詰めてきた。

オルバニアンの話では、ダムの体は、相当に硬いらしい。

ならば、あれを使ってみようと思っていた。

それはアーヌとの戦いの中で身に付けた、鬼虎の白銀色に輝く光の刃。

それを、居合いにして相手を切り裂く技。

アシユマはそれを、

『真・閃光一刀』

と、密かに命名していた。

アシユマは腰を落とし、居合いで、相手を斬る構えを見せていた。

「居合いか……面倒な」

ダムがそう言っている間にも、生死の間仕切りは、今にも切られようとしていた。

「真・閃光一刀！」

アシユマは叫んだ。

ダムがアシユマの右手から、振り下ろしてきた。

アシユマはそれを掻い潜りつつ、鬼虎を鞘走らせて、存分に相手の腹を撫で斬った。

掌に、相手の骨肉を断つ感触を感じた。

アシユマはそのまま数歩走りぬけ、こちらにくると反転した。

ダムはこちらを向こうと上半身を捻ったが、上手く行かず、上半身と下半身は見事に真つ二つに分かれて、屋根の上に転がった。

やがてダムは痙攣し、息絶えてしまった。

『そこまでの。動くな、国際警察機構だ！』

ネルゼイが拡声器を使って、犯罪組織に向かって威嚇した。

軍港のデッキ前だった。

『全員そのまま動くな！ 下手な抵抗はするなよ』

ネルゼイは念を押した。

「クソッ！」

ナラスティが、その場から逃げ出した。

配下の者が、マシンガンを発射しながら、相手を牽制する。

『包囲！ 取り押さえる』

ネルゼイが命令を下した。

マシンガンを乱射して、ナラスティを逃がした配下の者は、すぐ

さま取り押さえられた。

が、それが、引き金となって、あちこちで剣戟の音が聞こえてきた。

それはヨデイ達にも波及していた。

「しょうがない！ オルバニアン、君、ナラスティを追いなさい！」

ヨデイは相手の剣を受け止めながら、言っていた。

「え！？」

オルバニアンは一瞬、きよとした。

「早く！ でないと逃げられてしまいます！ 援護します！ 真っ直ぐ行って下さい！ ナラスティ専用の通路が、ある筈です！」

ヨデイが言った。

オルバニアンは、

「よ、よし……後の事は、頼むわ」

言って後は、一目散に走った。

「気をつけて！」

ヨデイは、オルバニアンを見送った。

ナラスティと、ハルナが走っていた。

「ナラスティ様？ これからどうするのです？」

ハルナは訊いた。

「金もある。人脈もある。力もある。何を恐れる？ イルドラ等、ステップの一つに過ぎん。恐れるな。次がある」

ナラスティはうそぶいた。

「てめえにやあ、次も無ければ明日もねえ！ たった今、ここでブツ殺してやるっ！！」

と、オルバニアンが啖呵たんかを切っていた

「なに？」

ナラスティが、オルバニアンを睨んだ。

「てめえ専用の通路なんか作ったのが、命取りだったな。おかげで、動きが手に取る様に分かったぜ。人を見下すから、油断するんだよ！！」

オルバニアンが断じた。

「果たしてそうかな？」

次の瞬間、半円形のガラス球が、ナラスティ達を取り込んだ。

「しまった！！」

オルバニアンは半円形のガラス球の所まで寄っていった。

「油断があつたのは、君の方ではなかったかね？ 殺すなら、口上等述せずに、さっさとやれば良かったんだよ。違うかね？」

ナラスティはそう指摘した。

「くそっ！ くそ！ くそっ！！」

「ではさらばだ。崩れ行くイルドラと、運命を共にするがよい」

そう言つて、ナラスティは、床ごと下部構造へと消えていった。

次の瞬間、イルドラから異様な振動と、地鳴りの様な不気味な音が、発せられた。

イルドラのいたる所で、物が崩れ、割れ、ひしゃげた。

イルドラは崩れてしまうのか？

「くそっ！」

オルバニアンは悪態をつきながら、来た道を走って戻っていった。先程の乱闘現場では、オグスルムスに、我先にと犯罪者が乗っていった。

オルバニアンは、炎龍が置いてある場所へ、一目散に走っていった。

その間に揺れが酷くなる一方だ。

上の構造物から下の構造物へ、物がバラバラと落ちてきた。

かと思つと、床は大きくうねり、波打ち、走る事も、ままならなくなってきた。

オルバニアンは、立っている事すらままならず、動く事すら出来なくなっていた。

（もう駄目か！）

そう思つた時、炎龍が現れた。

『そんなところで、ばおつと、尻餅ついてんじゃないよ！』

アルミナが、救援に来てくれたのだ。

「済まん！ アルミナ！」

そう言いながら、オルバニアンが、コクピットに収まる。

『メインパイロットがいないんじゃない、話にならないからね』

アルミナが笑ってみせる。

最もその笑い顔は、モニター越しで見られないが。

「爺！ 銀龍をこちらへ！ みんなで脱出します！ 皆さんこちらへ！」

ヨデイが叫ぶ。

『心得たで御座る』

アベニが言葉を返す。

外に出ていた銀龍の戦闘要員も、ヨデイの近くへ寄る。

直ぐにヨデイの下に、銀龍号が降り立ち、ヨデイ達を飲み込んで行く。

そして飛び立つ。

イルドラはなおも振動が続き、構造物や、ビルディング、電柱に電灯と様々な物が、折れて、曲がって、横倒しになっていた。

イルドラを走るハイウェイも、横倒しになっていた。

あちらこちらから、火の手が上がった。

イルドラは、このまま崩れてしまうのか？

皆がそう思った時、イルドラの一部分が、剥がれ崩れるかに見えたその時、『それ』はイルドラから分離され上昇していった。

今までの『イルドラであった部分』を、剥ぎ落し出てきた姿は、

「あれは！？」

と、オルバニアンを言わしめ、

「まさか」

と、ヨディを言わしめ、

「なに!？」

と、アシユマが叫び、

「こんな所にもう一つあったとは……」

と、ガルマインを言わしめ、

「い、嫌……いやあっ!！」

と、アーチエルを絶叫させたそれは、神話の時代に出てくる破壊の権化、バヴェルだった!

『はっはっはっはっはっはっはっ!！」

笑い声が空を伝って響いてきた。

空間にナラスティの顔が映し出される。

『哀れで矮小な生き物どもよ。これより我が神託を汝らに下す!

汝らには、あまねく死を言い渡す。感謝するがよいぞ。ひやははははっ!！」

オルバニアンは責めあぐねた。

相手が巨大だ。

このままでは、どうしようもない。

オルバニアンは、

「アルミナ! 一旦、銀龍に戻ろう」

そう言うしかなかった。

「分かった」

アルミナも応じた。

炎龍は、銀龍へと帰還した。

「艦首反転! 艦首の照準を、バヴェルの上部につける!」

ガルマインが、ハーティアー全艦に号令をかける。

「魔導砲発射用意!！」

ガルマインが号令した。

艦内が動揺する。

「狼狽えるな! たかがバヴェルのダミー如きで! 本物はあれより数十倍は大きいぞ! ハーティアーと比べてみる! 全長ではこ

こちらの二倍強でしかない！」

乗組員が落ち着きを取り戻した。

「魔導砲発射用意——！」

ガルマインが再度号令した。

乗組員全員が、蜂の巣を突付いた様な、騒ぎになった。

「念導境界面が、形成しきる前に、勝負をつけてやる」

ガルマインは呟いた。

「艦体、左右に開け！」

「艦体、左右に開きます！」

「砲身、前部に押し出せ！」

「砲身、前部に押し出します」

すると、ハーティアーから、巨大な砲身が現れた。

「何だ、あの巨大な砲身は！？」

エレイキ艦長は、驚いて言った。

何せ、砲の長さが、艦とほぼ同じ長さ。

砲口径に至っては見た所十二メートルは、有りそうな代物だった。

「なんてモン作りやがる」

ヨディが呆れた。

「あのような物を作っている等、余も知らなかった」
ルーラン王も驚いていた。

「全艦の動力を魔導砲へ繋げ！」

「全念導士、蓄念に入ります」

「薬室内、多気音粒子圧力上昇中！」

「エネルギー充填三十パーセント」

「ヨディ」

アシュマが言った。

「どうしました？」

ヨディが問うた。

「俺をバヴェルの上へ、連れて行ってくれ」

アシュマが応えた。

「駄目よ！ そんな危険な事させられないわ！ 絶対駄目！」

アーチエルが、横から割り込んできて、アシュマを止めた。

大体アシュマの考えている事が、読めたからである。

「アーチエル。そういう訳にも行かん。鬼虎が震えているんだ。さつきから」

見ると、確かに鬼虎は細かい振動をしていて、ブーン、と、音を発していた。

「鬼虎がどうなっても、アシュマさま……あなたは駄目。行つては駄目！ 絶対に！」

アーチエルは何が何でも、アシュマを止めようと思った。

数少ない、バヴェルの当事者である。

止めようとするのも、当然と言えた。

「そうだ！ アシュマ、行くな！ あんたがいなくなっちゃったら、俺はどうしたら良いんだよ？」

オルバニアンですら、アシュマを止めようとした。

「そんな子供みたいな事を言うな、オルバニアン。……そうか、仇が討てなくなるな。許せよ」

アシュマはそう思い、それを口にした。

「もう、仇なんか、どうでもいいよ！」

そう。

オルバニアンにとって、もう仇等どうでも良くなっていたのだ。

「魔導砲エネルギー充填八十パーセント」

「機関正常、オールグリーン」

「内部圧力上昇中」

「バヴェルが完全に起動してしまう前に、勝負をつけなきゃならないんだよ。わかっておくれ、アーチエル」

アシュマはアーチエルを説得していた。

「そんな……アシュマさまじゃなきゃ、駄目なの？ あの大砲のお化けに任して置けば良いじゃない！」

アーチエルは、それでもアシュマをバヴェルと、戦わせたくは無いらしい。

「それで済めばいいが、多分駄目だろう」

アシュマは悲観的な見方をした。

「そんな……わたくし、わたくしの……わたくしは……アシュマさま！」

アーチエルは、もう何を話してよいのか分からず、混乱していた。
「アシュマ。アタシだってアンタに行つて欲しくないよ。相手はあんな化け物だ。とても太刀打ちできないだろうサ。だから、行かないでくれ……アシュマ……」

アルミナが、珍しく涙を流していた。

しかも大粒の。

「アシュマ、私は昔から貴方を知っているけれど、言い出したら聞かない人だったから、貴方は。だからって、無茶はしないでね。駄目だと思つたらどんな手段を講じてもいい。逃げて帰ってきたつて構わない。必ず、戻つてきて頂戴。お願い」

と、エファールまでもが声を詰まらせながら、アシュマに訴えていた。

「魔導砲エネルギー充填百二十パーセント」

「目標照準内に入ります」

「ガルマイン様、発射トリガーになります」

「うむ。全艦通知発射に入る」

ガルマインはその旨を告げた。

「はっ」

艦内に魔導砲発射を告げるサイレンが鳴った。

「発射！！」

ガルマインは発射トリガーに手をかけた。

轟音と共に煌く光の柱がバヴェルへと吸い込まれていった。

魔導砲が見事命中……した筈だった。

だが、魔導砲の念のエネルギーが、バヴェルの表面ではじかれ四散した。

弾かれたエネルギーの一部が、オグスルムスを直撃した。

幸いにも爆発は免れたらしい。

しかし、火は噴いていた。

「有難う。みんな。アーチエル。見たとおりだ。行かなくてはならん。……ヨディ、ゴンドラを上げてくれ」

アシュマは、行かねばならなくなった。

「いや！ 行かないで！」

アーチエルが、後から抱き付いてきた。

「……………」

アシュマは言葉を失った。

「お願いです。行かないで下さい……」

アーチエルが泣いていた。

アシュマを想い、人目も憚らず大粒の雫を、何滴も何滴も零していた。

アシュマは振り向いた。

アーチエルは追い縋る様な表情で、アシュマを見つめていた。

二人はごく自然な流れで、そうするのが当然の如く、口付けを交

わしていた。

まだまだ稚拙で舌を絡める事も知らない口付けだった。
アシュマは、それにあわせる。

口付けをかわした後も、アーチエルの不安は消えなかった。
いや、むしろ不安が、大きくなったといっても良い。

「アーチエル……」

「アシュマ……」

「さよなら……」

「えっ……！？」

アーチエルが聞き返す間も与えず、アシュマは自分の指で、アーチエルの眉間を突いていた。

アーチエルは、そのまま意識を失った。

そのアーチエルを、オルバニアンが支える。

「皆、後の事を頼む。ヨデイ。ゴンドラを頼む」

アシュマはゴンドラを上げる旨を伝えた。

「分かりました。期待してますよ。アシュマ君」

ヨデイがアシュマを応援した。

アシュマはゴンドラに乗り、銀龍の外へ出た。

アシュマはインカムを被りヨデイと連絡を取った。

『ヨデイ、船をバヴェルの真上に、移動させてくれ』

アシュマは頼んだ。

「あんまり、速度とか、運動性能とか、期待しないで下さいよ」

ヨデイが言った。

『何故？』

アシュマが訊いた。

「君が『エンジン』を、休眠状態にしたからでしょ？」

ヨデイはアシュマに指摘する。

『そうか、じゃあ、今、船を動かしているのは？』

当然の質問をした。

「エフアールさんですよ」

ヨデイが応えた。

「これ、つかれるわあ。アシュマ、早く何とかして頂戴！」

半分本気とも取れる冗談を、エファールが言う。

「分かった。ヨデイ、敵はどんな攻撃をしてくるか、分らん。細心の注意を払ってくれ」

アシュマは警告した。

「そう言われてもねえ……その時の為の、アシュマ君だったんだけどねえ……」

『そうだったな……俺を下ろしたら、全速力……とにかく全速力で逃げてくれ』

バヴェルの周りには『気』圧が増し、やがて黒雲を生じさせ、雷光が見られる様になってきた。

また、ナラスティの顔が、空間上に映し出された。

「もう終わりか？ つまらんなあ。そうだ、ノリトレアに行ってみよう。で、王宮を攻めてみよう。イルドリアがノリトレアの属国でなく、ノリトレアがイルドリアの属国となるのだ！ これはいい！ 非常に効率が良くなるぞ！ ははは！！」

ここまで言って、また、ナラスティは空間の闇の中へ、溶け込んでしまった。

「なんだと！？ あの若造め！！ ワシのノリトレアに、乗り込もうというのか！？ ならん！ ならんぞ！！ ハーティアーを、あのバヴェルへぶつけよ！！」

ガルマインは怒った。

「なんですと、ガルマイン様！ それは正気の沙汰では、御座いませぬぞ！」

それを聞いた艦長が言った。

「何も、ただでぶつけよとは言わぬ。全念導士をもって艦首に濃密な念導場を作り出し、突っ込むのじゃ。そこを伝って、中に突撃部隊を侵入させる！ 時は一刻を争う！ 急ぐのだ！」

ガルマインは、艦長に向かって叫んでいた。

艦長はがくがくと首を縦に振り、以下の様に全艦に通達した。

「全念導士をもって、艦首に念導場を集中させよ！ それをもってして、バヴェルに特攻、同時に内部に特殊工作員を潜入させ、内部より破壊する！」

ハーティアーの艦首に光が集まってきて、巨大なランスが出来上がろうとしていた。

「全艦特攻をかけよ！」

ガルマインが命令を下した。

「全艦特攻！」

「全艦特攻！」

ハーティアーは特攻をかけ、バヴェルへと突っ込んだ。

暫く念導境界面同士で反発していたが、やがて融合。

ハーティアーは、バヴェルの壁面に突っ込んだ。

すぐさま特殊工作員が、ハーティアーからバヴェルへと、乗り移って行った。

特殊工作員は壁面を登って行くと、頭のとがった、無数のミミズのような物が現れ、次々と工作員を襲っていった。

通信機からは、特殊工作員の悲鳴しか聞こえてこず、やがて何も聞こえてこなくなった。

「馬鹿な連中よ。姑息な事を考えおって。守りは万全なのだよ。くっ、くっ、くっ」

また空中をスクリーンに、ナラスティが現れ、ガルマインを擲掬する様に笑った。

「魔導砲発射用意！！」

ガルマインが叫んでいた。

「ガルマイン様！！ それは無茶と言う物、少し念導士を休ませなければ……」

「特攻時、艦首に使用した念の残りを使う！ 今すぐ回収できる分だけで構わん！！ 直ぐに発射準備にかかれ！！」

再び、

ゴクン！！

艦が左右に分かれ、巨大な砲口がほぼ零距离で、バヴェルに突きつけられた。

「愚かな……」

ナラスティはそう言うのと、ある情景をイメージした。

無数の光線がハーティアーを切り裂く様を。

すると、それは成った！

バヴェルの表面から、無数の光の刃が発生し、ハーティアーを切り裂いてしまった。

ガルマインは艦の爆発の直前、シートごと個人用特殊シエルターに、逃げ込んだ。

ハーティアーは次の瞬間、切り刻まれて爆発、轟沈した。

シエルターは砂地に放り出されたが、すぐさま、中からガルマインがでて来た。

ガルマインは、砂漠を一人歩きをする愚をせず、再びシエルターの中へ入り、救援が来るのを待った。

「はははは！ もうこれで、私を止める者は、いなくなったかね？」

ナラスティは言った。

その時、上空に浮かんでいる、一艘のサイコ・フライヤーがあった。

銀龍号だ。

銀龍は、バヴェルの丁度真上で、停止していた。

銀龍の舳先、つまりブリッジの端に立っているのは、アシュマだった。

目覚めたアーチエルは、ブリッジの窓をガンガン叩いていた。

アシュマは、それに振り向く気配も見せずに、跳んだ。

下へ。

虚空へ。

それを見たアーチエルは、貧血でも起こしたかの様に、倒れこんだ。

それをヨディが受け止めた。

「頼みましたよ、アシュマ君」

ヨディは、アシュマに事を託した。

念導境界面に包まれたアシュマは、ゆっくりと降下して行った。

空中でも、自由に方向転換できる事も、確かめた。

アシュマは、バヴェルの内側の空洞部分へと、降りて行こうとした。

途中、アシュマは、何とも形容しがたい抵抗感を覚えた。

それは降りて行くに従って、強さを増していった。

体が無数の針で、刺される様な痛み。

体全体を圧迫する様な、窒息感。

そう、これが、バヴェルの念導境界面であり、念導場だったのだ。だが、それも直ぐに収まった。

見ると鬼虎が激しく振動していた。

鬼虎の念導場の方が、バヴェルの物より、勝ったのだろう。

若しくはバヴェルの念導場が、鬼虎の念導場を伝い、鬼虎のエネルギー源となったのかもしれない。

アシュマが鯉口を切って、スラリと抜いてみると、これまでこれ以上に無いと言う程の、輝きを見せていた。

しかし眩しくは無い。

不思議だ。

アシュマは鬼虎を手にしたまま、下へと降りて行った。

「ん？」

ナラストイは、イメージスキャナに反応する物を、捕えた。

そのままイメージを拡大してみる。

「人か？」

ナラストイはもっと拡大してみせる。

「アシュマ・アトー！！……閃光のアシュマ殿か……か。くくく。

剣客風情に何が出来る！　だが目障りだ。殺しておくか！」

「！！！」

アシユマは殺気に似た物を感じ、辺りを警戒し始め、秘剣・万のみんすの眼まなこを使った。

すると、辺りから無数の鉄ミミズが、アシユマを狙っていた。

先ず、後からアシユマの後頭部を狙ってくる、一群の鉄ミミズがあった。

アシユマは振り向きざま鉄ミミズを斬り飛ばし、右手から来た鉄ミミズを斬り飛ばした。

そのまま前後左右から攻めて来る、鉄ミミズを斬り飛ばしていた。ミミズを暫く斬り飛ばしていると、粗方斬ったのか、ミミズは来なくなった。

（このミミズのような物が、俺の念導境界面を破って、俺を突き刺してこようとしたと言う事は、ミミズ自体に、念導境界面が有ると言う事か……。厄介な）

アシユマはそう思いながら、そのまま下に下りて行った。

アシユマは、目の前に広がっている、緑色に発光している物に注目した。

「何だ？ あれは？」

（緑色に発行する物体？ ……どこかで見た事がある……なんだ？

そうだ！ エナジアだ！！ 大量のエナジア、これが、このバヴェルのエネルギー源だ！！ これを破壊してしまえば！！）

アシユマの意識に呼応するかの如く、鬼虎は強く発光した。

「振れ……と言うのか？ お前を」

アシユマは大量のエナジアに向けて、鬼虎を横に振った。

すると無数の光の球が飛んで行き、エナジアを破壊した。

破壊した時に発生するエネルギーで、更にエナジアの誘爆を引き起こしていた。

アシユマは振り向き、光弾を発射していた。

更に破壊されるエナジア。

そして引き起こされる誘爆。

バヴェルは鬼虎のたった二回の攻撃で、大きくダメージを受けて

いた。

「な、何だ一体？」

ナラスティは、このバヴェルの異様な振動に、大きく動揺していた。

ナラスティはイメージスキャナを使い、何がおきているのか見てみた。

するとそこには、無残に破壊された、バヴェルの内側の一部が見えた。

「剣客風情が！」

ナラスティは、エナジアを活性化させた。

忽ち『気』圧が高くなり、アシュマを押し潰してこようとする。

「あがつー！」

もがき苦しむアシュマ。

その様子を見て、サディスティックな笑みを零すナラスティ。

もう少し、エナジアを活性化させれば、アシュマは潰れるだろう。その時アシュマは、光弾を下の階層のエナジアに向けて、振り飛ばした。

忽ち起こる大爆発。

その爆発は表層にまで届き、バヴェルは大きく裂けていた。

「あれをアシュマさまが……」

アーチエルが驚いていた。

「おのれ！ アシュマ・アトー！」

ナラスティは、一気にエナジアを活性化させた。

「あがつー！」

更に高まった『気』圧に、アシュマはもがき苦しむ。

そして、更に、ナラスティは、鉄ミミズをアシュマに向けて飛ばした。

アシュマはもがき苦しみながら、鉄ミミズを斬り飛ばしていたが、幾本か対応できずに左腕に一本、両足に一本ずつ、そして腹部に二本、鉄ミミズが刺さった。

苦痛にもがくアシュマを見て、ナラスティはほくそ笑んだ。

しかし苦痛にもがきながら、それらを斬り飛ばして、更に鬼虎を振り回し、光弾を飛ばした。

あちこちで起こる大爆発。

バヴェルの表層まで起こる爆発は、バヴェルの形を変え、バヴェルの力を奪い、浮力を奪った。

それは、遥か上空に待機している銀龍でも、確認できた。

「ああ、アシュマ……」

アシュマの身を案じている、アーチエルが呟いた。

「ヨディ、俺は炎龍で出る。少しでもアシュマの力になりたい！」

オルバニアンは訴えた。

「オルバニアンあたしも出るよ」

アルミナも同じくした。

「分かった。いこう！ アルミナ！ いいな？ ヨディ」

オルバニアンはその旨を告げた。

「分かりました。気をつけて下さいね」

ヨディは二人の事を案じた。

「分かった。行ってくる。お姫さん！ 必ずアシュマの奴を、連れて帰ってきてやるからな！」

オルバニアンは、アーチエルを安心させる様に言った。

「はい！ でもお二人とも、どうかお気をつけて……」

アーチエルは不安な面持ちで、オルバニアン達を送り出した。

バヴェルは未だ尚、誘爆を繰り返し、最早形を成していなかった。厄介な事に、浮力を失いつつあるといっても、完全に失われた訳ではないので、緩やかな下降であり、それがアシュマの念導境界面（念導場）の、ゆっくりとした下降と相対的にほぼ同じ速度である為、アシュマは脱出出来ずにいた。

また、アシュマは、意識を失いつつあった。

これは、念導境界面（念導場）の消失を意味しており、この場合はアシュマは、即自由落下となり、地面に激突する事を意味してい

た。

「くそっ！ 言う事を聞けッ！」

ナラスティは最早、アシュマの事に構っている暇等持たず、一生懸命にバヴェルの姿勢制御等に追われていた。

アシュマの出血は止まらず、アシュマの意識は朦朧としてきた。

失いつつある意識の中でアシュマは、

（おかしい、あの死の淵から俺を救った筈の鬼虎が、この程度の傷を再生できないなんて）

そう思っていた。

バヴェル内部のエナジアは、あちこちに散乱して残っていた。アシュマは残る力を振り絞り、残ったエナジアの掃討を始めた。

アシュマは銀色に光る鬼虎を手にし、振り始めた。

光弾が発射され、残るエナジアを破壊して行く。

爆発と誘爆が繰り返され、残るエナジアも数える程度になった。

バヴェルは最早、完全に制御を失い、落下し始めた。

アシュマは、

（これで俺の仕事も終わった……）

そう思いつつ意識を失いかけた。

その時、大音声に

『アシュマああー!!』

呼ぶ声が聞こえた。

『アシュマあ！ 今行く!! 頑張れ!!』

叫んだのは、オルバニアンだった。

炎龍は上空から、アシュマ目掛けて飛来してきた。

炎龍はマニピュレーターで、そつとアシュマを掴むと、

「アルミナ、脱出するぞ！」

オルバニアンは頼りになる相棒に告げた。

「分かったわ！」

アルミナはエンジンを全開にして、バヴェルの上部へ向かって飛び始めた。

バヴェルは落下して行き、終には地面に激突、バヴェル下部部分から爆発が起こり始めた。

「ああっ！！ アシユマさまっ！！」

アーチエルは悲鳴を上げた。

次々起こる大爆発。

最早これまでかと思ったその瞬間……。

「聞こえるか？ ヨディ！」

そう呼ぶ声がスピーカーから聞こえてきた。

「聞こえるぞ！ オルバニアン。無事か！？」

ヨディは先ず無事かどうか確認を取った

『俺は無事だ！ アシユマの救出に成功した！！』

オルバニアンの声が、無線を通して聞こえてきた

わあっ！！

と、沸き起こる歓声。

アーチエルは力が抜けたのか、顔を両手で覆い、その場にへたり込んで泣いてしまった。

『みんな、喜ぶのはまだ早い！ アシユマの出血が酷い！ アシユ

マは、意識を失っている！』

「何だって！？」

驚くヨディ。

「オルバニアン！！ それで、アシユマは大丈夫なの！？」

アーチエルがもう、いつもの『さま』付けも忘れる程混乱していた。

「少しは落ち着きなさいな、アーチエル様。アシユマなら大丈夫よ。信じてあげなさい」

エファールがアーチエルを落ち着かせた。

「でも……」

アーチエルは気が気でならない。

『分らん！ とにかく銀龍内にアシユマを搬送したいが、このままじゃ無理だ。とにかく一度、地上に降りなければならぬ！』

オルバニアンが言った。

「分かった。そうしよう」

ヨディも同意した。

オルバニアンがモニタで、どこか地上に降りられそうな所は無いか捜していると、砂漠を走って逃げて行くナラスティの姿を見つけたが、今はとてもそれ処では無かった。

破片を避けて炎龍が地上に降りた。

アルミナが直ぐに降りて、アシュマの元に駆け寄った。

見ると、アシュマの傷は思った以上に、深く大きな物だった。

オルバニアンが、アシュマをゆっくり地上に降ろし、アルミナがアシュマに膝枕をした。そしてアシュマに呼びかけた。

「アシュマ！ アシュマ！！」

既に降りている炎龍の側に、銀龍が降りた。

アーチエルは急いでハツチの方に走り寄り、早く開かないか、やきもきした。

やっとの事で扉が開くと、一目散にアシュマの方へ走って行った。

「アシュマあ！！」

アーチエルは走ってきた。

「アーチエルの姫さん、落ち着け」

オルバニアンが言った。

「！！」

アーチエルはアシュマの状態を見て絶句した。

「アシュマ……何故こんなになるまで……」

アーチエルは再び泣き出した。

「アーチエル！ 泣いてる場合じゃないだろ！ 呼びかけるんだよ

！ アシュマを何とかこちら側に！！」

アーチエルは、はっ、となつて、

「アシュマ！！ アシュマ！！」

何度も何度も呼びかけた。

そこへストレッチャーを運んできたヨディと、ビッシュがアシュ

マをそつとストレッチャーに乗せ、銀龍へと運んでいった。

オルバニアンとアルミナも炎龍に乗った。銀龍に搬入する時間も、惜しかったからである。

「ストレッチャーを固定しろ！」

ヨデイも、いつに無く言葉遣いが荒々しい。

それだけ、事態はひつ迫していた。

「ストレッチャー固定完了！ 発進する」

ヨデイが言った。

「発進するといって、どこへ行くつもりなのじゃ？」

ルーランが言った。

「陛下、それは……イルドラにでも」

「イルドラがあのような状態でもか？」

イルドラも先程の状況では、きつと今、病院と言う病院は、全て満杯であるう。

「……陛下、もし宜しければ、ノリトレアの王宮市にある、セントラル・ホスピタルをお借りしたく思います」

ヨデイは現状で考えうる最も良い選択肢を選んだ。

「ほう、そなた詳しいのう。以前王宮市で暮らした事があるのか？」
ルーランが聞いた。

「……多少……」

ヨデイが言い淀んだ。

いつも歯切れの良いヨデイにしては、珍しい事である。

「よかるう。許してつかわす。と、言うより、余がそう、勧めようとしておったのじゃ」

ルーランが許した。

「陛下、ありがたく存じます」

ヨデイが謝意を表した。

「そこな女」

ルーランがフィナを呼ぶと、

「はっ、はいっ――！」

フィナは硬くなった。

「王宮市と連絡が取れんでは、意味が無い。至急王宮市と連絡を取れ」

ルーランが横柄に言った。

そう言っても王族だ。

多少横柄に聞こえても悪気は無いのだろう。

「はっ、はい……ですが、回線が分からなければ……」

フィナは困った様子だった。

「繋がらぬと申すか」

ルーランは訊いた。

フィナは、

「はい」

としか、応えようが無かった。

「フィナさん。これで回線が繋がるから」

ヨディはフィナにメモを渡した。

「おぬしは何でも知っておるのう。本当に平民か？」

ルーランは訝しがった。

「はい、陛下。仰せの通りで御座います。ついでながら、あつかましくも私の願いを聞き入れては、くださらないでしょうか？」

ヨディは願いがある事を、ルーランに伝えた。

「何だ？ 申してみよ」

ルーランは言った。

「はっ。願わくば、イルドラへの救難措置として艦隊を組んでいただき、これをもって救護に当らせます様、平にお願い申し上げ奉ります」

ヨディが頭を下げた。

「なんと、これは余とした事が気が付かなんだ。それも早速手配いたそう。しかし重ねて言うが、そちは本当に平民の出なのか？」

ルーランは更にヨディの出自に関して訝しがった。

「はい、陛下」

ヨディが平然と言った。

「そんな状態で半球版に触っていても、気が気でなくて意味無いでしょ？ 私が代わってあげるから、アシュマの側に付いていておやりなさいな」

エファールがアーチェルの側によってきて、そう言った。

「有難うエファールさん」

アーチェルはそう言ってアシュマの下に行った。

「いいでしょ？ あれで」

エファールは、ヨディに同意を求めた。

「良いも、駄目も、もうやっちゃったんだから、しょうが無いでしょ」

ヨディは止むを得ないと言った感でそう言った。

「はあ、アタシも何で、恋敵に塩を送っているんだか」

エファールが嘆いて見せた。

「はいはい。と言って、諦めてないんでしょう？」

ヨディがカマを掛けてみた。

「さあ、どうかしら？ 私も自分がどう思ってるのか、良く分からなくなっちゃったわ」

今の正直な感想を、エファールは吐露した。

アーチェルがアシュマの下について顔を覗いてみる。
表情は穏やかで、まるで眠っている様に見える。

「アシュマさま」

アーチェルが、囁く様に言った。

「ア……チェ……ル」

アシュマが反応して応えた。

「！！ なに？ アシュマさま？」

「オ……ト……ラ」

「鬼虎？」

そういえば砂漠で寝かされていた時は、鬼虎が抜き身のままその手にあった。

今はちゃんと、鞘の中に納まっている。

多分自分の手に無いと不安なのだろうと、アーチエルは思った。

「大丈夫よ、アシユマさま。ちゃんとあるわ」

アーチエルは言った。

「オ……二……トラ」

アシユマは再び、鬼虎と呟いた。

アーチエルはやはり、自分が持っていないと不安なのかと思い、

「少し待ってて」

そう言った後、鬼虎を鞘ごと持って、そしてアシユマの手に握らせようと、アシユマの左手に触れた瞬間……！

アシユマの体は跳ね上がり、体中には電光が走りぬけ、瞬く間にアシユマの傷は再生した。

「きゃあああっ……！」

アーチエルは驚き思わず声を上げ、尻餅を搦いてしまった。

「……そんなに驚かなくても良いだろう」

アーチエルは身を起し、ストレッチャーを覗いてみた。
するとアシユマが身を起こしていた。

「アシユマさま……治ったの？」

「ああ。そうみたいだ。心配を掛けた」

「本当よ。……よかった……本当によかった……」

そう言って、両手で顔を覆い、泣いてしまった。

「心配かけて済まなかった。アーチエル。さあ、皆の所へ行こう」

アシユマはストレッチャーから降りた。

「はい。でも、ホント今日は厄日だわ。泣いてばかり。きっと鏡で見たら酷い顔だわ」

アーチエルは嘆いた。

「そんな事無いさ」

アシユマは言って、アーチエルの頬にキスをした。

「まあ、殿方は、女性はキスさえすれば、機嫌がよくなると思ってこれで全てを許した訳ではありませんからね？」

アーチエルは不機嫌な振りをした。

「じゃあ、キスしない方がよかったかい？」

アシュマが言ってみる。

「ううん、してくれた方がよかった……」

正直な所をアーチエルは言った。

「さっきの事だけど、アーチエルは最近鬼虎と何かを契約しなかったか？」

アシュマはアーチエルに訊いた。

「え、ええ……皆には、言いそびれてしまいましたけれど」

「やはり」

「アシュマさま、私、何を契約したんでしょうか？」

アーチエルは不安になった。

「再生の力……再生力だな。それがあれば例えば俺がバラバラの肉片になっても、鬼虎とアーチエルさえ顕在なら、俺はいつでも復活できる」

少し不気味な例の出し方をした。

「アシュマさま、以前私の知らない所で、一度お亡くなりになってるって、聞きましたけど、あの時はわたくし無事で、生き返られたんですよね？」

アーチエルは尤もな質問をした。

「あの時は本当に偶然だったんだ。生き返ったのはね。だから本来は第三者がいてくれると助かる。そういう意味では、鬼虎の選択は、間違ってたなかった事になる」

アシュマはそう思おうとした。

コツを掴んできたとはいえ、まだまだ制御の難しい鬼虎である。どんな能力が隠されているか、まだまだ分からない所がある。

「では私が死んでしまった場合は？」

これも尤もな質問をした。

「多分、俺がアーチエルの再生者になる」
アシュマはそう言った。

根拠は無かった。

しかしそうなる気がした。

「ねえ、アシュマさま」

アーチエルはアシュマに耳をそばだてるよう、仕草で促した。

「なんだい？ アーチエル」

アシュマは、アーチエルの身長に合わせて、腰を折った。

「お帰りなさい。私の愛しい人」

言った後、素早くアーチエルはアシュマの唇に自分の唇を重ねた。

アシュマがブリッジに着いた時、皆は目を丸くしていた。

「アシュマ君。生き返るのこれで二度目だね」

ヨディはあきれ返っていた。

「何！？ そちは、生き返るのは、これで二回目と申すか。バヴェルを倒す事といい、そちは化け物じゃな。余もまだ死にたくは無いでな。そちにだけは逆らわん事にいたそう」

アシュマはノリトレアの王ルーランをして、逆らわんと言わしめた。

「いや、王よ、そこまで化け物扱いされても」

アシュマは困った顔をした。

「でもよかったわ。生き返ってくれて」

言ってエファールはアシュマにゆっくり抱きついた。

「良かったわ。本当に、アシュマ」

続けて言ってエファールはアシュマにキスをした。舌は入れない、挨拶のキスのつもりだったが、アーチエルが、

「ア、ア、ア、アシュマさま！！……あ……」

また貧血の様に倒れ込んだ。

今回はビッシュが受け止めた。

「アシュマさんてまだフリーなんですか？」

フィナが聞いた。

「何で？」

ヨデイが聞いていた。

「だって、アシュマさん。エファールさんとも、キスしていたじゃないですか？」

フィナは大真面目に訊いていた。

「いや、一概にそれは……」

ヨデイが困って顔で頭を捻っていた。

『どうした、ヨデイ！ アシュマに何かあったのか！？』

オルバニアンがスピーカー越しに訊いてきた。

「いや、また生き返りましてね」

もうどうでもいいいや的な、ヨデイである。

『そうか！？ 生き返ったか！！ さすがゾンビ剣士！！』

オルバニアンは彼にしてみれば、素直にそう形容した。

アシュマも酷い言われ様である。

流石のアシュマも、これを聞いて、苦笑するしかなかった。

「そうだ！ オルバニアンも戻って来い！」

ヨデイは言った。

皆で、パーティーでも開きたい気分だった。

『いや、ならば行く所がある』

オルバニアンは言った。

『どこに行くのよ、オルバニアン』

アルミナが困惑した。

『さっき、ナラスティが逃げて行くのを見た』

「なに！？」

ヨデイが訊き返した。

『今からそこへ戻る』

オルバニアンが、取って返そうとした。

「衛星座標は取ってあるのか？」

ヨディは訊いた。

これがあるのと無いのでは、雲泥の差だった。

『取ってある』

「それをこちらにも、転送してくれ」

『……………転送したぞ』

「分かりました。じゃあ、これから行きますかね」

銀龍をターンさせた。

銀龍と炎龍は、座標の示すポイント付近に、やって来た。

「いないですねえ」

ヨディが言った。

「あれから三十分とたつてないんだ！ 砂漠だし、そう遠くへはいけない筈だ。よく捜せば……………」

オルバニアンは、ナラスティを捜していて、言葉が詰まった。

「いた！」

オルバニアンが言った。

「アルミナ！ あそこだ！」

「どこ？ オルバニアン？」

「あの丘の稜線だ」

「わかった！ 見つけたわー！！」

アルミナは炎龍を砂漠の一点に向かって飛ばせた。

ナラスティは焦っていた。バヴェルを失った上に、敵からも狙われて、今は命からがら逃げている。

そこへ……………。

『まちな！ ナラスティ』

オルバニアンが炎龍に乗ってやってきた。

「うつ、くそっ！！ 寄るな、下郎！！」

『デメエに殺されたノナの恨み、晴らしてやる!!』

オルバニアンは言い放った。

「何だと？ ノナは私の物だ！ 私の物をどうしようと、私の勝手だ!!」

この手の悪党がよく使う台詞をナラスティは使っていた。

『人の命を物としか見ねえ。お前だけは絶対にゆるさねえ!!』

そう言つて、オルバニアンは、ライフルを構える。

「ひっ、ひっ、ひっ、ひっ！」

『駄目よ！ オルバニアン様！ 殺しては駄目!!』

スピーカー越しにアーチエルの声が、聞こえて来る

『司法に任せるの!! ただ闇雲に殺しては、それは殺人者と変わらないわ!!』

アーチエルは必死に止めた。

『ナラスティ……お前だけは!!』

トリガーを引く指に、力が加わる。

『駄目よ!! オルバニアン様!! ノナさんだってそれを望んでいないわ!!』

『ノナ……ナラスティ！ 貴様だけは許さねえ!! 絶対に!!』

「ひいひい!!」

ナラスティが悲鳴を上げる。

『オルバニアン様!!』

アーチエルがオルバニアンを止める。

ズドン!!

と、言う音と共にライフルの弾は発射された。

『オルバニアン!!』

アーチエルが叫ぶ。

ナラスティは生きていた。ライフルの弾は股間の間を通っていた。

ナラスティは、だらしなく失禁していた。

『ノナ、君の仇が討てない！ くうっ……うおおおっ!!』

オルバニアンの慟哭が木霊する。

「終わったな……」

アシュマが呟く。

「ええ、でもスツキリしませんね」

ヨディも頷く。

それを遠くからガルマインが眺めていた。

そして一人砂漠の向こうへと去っていった。

その後、国際警察機構の大掛かりな捜査が、始まった。

が、イルドラ、イルドリア双方に、Dトランスの痕跡は一切見つからなかったとし、Dトランス関連の捜査を一時凍結、現在に至っても再開のめどは立っていない。

一部の噂では、Dトランスは大量に発見され押収。

しかし、上層部がこれを横流しし莫大な利益を得たと、噂は絶えない。

イルドリアの首相官邸崩落事故は、一部業者の手抜き工事と当日起きたマグニチュード七・五の直下型地震による物だと、結論付けた。

が、これには異論があつて、首相官邸側のスタジアムに、被害が及んでいない事が挙げられるが、これも官邸の手抜き工事による、人的被害として片付けられた。

ノリトレア王国国王暗殺の嫌疑は一部報道のやらせであり、大会当日を盛り上げる為の演出である、と結論付けられた。

ただし、ノリトレア王国国王ルーランは、大会当日にダスト・モ

ンキーなる無法集団によって拉致・誘拐されたとして、現在でも行方を追っていると言う。

有名ポップシンガーのノナ・イルマ暗殺事件は、それこそ、タブロイド誌のよくあるゴシップ記事の類とされ、ノナ・イルマ自身は、ステージ途中での心臓発作による死亡として片付けられた。

最後に、神話時代に出てくる破壊の権化『バヴェル』出現であるが、これは先日のイルドリア直下型地震の余震による物だと考えられ、一部倒壊した支柱がバヴェルであると、誤解と噂が生んだ産物と思われる。

第一、破壊の権化『バヴェル』は神話によれば、高さ八千メートル、直径四千メートルの大きさとの事。

付近住民が見た物は、高さがおよそ千メートル、直径五百メートルと大分形が異なる。

しかし一部には、国際警察機構の鑑識課がバヴェルの『破片』を集め、持ち帰る途中で、大量の破片が行方不明になったとの噂も出ている。

なお、Dトランス事件、バヴェル両事件に深く関与したと噂されるナラスティ・ナダ市政府市長は、警察での事情調書中に俄かに頓死、暗殺説もでているが当局は否定。

アゾビング、ナラスティ両首脳を失った、イルドリア、イルドラ、両自治領は自治権をノリトレアに自治権を返還、その上で復興を目指すとの事。

結局、事件の真相は闇の中である……。

終節 墓碑

「世話になったな、アシユマ」

ビツシュ・ノマンがアシユマの手を握っていた。

「いや、お互い様だろ」

アシユマもビツシュの手を握りなおしていた。

「どうするんだ？　これから」

アシユマが訊いた。

此処はイルドラ発着ロビーである。

「さて、どうするか。職は無くなっちまったし……。まあ、何とかなるさ」

「困ったら、連絡なさい。連絡先はここに書いてあるから」

ヨデイが名刺を渡した。

「有難う、ヨデイ。貴方にも世話になった」

「いやいや、私は何もしていませんよ」

「ネルゼイ殿、貴方にもお世話になりました」

「う、うむ。謹慎もとけて目出度い。だが……ヨデイ！　見逃すのは今度だけだからな！　お前も、こいつの片棒担ぐんじゃないぞ！？」

「まあまあ、ネルゼイ様、ここは一つわたくしに免じて……」

アーチェルが取り成した。

「うむ、一国の王女の取り成しとあれば、仕方ない」

「フィナさん、貴女はどうなさるの？」

アーチェルが訊いた。

「私は皆さんに付いて行こうかな……とも考えたんですけど」
言ってフィナはアシユマの方を微笑みながら見た。

「動機が不純なので……」

アシユマの前に来て石段を登り、

「ちゅっ」

軽くキスをかわした。

「止めにしました。先生について行きます」

「……………アシユマさまああ」

アーチエルがアシユマに怒りをぶつけた。

「さて、アーチエル、何故、俺が怒られなきゃならん？」

「最近、隙が多う御座います！ 隙を作るは、剣者にとって命取りで御座います！」

「言ってる事が支離滅裂だぞ？」

「さてよ？ これで、アシユマにキスをしていないのは……………アタシだけか！？」

アルミナが言い出した。

「駄目です！ アシユマさまは、わたくしだけのものに御座います」
アーチエルが半分泣きそうになりながら、皆に訴えていた。

「……………で、余はどうしたらいい？」

ルーランが主張した。

「そつだ陛下！ どうしましょう。どうやってお返しすれば」

アーチエルは気を取り直して、ルーランがどうすればよいか考え始めた。

「王女も苦労症で御座いますな。余はここに残ろうと思う。帰っても、ガルマインのお飾りじゃ。そんな生活、もう飽いたわ！」

「ええっ??？」

全員が驚いた。

「それよりオルバニアンはどうしたのじゃ？ 何処にいったのじゃ？」

ルーランがオルバニアンの居所を訊いた。

「陛下、オルバニアンは……………」

ヨデイが説明を始めた。

イルドラの墓地の一角にオルバニアンはいた。

墓碑銘には歌姫、ノナ・イルマの名前が刻まれていた。

墓地には縦横に木が植えられ一種公園の趣があった。

オルバニアンは手にした花束をノナの墓に供えた。

「ノナ……君には済まない事をしたと思っている。もつとあの時、君のそばにいたなら、こんな事にはならなかったと思っている」

その時オルバニアンは微かな殺気を感じ取り、殺気を放つ方へ眼を向けた。

木陰から人が出てきた。

それはハルナ・ナリスだった。

「お前はいつかの女暗殺者……俺に何の用だ？」

オルバニアンは油断無く身を構えながら、ハルナの方へと向いた。
「お前は私から、ナラスティ様を奪った憎き奴。今ここで、ナラスティ様の無念を晴らす！」

ハルナは、オルバニアンに向かって言い放った。

ハルナの殺気が、更に膨らむ。

「そうか、お前、俺が仇なんだな？ ……一つ訊く。ノナの命を奪ったのはお前か？」

「そうだ！」

「そうか、なら仇同士だな。気兼ねなく殺れる」

オルバニアンも殺気をみなぎらせた。

お互いが抜刀の体勢を取った。

ハルナが走った。

オルバニアンも走った。

一氣に間合いが狭まり、生死の間仕切りを切った。

ハルナが抜刀した。

オルバニアンもやや遅れて抜刀する。

ハルナの剣がオルバニアンに迫る。

次の瞬間、ハルナの手首が斬られて飛んだ。

ハルナがこちらをくると向き、夜叉の形相でオルバニアンを睨む。

オルバニアンが拝み討ちに刀を振り下ろす。
ハルナの頭蓋は斬り割られ、くたくたと倒れた。
そこは、丁度ノナの墓前だった。
オルバニアンは刀に血振りをくれて言う。
「ノナ……、仇は取ったよ」
オルバニアンはそう呟いた。

第三話 了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5531f/>

閃光のアシュマ 第三話 イルドラとイルドリア

2011年11月23日12時52分発行